
フリーアの娘

瀬見尾津風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーアの娘

【Nコード】

N6640Y

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

最高神の宿り主だと告げられたユーティアは、都会から来た軍人シルフィネスにより保護され、イザヴェル城へと連れて行かれる。世界を揺るがしかねない事実とそれを握る鍵が自分自身であることに戸惑うユーティア。しかし、城ではそれまで遠距離恋愛をしていた彼氏ギュスターと再会、それまでとは全く別の生活が始まる。世界を創造した最高神を身体に宿す少女を巡る剣と魔法の物語。

プロローグ

視線を集めてしまった少年は、重い溜め息をついた。

「……すみません。でも、本当のことです」

呆れたり、同情したりと、様々な表情が少年へ向けられる。

やがて、リーダーである青年が口を開いた。

「詳しい事情は後で聞くとして、とりあえず話を進めましょう。私が王家に報告をしてきますので、シルフはすぐに空馬車の手配を。出発の前に打ち合わせをするので、終わり次第、本部にて待機して下さい」

「はい」

シルフと呼ばれた青年は返事をする、中央にいた少女をちらっと見やってから、足早に部屋を出て行った。

「ダリウスは侍女に話をして、迎え入れる準備をお願いします」

「了解」

と、茶髪の青年が部屋を出て行き、彼はその場に残った少年を見つめる。

「あなたは……」

ほんの少しためらった後、彼は言った。

「ミス・オードのお見送りをお願いします。その後は、本部へ戻って待機して下さい」

「……はい」

両目を閉じて呼吸をする。少年は気を取り直すと、少女のそばへ寄った。

「途中までお送りいたします」

「ありがとう」

その様子を見た青年は二人へ背を向け、廊下へ飛び出していった。

第一章 最高神の宿り主

愛するギュスター様へ

まず最初に謝ります、返信が遅れてしまつてごめんなさい。流行り病がとうとうこの村にもやってきて、村全体で大騒ぎになつていました。わたしはかろうじて病にかからずにすんだのだけれど、まだ気が抜けません。都会の方はもう大丈夫ですか？

特別部隊に配属されたということですが、どんなお仕事をしているんですか？ 毎日大変な仕事ばかりで体調を崩したりはしてませんか？ あなたのことがだから大丈夫だとは思うのですが、やはり心配です。あまり無理はなさらないで下さい。

話は変わりますが、つい先日、村の広場に立つ桜が立派な花を咲かせました。ようやくこの村にも春が来た、という感じです。今年もまた村のみんなでパーティをすることが決まり、わたしも手伝えることになりました。今からとても楽しみです。

他にも伝えたいことはたくさんありますが、そろそろ終わりにしたいと思います。それにあなたの事を考えると、なかなか筆が動いてくれなくなるので。……遠距離はやっぱり、辛いです。

あなたが今日も健康で過ごせますように。 アルグレーン村のユーティアより

* * *

「ユーティアお姉ちゃん、おはよう！」

と、後方から走ってきた少女が声をかけてきた。配達を終えてのんびり帰路に着いていたユーティアは、にっこりと彼女へ微笑み返す。

「おはよう、ヴィアンシュ」

ヴィアンシュと呼ばれた少女は、笑顔でユーティアを見上げた。

「今日のパンもおいしかったよ」

「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいわ」

二人の会話は数年前から習慣になっていた。村はずれに住むヴィアンシュは、配達帰りのユーティアと毎朝顔を合わせる。そのおかげで、二人は姉妹のように仲が良かった。

「それじゃあ、いってきまーす！」

と、ヴィアンシュが元気よく学校へ向かって走り出す。ユーティアは「いってらっしゃい」と、いつものように見送った。

広大な面積を誇るミッドガルド王国の東に位置するアルグレーン村は、とても穏やかなところだった。人口が少ない為に村人全てがつながりを持っており、日常生活を送るのに必要なことは全て村の中で済ませられる。時折、都会から療養のために村を訪れる貴族もいたが、村の人々は差別することなく受け入れてきた。そのおかげで移り住む者も少なくなかったが、その反面、若者の多くが都会へ出てしまっていた。

そんな中、今年で十七になるユーティアはパン屋の娘として両親の仕事を手伝っていた。朝は焼きたてのパンを配達し、昼間は店番をし、夕方になるとまた配達へ出る。それが彼女の生活だった。

「ありがとうございますー」

店の奥で父がパンを作り、ユーティアは一人店番に立っていた。太陽の高くなった昼間、店に訪れる客はもっぱら隣町や隣村の人々だ。

ユーティアはカウンター脇の椅子へ腰を下ろし、それまで読んでいた本の続きに目を向ける。――滅多に村の外へ出ないユーティアにとって、読書は旅行のようなものだった。自分の知らない場所や物、それらに関する知識を本から得るのが好きだった。たまには村の外へ出たいと思うこともあるが、家業のパン屋をユーティアは愛していた。

ふいに外で騒がしい音がし、ユーティアは顔を上げた。

「大変だよ、ユーティアお姉ちゃん！」

「何か変な人が来たよ!」

「早くお姉ちゃん、逃げて!」

口々に叫びながら、子どもたちが店内へ入ってくる。その中にはヴィアンシュの姿もあり、ユーティアは本にしおりを挟むとカウンターの外へ出た。

「みんな、落ち着いて。何があったの?」

少し困り顔で、子どもたちの目線に合わせて腰を屈めるユーティア。すると、一番幼い少女が口を開いた。

「あのね、がっこうからかえろうとしてたら空とぶしろいお馬さんがみえたの」

「それでそのお馬さんがね、村の方に降りてきて」

「そこから怖い人たちが出てきたんだ!」

と、子どもたちは続けた。

「怖い人たち?」

「軍人さんだよ! ユーティアお姉ちゃんを探してたの」

と、ヴィアンシュが答え、ようやく合点が行く。しかし何故自分を探しているのか、分からなかった。

「それで、その軍人さんは?」

ユーティアがまた問いかけると、ヴィアンシュは言った。

「おばさんが話を聞いてたから、その内に来ると思う」

子どもたちは一様に不安そうな顔をしていた。村の集会に出ていた母が話を聞いているというなら、母から話の詳細が伝わって来るはずだ。

ユーティアはにっこり微笑むと、子どもたちへ言った。

「みんな、そんな顔しないで。きっと悪い話じゃないわ」

「……でも」

と、何か言いたげな顔で見上げた少女の頭を、ユーティアは優しく撫でた。

間もなく店の扉が開き、ユーティアの母親が帰ってくる。

「聞いてユーティア、あなたに用があるそうよ」

一斉にそちらを向くと、母親の後ろには見たことのない青年が立っていた。

くすんだ緑色の軍服にすらりとした長身、一目で分かる育ちの良さ。店の外では部下と見られる軍服の男が二人、待たされていた。

「お初にお目にかかります、あなたがユーティア・サルヴァさんですネ？」

ユーティアは屈めていた腰を上げて背筋を正す。

「はい、そうですけど……」

子どもたちは怯え、母が不安そうに様子を見ていた。

彼は苛立たしげな様子で息をつく、ユーティアのそばで片膝を付いた。

「どうか、無礼をお許してください」

と、ユーティアの身に着けた淡い桃色のスカートを一気にめくりあげる。途端にほっそりとした白い脚が露わになると、その場にいた全員が驚きの声を上げた。

びっくりしたユーティアはとっさに悲鳴を上げ、手放されたスカートを両手で押さえる。

「な、ななな、何なんですか！ 何を、な、何の用があつてわたしなんかを！？」

青年は顔を真っ赤にするユーティアに構わず、淡々と用件を告げた。

「あなたを保護させてもらいます。これから私たちと一緒に来ていただけませんか？」

頭の中が真っ白になって状況が理解できない。唇を震わせるばかりのユーティアに青年がまた言う。

「これが正式な国王からの指令書です」

そして見せられた紙切れに、思いがけず視線をそらせなくなった。――それは初めて目にする代物だったが、国王の命令が下りているのに逆らうことは許されない。

「……わ、分かりました」

自分の知らないところで自分が何かに巻き込まれていると知って、ユーティアは気分が悪くなった。

自室で荷物をまとめていたユーティアは、先ほどの事を思い出して複雑な気分になっていた。女性が人前で必要以上に肌を晒すのは恥ずかしいことだった。異性の前であれば、なおさら恥である。

洋服を詰め終わると、ふと机の上に置いた木箱に目が行った。おもむろに両手を伸ばして箱を近くへ寄せる。そつと蓋を開ければ、この二年間で溜まった手紙の山が視界を埋めた。――それは王都イザヴェルで軍隊に所属している恋人からのものだった。もしかすると久しぶりに恋人と会えるかもしれない。そうユーティアは期待するが、それでもあまり気分は変わらなかった。

「……鞆に入るかな」

ユーティアは手紙をいくつか取り出して鞆の中へ入れようと試みたが、それだけの余裕はもうないようだった。最低限必要な物を入れただけなのに布製の鞆はすっかり膨れている。

溜め息について手紙を木箱へしまう。――どうせ用が終われば故郷へ帰してもらえらるだろうし、わざわざ持つていくこともないだろう。

身だしなみを整えて居間へ降りると、両親が暗い顔をしていた。店はすでに閉店したらしい。

「もう支度は済んだの？ 都会へ行くんだから、ちゃんとお行儀良くするのよ。それと、あまり人様に迷惑かけないようにね」

母はそう言ってユーティアの服装を整えてやる。

「大丈夫よ、そんなに心配しないで」

と、ユーティアは鞆を肩にかけなおした。椅子に座っていた父がこちらに視線を向け、にっこりと笑う。

「何があっても自信を失くすんじゃないぞ。もう子どもじゃないんだから、しっかりな」

「さあ、もう行きなさい。村の外で待っている兵士さんたちを、こ

れ以上待たせるわけには行かないでしょう」

親元を離れるのはユーティアにとってこれが初めての事だった。この村で生まれ育ち、遠出する時はいつも家族と一緒にだった。

「うん、ありがとう。それじゃあ行ってきます」

と、ユーティアは玄関の扉を開けた。――不安や心配はあるけれど、行かなくてはいけない場所があるのだから行くしかない。わたしは大丈夫なもの。

家を出て歩き始めると、噂を聞きつけた村の人々が口々に声をかけてきた。ユーティアはいつものように笑顔で彼らに応えながら、村の外にある馬車を目指して進む。

目的地が目と鼻の先になったところで、ふと背後から声がした。

「ユーティアお姉ちゃん！」

振り返ると、今にも泣き出しそうなヴィアンシュがいた。どうやら走ってきたらしく、息を切らしながらこちらを見つめている。

「これ、あげる」

と、ヴィアンシュは右手に握ったものをユーティアへ差し出した。そちらへ手の平を向けると、可愛らしい木彫りの花のペンダントが手渡された。真ん中にはまった赤い石が沈み行く夕陽に照らされて、きらりと輝く。

「……ありがとう、ヴィアンシュ」

にっこりと微笑んでそう返すと、ヴィアンシュは嬉しそうに泣くような笑顔を見せた。

「早く帰ってきてね、みんな待ってるから」

故郷を離れる事がこれほど辛いものだとは思わなかった。彼女に背を向けて歩き始めたユーティアは、人知れず溜め息を零す。そして再び前を向き、青年たちの待つ馬車へと急いだ。

羽の生えた白馬ペガススが引く馬車に乗り込むと、隣にあの青年が座った。別れの名残を惜しんでいたユーティアは、ただヴィアンシュにもらったペンダントを握りしめた。

「故郷を離れるのは寂しいですか？」

ペガススが走り出し、馬車が宙へ浮く。魔法石が車体に取り付けられているのだろうが、それにしては不思議な安定感があった。

「……はい、ずっとあの村で生まれ育ちましたから」

青年は口を閉ざした。素朴な村娘を連れ出した事に、ようやく後ろめたさを感じたようだ。

「でも、大丈夫です。大事な用があるのでしょう？ それなら仕方のない事です、試練だと思って耐えます」

青年が横目にユーティアを見た。何か考える様子を見せてから、口を開く。

「その事なんですが、詳しくお話ししましょう」

窓の外はもう夜になっていた。ユーティアは青年の声に耳を傾ける。

「先ほどのことですが、あれは、あなたが神の宿り主であることを確認させていただいたのです」

「え？」

首を傾げるユーティアに青年は言う。

「あなたが生まれつき右腿に持っている、その青いあざです。それは伝承どおり、古代文字で【神】【人】【守護】の三つが重なった形をしています」

ユーティアは右腿に触れた。あざのある辺りを服の上から撫でて、考える。これが神の宿っている証……？

「この世界に伝わる神話はご存じですか？ 最高神アルファズルが、悪神ローズルにその座を狙われ、女神フリーアの手引きにより逃げ出した、という話です」

「……はい、知ってます」

「アルファズルは女神によって眠らされ、人間界へその魂を落とされました。それ以来、悪神は最高神を狙うのをやめたと言われています。しかし、女神は最高神を護るため、この世界の安定を護るために、今もどこかで私たちを見ていると言います」

幼い頃に本で読んだ記憶がある。ユーティアは神の存在を信じて

いたが、あまりにも現実離れしていて理解が出来なかった。

「最高神の魂は、生と死を繰り返す人間の中を渡り歩いています。何もなければいいのですが、ここ最近、闇魔法を会得する者が何人も逮捕されるようになりました」

「闇魔法って……」

「ええ、百年ほど前に禁忌に指定された魔法です。彼らは何らかの意図を持って行動していると推測されています。それはもしかすると、最高神の宿り主であるあなたに関わる事かも知れません」

ドキッとした。闇魔法が自分を狙っている？　けれども、そんなこと――。

「本当に、わたしなんですか？　右腿のあざなんて、探せばいくらでもいるでしょう」

「気持ちとは分かりますが、どうか信じて下さい。あなたこそが、本物の最高神の宿り主なのです」

青年の冷静な黄緑色の目が怖かった。ユーティアは俯いて、唇をぎゅっと結ぶ。

「あなたの中にいる最高神を目覚めさせてしまったら、悪い者たちが次々とアルファズルを狙うでしょう。そうでなくても、最高神の力を欲しがる者は多くいます。この世に目覚めた最高神は、再び世界を創造しなおす可能性だってあります。そうなれば、本当にこの世界は終わってしまうのです」

「――え？」

頭が混乱したユーティアに、青年は淡々と告げた。

「あなたがこの世界の命運を握っている、という事です。あなたの宿している最高神が目覚めたら、何が起こるか分かりません。その目覚めと共に、悪神が再び動き出すことだって考えられます」

信じられなかった。自分が世界にとって大事なものになるだなんて、なんて嫌な夢だろう。ましてや、今の時代、神の姿を見た者は一人もいない。何百年もの間、神々が姿を現していない中、最高神を宿したユーティアが狙われるだなんて。

「闇魔法の勢力についてはまだ調査中ですが、あなたを放っておくことは出来ません。私たちもまだ、混乱しているんです。どうか、事実を受け止めて下さい」

と、青年は言った。

夜空を駆ける馬は速度を増し、星々の下を颯爽と走る。ユーティアは広がる景色に目もくれず、ただ現実と葛藤していた。これから、どうなってしまうのだろうか？

「……まだ道のりは長いです。到着は明日の午後になるでしょうから、少し休んではどうですか」

ユーティアの様子に気がついた青年は、そう言って彼女を見た。はっとして顔を上げると、彼の視線にぶつかる。

「ええ、そうですね……。ありがとうございます」

そう返して、ユーティアは楽な姿勢に座りなおすと両目を閉じた。

第二章 特別神衛部隊

ペガススが地に足をつけた時には太陽がほぼ真上に上っていた。

「イザヴェルに着きましたよ。さあ、私についてきてください」

青年の手をとって馬車から降りると変な匂いがした。村ではかいだことのない、都会特有の香りだ。

頑丈そうな石造りの建物が立ち並び、街の中央にはとびきり高い建物が建っている。どこを見ても賑やかな声が聞こえてきて、静かなアルグレーン村とは大違いだと思う。

「ユーティアさん、観光なら後で時間をあげますから、今はちゃんとついて来てください」

と、名前を呼ばれて我に返る。見ると青年は数歩先で自分を待っていた。

「あ、ごめんなさい」

慌てて彼の後ろにつき、魅力的な街とは反対の方向へ進んでいく。整備された道の先には王城が佇んでいた。その荘厳さに、ユーティアは無意識に緊張する。

「ここが都市の名前にもなっているイザヴェル城です。前面に見える南の棟は舞踏会に使われる広間と多くの客室が備えられ、右手の東の棟は軍の本部になっています。左の西棟は国の政治が行われる議事堂を備えており、上階には政治家たち専用の寮もあります。そして一番奥の北の棟は、国の象徴である王族が住む住居になっています」

青年の説明を聞きながら、ユーティアはますます緊張していた。一生見ることがないと思っていた王族の住居がすぐそこに広がっているのだ。どこからともなく好奇心が湧き出てきて、今にもはしやぎだしたくなる。

「城内はとても広く迷いやすいので気をつけてくださいね。棟ごとに柱や廊下の装飾が違うので、自分のいる位置が分からなくなるこ

とはないでしょうが、この城を初めて訪れる者は必ず迷うと言います」

堀の上にかけられた橋を渡り、重々しい城門へ近づいて行く。番をしていた兵士たちは青年の顔を見ると、すぐに城門を開いてくれた。

荘厳な装飾、高い天井から降りるシャンデリア、きらきら光る床と壁と柱と……初めて見る立派な建物に、ユーティアは見入っていた。

「ユーティアさん」

と、再び名前を呼ばれてはっとする。今はそれどころではないと分かっているのに、身体は正直な反応を示していた。

「ごめんなさい……」

つい恥ずかしくなって自然と顔が俯いてしまった。青年は何も言わず、正面の階段を上り始める。

大理石と思われる階段は高級な雰囲気を出していて、一步踏むたびに何故だかドキドキしてしまう。手すりも同じ石で出来ているらしく、自分がここに居るのは場違いのように感じられた。

階段を上りきり大きな扉を開いて廊下へ出る。落ち着いた赤色を中心とした装飾の数々に見惚れかけたユーティアは、今度は立ち止まらずに歩みを速めた。今は先を急がなければならないのだ。

廊下を左へ行き、途中にあった階段を上へ上がる。道のりは長く、複雑な道順でいくつもの階段と廊下を通ったところで、装飾の色が赤から青へ変わった。先ほどとは違い幾分か派手になっている。――さすが王族、普通とは違うってことね。

それからまた今度は階段をいくつか下へ降り、廊下の途中にあった扉の前でようやく青年は立ち止まった。

「私の仲間がこの中で待っています。普段は王族専用の会議室なのですが今回は特別に貸していただきました。一応防音壁を備えています。どうか大声を出さないようお願いします」

と、青年は言い、ユーティアはただ頷き返す。大声を出すような

真似は普段の自分でもしないのだけれど、それだけ驚くことが待っているのだろうか？

ユーティアは疑問に思いながらも、ただ青年が扉を叩く音を聞いていた。

最初に見えたのは黒い木の机だった。奥の左側に男性が二人いて、その向かいには銀髪の眼鏡をかけた青年が座っていた。

「おかえりなさい、シルフ」

と、銀髪の彼がこちらを見て口を開き、シルフと呼ばれた青年に促されてユーティアは中へ入る。

左側に座っていた男性の一人は健康的な茶髪で軽そうな雰囲気だ。その奥にいたもう一人には、見覚えがあった。

「……ぎ、ギュスター!？」

その姿に気づいたユーティアは思わず大声を出していた。青い黒髪の彼と目が合い、胸が急に熱くなる。

「だから大声を出すなと……」

シルフの呆れ声にも構わずに、ユーティアはギュスターのそばへ寄って行く。

「まさか、こんなところで会えるだなんて！ 何で、どういうこと？ わたし、もう何が何だか分からなくて……っ」

ギュスターは微妙な顔をしながら、今にも飛びついてきそうな彼女へ言う。

「とりあえず落ち着け、ユーティア。詳しいことは後で話すから、今は静かにしててくれ」

「え、あ……ごめんなさい」

と、ユーティアは気を沈ませる。

そんな二人には構わずに、銀髪の彼が口を開く。

「ユーティア・サルヴァさんですね？ まずはこちらにおかけください」

と、勧められたのは中央の椅子で、すぐにユーティアはそこへ腰

を下ろした。

よく見ると室内にいるのは四人の男性たちと自分だけだった。…不思議な感じだ。

「すでにシルフから話は聞いたと思いますが、改めて簡単に話をさせてもらいますね。あなたはこの世界を創造した最高神の宿り主であり、闇魔法を使用する者たちが日に日に勢力を増してきています。彼らが神の宿り主であるあなたを狙うのも、時間の問題でしょう。

そういった事情から、こうしてあなたを保護させていただきました」
銀髪の彼は分かりやすい言葉で簡単にそう説明をしてくれた。透き通るような美声のおかげで言葉がすぐ頭に入ってくる。

「闇魔法の勢力が消えてなくなるまで、あなたにはこの城内で生活してもらいます。王家からはすでに許可が下りているので、心配はいりません。そしてあなたに何かあっては困るので、これからは毎日、私たち特別神衛部隊が交代で護衛係を務めさせていただきます」
特別神衛部隊——軍に所属する人間の内、選ばれた者だけで編成された部隊——、そういうえばギュスターの手紙に書いてあった名前だとユーティアは思い出す。返信の手紙では勝手なことを書いてしまったけれど、このために作られたものだとなると、何だか申し訳ない気持ちになった。

「申し遅れましたが私はこの部隊の隊長、サジェスライト・ノア・エルフィリッド・アデュートールといいます。短くノアと呼びください」

と、銀髪のノアが自己紹介をすると、その隣に座ったシルフが口を開いた。

「私は副隊長のシルフィネス・ヴァリ・オードです。名乗るのが遅れて、大変申し訳ありませんでした」

そしてギュスターの隣にいる茶髪の青年がにっこりと笑顔を浮かべて発言する。

「私はダリウス・ジュニーウィック・パシェイソンと申します。以後お見知りおきを」

こうきたら、次はギュスターの番である。個人的には深く知った仲であるが、仕事上の都合で改めて名乗らなくてはいけない。

「私はギュスター・フォルセティ・ファールバードと申します」

と、今までとは違った恋人の一面にユーティアは妙な気分になった。その流れを受けて、自分も名乗る。

「ユーティア・サルヴァです。これから、よろしくお願いします」

すると、ギュスター以外の全員が彼女を見て小さく頷いた。みんな良い人そうではあるが、ユーティアは少し不安だった。

「早速部屋へご案内させていただきますが、何か質問はございますか？」

と、ノーアが問い、ユーティアは遠慮がちに返す。

「わたしはただ保護されているだけなんですか？ 何か、することはないんですか？」

ノーアは言った。

「伝承によると、神の宿り主はいざという時に力を発揮するそうですが、今現在は静かに守られていてくだされば十分です」

彼らの案内で廊下を歩いている途中、ダリウスが話しかけてきた。「どうせ付き合いは長くなるんだから、無理して慣れようとしなくていいよ。聞きたい事があれば何だって答えてあげるし、わがままも少しくらいなら許されるぜ」

雰囲気そのままの軽い調子の台詞にユーティアは困惑してしまう。今までこんな風に優しくされた経験がなかったのだ。

「ダリウス、あんまりユーティアに近寄るな」

と、ギュスターがダリウスを睨みつけ、間に挟まれたユーティアは嬉しいような嬉しくないような気になる。

「分かってるよ、そんなに怖い顔するなって。お前こそ、恋人がそばにいるからって、浮かれて仕事おざなりにするなよな」

前に行くシルフがちらりとこちらを振り返り、ノーアが注意をする。

「ギュスター、ダリウス、お二人とも喧嘩はなさらないでください。ユーティアさんが可哀想ですよ」

ダリウスが口を閉じ、ギュスターはユーティアに小さな声で「ごめん」と、詫びた。

「それにここは王族の住居なんだから、失礼なことはするな」

と、シルフも二人を注意した。彼の第一印象は最悪だったが、意外と礼儀にはうるさい人らしい。

階をひとつ下りたところですぐにその部屋にたどり着いた。上部に横長の四角いガラスのはめ込まれた立派な扉が目印だ。

ノーアが取っ手に手をかけてゆっくりと扉を開く。清潔な白い床と壁が視界に飛び込み、ユーティアは一瞬我を忘れそうになった。

「お待ちしておりました」

室内にいた背の高い侍女がそう言って頭を下げる。部屋に入ったユーティアは、きよろきよろと周囲を見回すばかりだ。

「彼女はメイリアス・バースン、あなたの身の回りを世話する侍女です」

と、ノーアが彼女を紹介し、ユーティアはメイリアスへ向き直る。「掃除洗濯、何でもいたしますので、御用があれば何なりと申してください」

見たところメイリアスとは年齢が近そうだった。自分と同じ年頃の女性だと分かると、少しだけユーティアは気が楽になる。

「食事は毎回この部屋でおとりください。今日はまだ慣れないでしようから、ギュスターを護衛係に、明日からこちらの決めた順番で護衛を始めさせていただきます。分からないことがあれば、近くにいる者に尋ねてくださいって構いませんので」

ノーアはそう言うのと扉の方へ戻り、シルフとダリウスと共に礼をした。

「それでは、私たちはここで失礼させていただきます」

と、三人が部屋から出て行く。

残されたユーティアがギュスターに目を向け、侍女のメイリアス

は二人を気にすることなく、ユーティアの荷物を取り上げた。

「お前が神の宿り主だと分かったのは四日前のことなんだ。特別神衛部隊に配属された時はこんなことになるとは思わなかった」

赤い布の敷かれた丸い机を挟み、木製の椅子に腰を下ろして二人は向かい合う。

「じゃあ、これは本当に偶然ってこと？」

「ああ、そうだ。だから正直、俺も戸惑ってる。ユーティアと会えたのは嬉しいが、世界的な危機にお前を巻き込んでしまうのは嫌なんだ。それに、今はまだ確かな情報が少なくて混乱している」

不思議なめぐり合わせにユーティアとギュースターはしばらく黙り込んだ。メイリアスだけが忙しく働いていて、やがて彼女は部屋から出て行った。

「でも、前向きに考えなきゃ。こうして一緒にいられるのは、すごく良いことでしょ？ わたしは嬉しいと思うわ」

不安を心の奥に隠し、ユーティアは微笑んだ。そんな恋人が切なくて、ギュースターは胸を痛めてしまう。

「あまり無理するな、俺の前では素直にして良いんだぞ」

そう返すと、ユーティアの顔がわずかに歪んだ。やはりまだ気持ちの整理が上手くつかなくて不安定になっていたようだ。

「ギュースター、わたし……」

と、涙声が言って半泣きになる。ギュースターは椅子を立つと、ユーティアのそばへ寄ってその華奢な身体を抱きしめた。

「ユーティア」

そのうちに嗚咽する声が室内に響き、しんみりした空気が二人を取り囲む。久しぶりに感じる恋人の温もりに、ユーティアは涙を止めることが出来なくなっていた。

メイリアスが二人分の昼食を運びに部屋へ入ってきた頃には、ユーティアの気分はだいぶ落ち着いていた。

目の前に並べられたのは、美しい食器と見た目にも鮮やかな昼食だった。ユーティアがそれに見惚れている間に、カップに紅茶が注がれて甘い香りが立ち込めた。

「こんな食事、初めて……」

と、ユーティアは呟き、ふと顔を上げて問う。

「ギュスターも、毎日こんな物食べてるの？」

「いや、軍の食事はもう少し格下だ。ここには王家と同じ物が出されているはずだから、国内で最上級の料理、ということになる……」

どうやらギュスターもその豪華さには驚いたらしく、そう言うときこちなく食事を始めた。礼儀作法なんて分からなかったけれど、ユーティアも彼に習って食事に手をかける。

食事の最中は二人とも無言だった。音を立てることは無礼なことであり、貴族の生活に慣れていたギュスターはまだ良かったのだが、地方から出てきたばかりのユーティアは無駄に神経を使っていた。料理の美味さに感動しつつ、気をつけて食べ物を口へ運ぶ。それでも時折音を立ててしまうことがあったが、近くで見守っていたメイリアスは何も言わなかった。

空腹が満たされると再び睡魔が襲ってくる。メイリアスが片付けを終えて部屋を出て行くと、ユーティアがかみ殺そうとしていたあくびを漏らす。

「眠たそうだな、ユーティア。……少し、眠ったらどうだ？」

と、ギュスターが言う。

ユーティアはぼーっとする頭を振りきりながら立ち上がり、ギュスターへ言った。

「ううん、これくらいならまだ我慢できるわ」

そしてまたあくびを漏らす。ギュスターは立ち上がると、彼女をベッドへ誘導した。

「眠った方が良い。疲れてるだろ？　ちゃんと起こしてやるから眠れ」

「……うん、分かった」

しぶしぶ頷いたユーティアはベッドに腰を下ろし、その靴をギユスターが脱がしてやる。ベッドへ横になったユーティアはまたあくびをした後、眠たそうな声で尋ねた。

「ずっと気になっていたんだけど、特別神衛部隊って何なの？　みんな軍の人よね？」

そっと毛布をかけてやりながらギユスターは答えた。

「ああ、四人とも軍人だ。ノーアは将官で一級魔法使いでもあり、シルフは参謀の人間で二級魔法使い、ダリウスと俺は中尉だが能力を買われて選ばれた」

と、ベッドの端に腰を下ろす。ユーティアはだんだんと遠のいていく意識を無理やり捕まえて再び質問をした。

「魔法使いが二人もいるのね、彼らはどんな人たちなの？」

「そうだな、知り合ったのが三ヶ月前だからまだ分からないことの方が多いが、みんな良い人だ。一番年上のノーアはしっかりしていて、頭の回転も速い。シルフはああ見えて博士号を取得していて――」

久しぶりに聞く優しい声に安堵した途端、捕まえたはずの意識が急激に遠ざかって行ってしまった。ベッドの白い敷布団が見えなくなり、ギユスターの声が途切れ途切れになる。身体が宙に浮くような感覚がすると、ユーティアは何も考えられなくなった。

「魔法使いのうえに魔法石の扱いも……、眠ったか」

ギユスターは話すのをやめて、無邪気な寝顔を静かに眺めた。

＊ ＊ ＊

静かな朝だと、目覚めて思った。

「おはようございます、ユーティアさん。ぐっすり眠っておられたようですが、気分はどうですか？」

聞き慣れない女性の声に、冷め切らない頭がうつろに声を発する。
「悪くはないけれど、何だか不思議な……」

天井の白とふわふわの布団にユーティアははっとした。慌てて上半身を起こすと、侍女がすぐそばに立っていた。

「大丈夫ですか？　もう朝ですよ」

と、メイリアスがにっこりと微笑む。恋人の姿はすでになく、何故だか嫌な感じがして眠気が一気に吹き飛んだ。

「予定では七時にダリウス様がいらっしゃいます。朝食は七時半からです。通常の起床時刻より少し早いですけれど、まずは服を着替えましょうか」

ユーティアは昨日の昼間に眠った後から今まで記憶がないことから、自分が相当長い時間眠ってしまった事に気づく。しかしメイリアスは何も言わず、部屋の隅にある衣装棚へ意気揚々と向かって行った。

とりあえずベッドから出たユーティアは、どうしようか迷いながら彼女の方へ歩み寄る。

「明日か明後日には特別注文した服が五着ほど届くので、それまではすでにある物で済ませますが、これからは城内にふさわしい格好をするようにお願いしますね。この部屋で生活するからには、ある程度の礼儀を覚えていただかなければなりません」

そしてメイリアスは薄い桃色のワンピースを取り出し、ユーティアへ顔を向けた。

「まあ、ぶっちゃけて言うと、あたしはあんまり気にしないんだけどね」

唐突な態度の変わりように、どう反応を返せば良いのか分からなくなる。

メイリアスは困惑するユーティアに優しく微笑むと、また言った。「本当はあたし、貴族とか王家の下に仕えるのは好きじゃないの。だから、今回はこうして、普通の女の子の世話役に任命されて、すごく気が楽なのよ。どうせあなた、貴族の生活には慣れていないんでしょう？」

「は、はい。都会に來たのも、初めてです……」

そう答えるとメイリアスは嬉しそうに頷いた。

「じゃあ主従関係はなくしてお友達ということで仲良くしましょう。さあ、服を脱いで」

ユーティアはまだ戸惑いを隠せずにいたが、言われたとおりに着ていた服を脱ぐ。慣れない他人の前で下着姿になるのには抵抗を感じたが、仕方ない。

「綺麗な肌してるわねえ、白いし細かいし……胸も大きくて羨ましいわ」

と、メイリアス。恥ずかしくなったユーティアはとっさに両腕で胸を隠した。

「ふふ、恥ずかしがらなくて良いのよ。さあ、足をどうぞ」

と、ユーティアの気持ちを無視するように、メイリアスは楽しそうに促した。

誰かに着替えを手伝ってもらう事など今までにない経験だったので、始終戸惑ってばかりだった。どうにかワンピースに着替え終わると、メイリアスは服をかごへ入れ、ユーティアへ言った。

「次は髪の毛を梳かすから、そこへ座って」

鏡台の前にある椅子を指差され、ユーティアはすぐにそこへ腰を下ろす。その後ろに立ったメイリアスは引き出しから木製の立派なくしを取り出した。

「普段、髪は結っているの？ それともこのまま？」

ユーティアの明るい茶髪に優しくくしが入る。上から下へと、ゆっくり梳かされていく感覚に、少し身を震わせながら返事をした。

「基本的には、結っていません」

「あら、そうなの。たまには結ってみると気分が変わるわよ。もう少し伸ばせば色んな髪型が出来るでしょうし、恋人と会う時くらいはお洒落しなきゃ」

と、メイリアスはにこっとする。鏡越しの笑顔にドキッとしたユーティアは、思わず目をそらした。――肩に付くか付かないかくらいのもつすぐな髪の毛、左で分けた前髪が頬にかかっている。

「もしやりたい髪型があったら、注文してくれて良いわよ。髪飾りだって、頼めば買いつけてくれるはずよ」

一通り梳かし終えらると、メイリアスは再び引き出しを開けて銀の髪留めを取り出した。

「ほら、髪飾りをつけただけでも印象が変わるでしょ？」

それで前髪を横に留めると、いつもと違う自分に会えた気がした。
「……そうですね。わたし、あんまりお洒落ってしたことなかったです」

「じゃあ、これからは思う存分お洒落を楽しみましょう。欲しい物があつたら何でも言つて、すぐ上に頼んで買わせるから」

と、メイリアスがにっこり笑った。

メイリアスはユーティアに様々なことを教えてくれた。そうして二人で盛り上がっていると、ふいに扉を叩く音がした。メイリアスがとっさに座っていた椅子を立ち、ユーティアは緊張して座り直す。
「おはようございます、ユーティアさん」

と、入ってきたのはダリウスだった。メイリアスが部屋の中を片付け始め、ユーティアは返事を返す。

「お、おはようございます、ダリウスさん」

まだ慣れていない相手なので、どうにもぎこちない挨拶になってしまった。しかし、ダリウスはにこっと笑ってくれる。

「昨日はよく眠れたかい？ ギュスターの話によると、昼寝のほすがどんなに声をかけても起きなくて、今日になっちゃったらしいね」
楽しいおしゃべりですっかり忘れていた申し訳ない気持ちが目を覚まし、ユーティアは思わず俯いた。

「す、すいません……わたしも、そんなつもりなかったんですけど、気づいたら朝で」

「謝らなくっていいよ。慣れない場所に来て疲れちゃったんだろ？
しょうがないことさ」

と、気さくな様子でダリウスは言うど、ユーティアの向かいの席へ腰掛けた。洗い物の入ったかごを持ちあげ、メイリアスが部屋を

出て行こうとする。

すると、すれ違いざまにダリウスが彼女へ声をかけた。

「おいメイリアス、そんなに固い顔しながら仕事するなよ」

扉の数歩前で立ち止まったメイリアスは顔だけ向けて言い返す。

「お言葉ですが、あたしには笑顔で仕事するだけの余裕がないんです。ダリウス様」

互いにむっとした表情を浮かべ、メイリアスが「失礼しました」と、部屋を出て行く。

そして二人きりになると、ユーティアは疑問を口にした。

「あの、お二人は知り合いなんですか？」

ダリウスはユーティアの顔を見ると、微妙に口角を吊り上げてみせる。

「知り合いつていうか、ただの腐れ縁だよ。オレが軍に入った時に、あいつもちようど侍女としてここで働き始めて、それから何度か城内ですれ違ったりしてるうちに、今みたいな関係になっただけさ」
本当にそれだけなのだろうか、と、ユーティアは思ったが、口にはしなかった。

ダリウスが軍服のポケットから一枚の紙を取り出して言う。

「えーと、護衛のことなんだけど、オレの次にノーマ、ギユスター、シルフの順番になってるから覚えておいて。それと、今はまだ闇魔法の奴らも表立った行動はしていないから城内をうろつくことは可能で、街に出る時は事前にノーマの許可を取ること。分かった？」

「……はい」

行動に制限がかけられるのは守られている証拠なのだろうと、少しだけ苦く思う。

「これは国のしていることだけど、その責任は全てノーマにあるから気をつけてくれよ。これから何があるかなんて分かんないし、奴らが戦争を起こす可能性だってないとは言えない。まあ、オレたちが付いているから大丈夫だとは思っただけだね」

と、ダリウスはまた笑顔を作った。そして壁にかけられた振り子

時計をちらりと見やってから話題を振ってくる。

「ところでユーティアは、今まで何の仕事してたんだい？」

ユーティアは質問に答えようとしてはっとした。ヴィアンシュからもらったペンダントを鞆にしまったまま放置していたのだ。

「パン屋です。両親の仕事を手伝っていたんですが、自分ではほとんどパンを焼いたことがなくて、いつも店番していました」

と、室内をきよろししながら言う。自分の鞆はメイリアスがどこかに仕舞ってしまったらしく、見当たらない。

「へえ、パン屋か。何だか面白そうだね」

ダリウスが相槌を打つのと同時に、ユーティアはベッド脇の小棚の上に何かが置かれているのに気が付いた。あの木彫りの花のペンダントだ。

立ち上がって小棚に向かったユーティアはすぐにそれを手にとった。両手で包みこむようにし、失くしていなくて良かったと安心する。

「あの、これ仲良くしてた女の子からもらったんです」

と、席へ戻り、嬉しそうにダリウスへそれを見せる。ダリウスはあまり興味がなさそうにペンダントを眺めると言った。

「良かったじゃん、オレにはあんまりよく分らないんだけど」

率直な台詞にユーティアは顔を俯かせ、心の中で自分を責めてしまう。相手は男性で軍人だ、ヴィアンシュのペンダントの良さを分かってくれることなんかないと分かっていたのに、自分は何をしているんだろう。

分かりやすく落ち込んだユーティアにダリウスは慌てて声をかける。

「あ、でも子どもが作ったにしては素晴らしい出来だな。デザインもシンプルだし、なんてゆーか……素朴で良いと思うよ」

ユーティアは顔をあげてペンダントに目をやると言った。

「いえ、そんなに褒めていただかなくて結構です。ちなみにこれ、その子が作ったものじゃないですよ。彼女の家が雑貨を作って稼い

でいるので、その中のひとつだと思います」

ダリウスはしまったと思った。分かりもしないで勝手に物を言うから、こんなことになってしまうのだ。

「……そっか、ごめん」

「いえ、気にしないで下さい」

微妙な空気が流れ、二人とも黙り込んでしまう。互いに何も知らない状態であることに少なからず壁を感じていた。

ふいにユーティアは鏡台の前へ行き、ペンダントを首にかけた。その姿を鏡越しに見たダリウスは何か言おうとしてためらう。

ユーティアは綺麗に整えられたベッドに腰掛けて、適当に窓の外へ目を向けた。

「どうやってギユスターとは知り合ったんだい？」

唐突な問いにユーティアは遠くの空を見ながら答えた。

「十年ほど前に、彼が家族と一緒に村に越してきたんです。アルグレーン村は昔から移住者の絶えない村なので、それで彼と出会いました」

ダリウスはただ彼女の背中を見つめていた。

「じゃあ、恋人になったきっかけは？」

あまり深く知っても意味のないことだとは分かっていたが、場を繋ぐには尋ねるしかなかった。

「村は小さかったので、すぐに友達になりました。彼が貴族の子だと知っていましたが、村に差別や偏見はありません。みんなが平等に生活し、彼のお母さんは家の店を気に入って鼯^{ひいき}にしてくれました。だから、惹かれあう者同士が恋仲になるのも自然の成り行きでした」

ユーティアがちらりとダリウスを見やる。

「……ダリウスさんは、確か中尉なんですよ？ 能力を買われてこの部隊に選ばれたって聞きました」

ふいに発せられたユーティアの言葉に、ダリウスは現実へ引き戻される。

「ああ、そうだけど」

「弓術、やっていらしてるんですね」

と、ユーティアはダリウスの背中にある弓筒を見つめて言った。
どうやら彼女は自分に興味を持ってくれたらしい。

「ああ、本当は魔法使いになりたかったんだけど才能がなくて、その代わりに弓術を極めてみたらこうなったんだ。ちなみに、魔術検定は四級だよ」

人は魔法技術検定——略称・魔術検定——で自分の力がどれほどの物か知ることができた。一番多いのが五級である十五歳までに誰もが持ちうる魔法技術であり、それより上には努力した者と才能のある者しか取得できなかった。ちなみに、魔法使いと呼ばれるのは二級からである。

「わたしは五級です。特にやりたい事もなかったから、何もしてないんです」

そう言ってユーティアが少し笑った。ふと、彼女に嘘はつけないかもしれないな、とダリウスは思う。

「ああ、なるほど。家業を継ぐのに魔法は必要だもんな」

と、ダリウスは納得する。空気が先ほどよりもずっと和らいでいた。

「そういえば、ダリウスさんはおいくつなんですか？」

「オレは今年で十九歳になるよ。ユーティアは十七だろ？ ギュスターから聞いた」

「あ、そうなんですか。じゃあ、部隊の中で一番年下なのは、彼なんですわね」

「うん、そうだな。でもあいつ意外としっかりしてるし、剣術で右に出る者はいないって言われてるから、あんまり考えたことはないな」

「そうですか……最初の頃は、無愛想で付き合いにくかったでしょう？ 彼も、わたしと同じで人見知りするんです。最近はどうか分かりませんが、人嫌いなところもあるので、一緒にいてやりにくか

ったりしませんか？」

するとダリウスは声をあげて笑った。

「ははっ、確かに出会った頃は何も言わないし、返事も短くてやりにくかったな。だけど今はもう慣れたから、気楽に話が出るよ。ユーティアが心配することはないと思うぜ」

ユーティアはほっとしてダリウスへ言う。

「それは良かったです。だけど、彼が誰かに迷惑をかけていたら嫌なので、やっぱり心配になっちゃいます」

「本当に良い子だなあ、ユーティアは。君も人見知りするって言うけど、ギュスターの方が重症だと思うね。あいつ笑わないしさ」

「あ、笑わないのは恥ずかしがっているだけですよ。わたしはよく分からないんですけど、人前で笑顔になるのが嫌なんだそうです」
そう返すとダリウスは目を丸くした。

「え、そうなの？　へー、あいつ恥ずかしがりなだけか。意外と可愛いとこあるじゃん」

「はい、だからあんまり彼を悪く言わないで下さいね」

と、ユーティアが微笑む。ダリウスはそんな彼女を見て、思ったことを口にした。

「神の宿り主が君で良かった」

ユーティアは思わず首を傾げた。

「どういうことですか？」

「んー、なんてゆーか……長い時間一緒にいても退屈しないっていうか、守りがいのある女の子だなんて、ふと思っただけさ」

と、にっこり笑う。どう反応して良いか分からなかったユーティアは俯き、ダリウスが何か言うのを待っていた。

「女神フリーアもよくこんなことしたよな。世界を守るために最高神の魂を人間界に隠して存続させて、なのに自分たちはまったく姿を見せないおかげで、こうしてオレたち人間が大変な思いしてるんだぜ？　宿り主の君なんかは特に荷が重いだろ？」

ダリウスはじっとユーティアを見つめていたが、ふいと目をそら

す。

「でも、一番辛いのはギュースターなのかもな。大事な人が安心して生活できないでいるのは見てられない……それでも君を守ることが使命なんだから、その使命をまっとうするしかないんだよな」

たぶん、自分の大事な人が神の宿り主だった場合のことを考えているのだろう。ユーティアは顔を上げた。

「やっぱり大事な人は巻き込みたくありませんよね。それならわたしは、こうなった経緯について知りたいです。女神の思惑とか、わたしのこれからが予想されるようなことを知って、自分なりに対処して行きたいです」

「……そっか、前向きだね。宿り主に関する文献はそんなに多くないけど、ユーティアがそう言うのなら、後で城内にある図書室に勉強しに行こうか？」

ダリウスの提案にユーティアはしっかりと頷いてみせる。

「はい、ぜひ行きたいです。それで少しでもみなさんの負担を軽く出来るなら、頑張って勉強します」

朝食後、二人は東にある図書室へ向かっていた。

「この城には西と東に二つ図書室があって、西は第一図書室、東は第二図書室って呼ばれてるんだ。オレたちの目指しているのは第二図書室。軍事に関する書物が多くを占めているけれど、一部の人間しか知らない場所にそれはある」

春の陽光がまぶしく城内を照らし、ぽかぽかと空気を暖めている。

「というのも、西の図書室は政治家が頻繁に利用するから、大事な情報は信用の置ける東側に預けた、ってことなんだ。昔から政治家には汚いことを考える人間がいるからね」

「軍の人に悪い人はいないんですか？」

「基本的にはいないと思うよ。政治家は王家と同等の立場にあるけど、オレたち軍人は王家に仕える者だから、悪いことをしようとしても出来ないのが現実なんだ」

派手な装飾の階段を一階まで下り、赤い廊下を進んでいく。ダリウスの案内がなければ確実に迷う道だ、とユーティアは思った。

「まあ、政治家とつながりを持っている軍人なら、たくさんいるけどね」

角をひとつ曲がると前方に人影が見えた。それが男性と小さな子どもの姿らしいとすぐに分かったが、誰かまでは分からない。

「軍人も政治家も多くが貴族出身の人間だから、当たり前と言えば当たり前なだけだよ」

ダリウスはそう言うとは一度口を閉じ、こちらにやってくる人影に声をかけた。

「ごきげんよう、プリンセス・クランベリー」

短い距離を置いて全員が立ち止まり、ユーティアはようやくそれがノーアと王女であることに気がつく。――プリンセス、と言ったけれど男の子みたいに見える……。

「あ、ダリウスだ。ごきげんようー。えっと、その人はー？」

と、王女クランベリーがユーティアを見上げる。その姿は本当にこの国の姫なのかと疑いたくなるものだった。金色の髪は短く、スカートを履いているわけでもないし、言葉遣いにも気品が感じられない。

「この前お話した方ですよ、ユーティア・サルヴァさんです」

と、何故かその隣にいたノーアがそう紹介してくれた。

「ぼくは、クランベリー・シギユン・エレノア・ミルフィュー・ミッドガルドです。お姉さん、お城で保護されてるんだよね？　これからよろしくお願いしますー」

軽いと言うか下品と言うか、どちらにせよ王女とは思いがたい雰囲気少女に、ユーティアは困惑しながら軽く頭を下げた。

「ところで、お二人はどちらへ行くつもりですか？」

ノーアがそう尋ね、ダリウスが答える。

「図書室ですよ、彼女が勉強したいって言うから」

クランベリーは興味深そうにじっとユーティアを見つめていた。

年齢的には十二歳くらいだろうか。

「なるほど、あまり余計な事は吹き込まないで下さいね。それでは、私たちはこれで」

と、ノーアが克蘭ベリーを促して再び歩き始める。それをユーティアは少し見送ってから、ダリウスへ質問をした。

「あの、どうしてノーアさんが王女様と一緒にいらっしゃるんですか？」

「家庭教師の仕事してるんだよ。本業は軍人だけど、あることをきっかけに王女様がノーアにべったりなついちゃって、それからずっと家庭教師として雇われてるんだって」

と、ダリウスは歩き始めた。その後を追いながら、ユーティアはまた質問を返す。

「じゃあ、あの王女様はどうしてあんな格好を？ 女の子なんですよ？」

美しい金髪と可愛らしい顔が台無しだ、と思った。

「趣味らしいよ。王女様は小さな頃からわがままで、いつからか男装するようになったって。ちゃんと理由を知りたいなら、直接本人に聞いてくれ」

「……そうですか」

別に男装が悪いことではないと認識していたつもりだったが、ユーティアはどうしても違和感を拭えずにいた。

廊下を一番奥まで行くと、ダリウスが立ち止まった。

「さあ、ここが図書室だよ」

と、扉を開けて中へ入る。どこか古ぼけた感じのする独特の匂いが鼻を突き、ユーティアは所狭しと並べられた本棚の数に驚く。

「ユーティア、ちゃんとオレについてきてね」

「あ、はいっ」

名前を呼ばれて我に返ったユーティアは、慌ててダリウスの後を追う。自分にあてがわれた部屋と同じくらいの面積しかない図書室は狭く感じられ、人の姿もほとんど見られなかった。

右側の壁伝いに奥まで進んで行くと、木製の古風な扉が見えてきた。そこに取っ手はなく、中央より下あたりに、黄色いひし形の魔法石がはめこまれているだけだった。

扉の前に立ったダリウスは右手で魔法石に触れる。

「オースサズ、ド、ファルノウン、ホーパ、フィヨルニル」

何かの外れる音がし、扉が開かれた。先にユーティアを中へ入れ、ダリウスは周囲を確認しながら扉の先へ行く。

二人が室内に入ると扉が勝手に閉じて、ユーティアはおずおずとそこにある景色を見回した。小さな部屋なのに本棚が壁に寄せられているため、広く感じられる。

「この部屋、内側からしか開けられないようになってるんだ。外から開ける時は合言葉が必要で、普通の人は勝手に入っちゃいけない場所なんだけど」

「え？ それじゃあ、いけないんじゃないですか？ わたし、勝手にこんな」

と、ユーティアが慌てるとダリウスは笑った。

「いや、誰にも言わなければ大丈夫だよ。確かに入っちゃいけない決まりになってるけど、オレは特別神衛部隊の一員だし、神の宿り主である君には、詳しい情報を知る権利がある。そうだろう？」

「……そう、ですね」

言われて見ると、自分も彼も特別な人間だった。ユーティアは納得し、近くの本棚に寄った。

「王家に伝わる大事な記録とか伝承の類もここにあるから、君の知りたいことはそんなに多くないんだよね。とりあえず、これとこれが一番詳しい本かな」

年季の入った表紙がずらりと並んでいる中で、ダリウスが本と言うよりは冊子に近い物を二つ取り出してユーティアへ渡す。

「最初に神の宿り主になった人の事が書かれてる。真相はあやふやだけど、参考にはなるんじゃないかな」

ユーティアはそのうちの一冊を慎重にめくり、その文面に目を通

した。

『神々の争いが休戦した頃、女神フリーアは一人の青年に最高神アルファズルの魂を宿らせた。二百二十七年、四の月と二日目のことである。女神は青年の夢に現れてこう告げた。――彼の魂は何世紀にも渡り人々の間を旅するでしょう。その始まりが貴方で、その終わりは闇の中にあります。人々が進歩を遂げていく最中、魂に危機が訪れることもあるでしょう――』

「どう？ 知識になりそうかい？」

ダリウスの声にはっと顔をあげ、ユーティアは答えた。

「はい、理解しにくい部分もありますが、意外と勉強になりそうです」

と、ダリウスのそばを離れて窓際へ向かう。カーテンが閉ざされているので明るいわけではなかったが、じんわりと春の熱が伝わってきた。

『女神は人間界に最高神を落とした。世界の創造主である彼を生きながらえさせるためにしたことであるが、宿り主である青年は言った。――これは僕らを試しているんだ。最高神を守りきることができるか、つまり世界を守りぬくことができるのか、それを試されているのだ――。この時から天上界と人間界を結ぶ道は破壊され、今では誰も女神に会うことはできなくなった。しかし我々にできることはただひとつ、最高神を守り続けることである』

今の時代、神々が本当に存在するのかは疑われている。信仰が薄くなることはないが、昔と比べると人間は疑い深くなっていた。ユーティアは幼い頃から神の存在を信じていたので、文面に違和感を覚えることはなかったが、すぐに納得はできなかった。

『宿り主には弱点がある。光の結晶である最高神は闇に触れるのを恐れていた。それと同じで宿り主もまた、闇に触れてはならない』

「ダリウスさん、あの、闇って何ですか？」

退屈していたダリウスは距離を縮めることもなく、自分の持つ知識を彼女へ与えた。

「魔法の定義としては、光と相反する力のことで、光とは決して交じり合わない属性のことだね。闇魔法っていうと、人や物を傷つける能力が代表的だな」

「神の宿り主は闇に触れてはいけないそうですね……わたしも同じでしょうか？」

ダリウスはこちらへやってくると、見ていたページを覗き込んだ。
「ああ、そういえばそんなこともあったな。闇っていうのは月、総じて夜を指すことが多いから、きっとユーティアが夜に外出するのは良くないだろうね」

「そうですか……ありがとうございます」

ユーティは納得すると、また本に目を落とした。

『眠れる魂に闇を一掃するだけの力はない。宿り主はただ、女神に背負わされた運命を生きるしかないのだ』

* * *

「ユーティア、服が届いたわよ！ ほら、起きて起きて！」

メイリアスの嬉しそうな声でユーティアは目を覚ました。昨日の疲れが残っているのか、頭がぼーっとする。

「仕立て屋の人が気を利かせて、すぐに届けてくれたのよ。さあさ、今日はめいっばい、お洒落しましょ！」

と、メイリアスが布団を取り上げた。ユーティアは寝返りを打って強く目を閉じる。しかし、すぐにカーテンが開かれて、窓から漏れてくる朝陽に邪魔されてしまった。

「ちょっとユーティア、起きなさい！ まったくもう、今朝はプリンセス・克蘭ベリーから可愛い髪飾りもたくさん届いているのよ」
仕方なく目を開けたユーティアはあくびをしながら上半身を起こす。机の上には、きらきらした箱があった。

早くベッドを下りて着替えましょう、とメイリアスが急かす。ユーティアはすぐにベッドを出て、彼女の待つ衣装棚の前へ向かった。

春らしい黄緑色のやわらかな素材で出来たワンピースに身を包み、似た色合いの髪飾りで前髪を横に留めたユーティアは緊張していた。「こんな格好、したことないから慣れないわ……」

「大丈夫よ、これから毎日着るんですもの。お洒落なあなたを見たら、きっとミスター・ファールバードも惚れ直すわ」

「……そういうことじゃ、ないんだけど」

メイリアスがユーティアの肩を軽く叩いて励ますと、扉を叩く音がした。そちらに目をやったユーティアはその場に立ちすくみ、メイリアスが囁く。

「ミスター・アデュートールだわ、失礼のないようにしなきゃ」

そして部屋に入ってきた銀髪の青年ノーアは、貴族のようなユーティアの姿に一瞬だけ驚くと、すぐににっこり微笑んだ。

「おはようございます、ユーティアさん」

「お、おはようございます……っ」

恥ずかしくなって顔を俯けると、ノーアが優しい声で言った。

「そんなに硬くならなくて結構ですよ、とてもお似合いです」

部屋を片付けたメイリアスが満足げに部屋を出て行き、ユーティアは少し顔を赤らめる。

「あ、ありがとうございます……」

素直に喜ばなくて、ただ恥ずかしかった。ユーティアの近くに来たノーアは笑顔を崩さずに口を開いた。

「お聞きしたいことがあるのですが、今まで闇魔法に触れたことはありませんか？」

はっとしたユーティアは、すぐに首を横へ振った。

「いえ、ないです。生まれ育った村は魔法自体、あんまり使いませんでしたから」

「そうですか。では、何か特定の物に触れたり、見たりすることで拒絶反応を示したことは？」

ゆっくりと椅子へ腰掛け、ユーティアは答える。

「……思い当たらないです」

「そうですか、ありがとうございます」

と、その向かいへ座り、ノーアは口を閉ざして考え込んだ。

その様子を見て、ユーティアはふと心配になってしまう。きつと、闇魔法の勢力について考えているのだろうか、自分は何も力になれない。

「……言い忘れていましたが、今日一日お付き合いさせていただき
ますね。気楽にしてくださいって構いませんし、何かあればすぐに言
ってください」

考えるのをやめたノーアがまたにつこりと微笑んで、ユーティア
は我に返る。

「あ、はい」

どんなに自分が考え込んでも無駄だと思った。それなら今を楽し
く生きよう、と考えてユーティアはノーアを見る。

「あの、今朝プリンセス・克蘭ベリーからたくさん髪飾りを頂い
たんですけど、これはどういうことなんですか？」

ノーアは頷いた。

「一言で言うと、気に入られたのでしよう。あの方にとって髪飾り
を送るのは友好の証ですから」

「そうなんですか……じゃあ、どうしてプリンセスは男装を？」

ユーティアが本当に聞きたいことを尋ねると、ノーアは言った。

「それは私にも分かりません。ですが、ただ好きでやっているみた
いですよ」

「女の子、なのにな？」

納得できなかったユーティアが聞き返すと、ノーアはどこか楽し
そうに笑う。

「ええ、あの方は変わっていますからね。それに、わがままを許さ
れるのも子どもの内だけですから」

つまり王女の男装は趣味であり、好きだからやっているだけ、で
あるらしい。よく分からないな、とユーティアは思った。

第三章 闇魔法

愛するギュスター様へ

ようやくお城での生活に慣れてきました。これもあなたの親切な教えのおかげだと思います。ノーアさんやダリウスさん、シルフさんにメイリアス、そして克蘭ベリー王女様も、みんな優しくて面白くて、田舎者のわたしにこんなに親切にしてくれる人たちはそういないように思いました。

お仕事の方は、はかどっていますか？ この二週間近く、わたしはずっと遊んでばかりだったので、情報らしい情報もよく知りません。闇魔法の勢力はどうなっているんでしょう？ 一番詳しくそうなノーアさんに何度か尋ねましたが、何も教えてもらえませんでした。それと最近知ったことですが、わたしが神の宿り主であることを予言した方がいらっしゃるそうですね。まだ会ったことがないので、許可されるのならぜひお会いしたいと思っています。

正直な話、わたしはあまり情報を持たされていないように思いますが、このことに何か重大な意味や理由があるのならわたしは諦めませんが、やはり知らないままでは嫌です。教えてもらえるギリギリのところまで、情報が欲しいです。闇魔法の勢力だって、わたしはよく知りません。自分を狙っているかもしれない人たちのことを知らないでいるのは、それはそれで危険だと思うのですが、どうでしょうか？ ぜひ、ノーアさんを説得して、わたしにいろんな情報を伝えてください。お願いします。

それでは、二日後にまたお会いしましょう。イザヴェル城のユ―ティアより

* * *

飾り気のない白と黒のワンピース、デザインは今流行りのもので

丸く膨らんだスカートが可愛らしさを引き立たせる。頭は横の髪を後ろにまとめて黒い髪飾りで留めていた。

「ミスター・ファールバード、とても可愛らしいと思いませんか？」

ギユスターはひかえめにふわりと回って見せた彼女の愛らしさに、思わず言葉を失っていた。

「どう？ 似合ってるかな？」

と、ユーティアは照れ笑いを浮かべながら彼を見る。

「……あ、ああ、可愛いと思う。――じゃなくて！ 今朝はノーアから許可が下りて、お前にいろいろ教えてやれることになったんだ」ギユスターが慌ててそう言いなおし、ユーティアへ持ってきた紙の束を渡した。

「あ、手紙読んでくれたのね。ありがとう、ギユスター。で、これは？」

「闇魔法の勢力についてまとめたものだ。ユーティアの身を守るのに使えるような情報は全て話すつもりだ」

満足したメイリアスが朝食の準備をしに部屋を出て行き、ギユスターは椅子に腰を下ろした。

「前にも話したと思うが、俺たちの仕事はお前を守ることと、危機を回避するために闇魔法の使い手を一人残らず捕まえることだ。今まではあてになる情報があまり手に入らなかったんだが、ついこの前、ようやく有力な情報が入ったんだ」

ユーティアはその向かいに座りながら、受け取った紙束をばらばらとめくって見た。

「奴らはやはりお前を狙っている。その目的は調査中だが、神の宿り主を探しているのは確かだそうだ。俺たちが動いているのは奴らも知っている様子で、いつ何が起こるか分からない状態になっている」

「じゃあ、もしかしたら近い内に何かが？」

「ああ。ノーアは昨日から城の警備を強化して、城内に入る者にも制限をかけ始めた。だからお前も、これからはあまり部屋から出な

いようにしてほしい。街へ行くのも、今までより厳しくなるだろう」
ユーティアは紙束を机の上に置く。

「分かりました。他の情報は？」

「それと……実は、最高神がどうしたら目覚めるのか、その方法がまだ分かっていないんだ。闇魔法の勢力が先にその方法を見つけてしまったら、こちらは圧倒的に不利になる」

「……記録には残ってないの？」

「ずいぶん前から様々な文献を調べているが、まだ見つかっていない。今まで一度も最高神を復活させた者がいないことから、闇魔法の勢力も俺たち同様にその方法を探すのに苦労しているはずだ。しかし油断はできない」

そう言ってギュスターが小さく溜め息を零した。

「どちらにせよ、俺たちは闇魔法の勢力に捕らわれないよう、お前を守るしかないわけだ」

ユーティアは俯いた。――自分自身、この状況に危機感を持って生活しなければ。

「ところで、予言者に会いたいと言ってただろ？ 彼女の方から一度お前に会いたいと言っていて、今日の午後から会う約束が決まった」

と、ギュスターが口調を明るくしたものにした。

「本当に？」

少し目を丸くして聞き返すと、ギュスターがしつかりと頷く。

「ああ、本当だ。今日は彼女の従兄であるシルフも同席する。ただ、彼女には少し気難しいところがあるから、それだけは覚悟しておけよ」

「うん、ありがとう」

先ほどの嫌な気分が、にわかには晴れていた。

「闇魔法は元々、百年前に禁忌の術に指定されたのよね」

青い廊下はとても静かで、ユーティアとギュスターの声が遠くま

で響きそうだった。

「ああ、だが禁忌だからこそ、それに惹かれて習得しようとする奴らがいる。それに禁忌に指定されたところで、完全にこの世から消えるわけじゃない」

「どこかから情報が漏れているのね。闇魔法は魔力に関係なく誰でも使えるから、それを悪い方法に使うこともたやすい」

「最高神の言い伝えは各地に広まっているし、それと闇魔法を結び付けて考える奴は少なくないんだろう」

ユーティアが俯く。

「……本当にわたし、大変な物を背負っているのね。嫌じゃないけど、重たいわ」

ギュスターは息をついた。

「闇魔法を禁忌にした理由は、俺たち人間が生きて行く上で不必要だからだそうだ。闇魔法は光よりも攻撃的で、戦争の道具としてよく用いられていた」

「でも、戦争はまだ、世界のあちこちで起きているわ」

「……結局、争わずにはいられないんだろう。己の欲望のためなら何だってやるのが人間だ」

「汚い生き物ね……わたしは、みんなが仲良く生きていけたらいいと思うのに」

「ああ、俺もそう思う」

だが、とギュスターは続ける。

「ノーアは、自分の平和を守るために争いを起こすのだと言っていた。平和の意味は人により違うってことだ」

「そうね、確かに一理あるわ」

陽に照らされる床を二人の影が染める。

「何もかもが話し合いで解決しないのも、きっとそういう理由なんでしょうね」

「だから俺たちは、俺たちの平和のためにお前を守る」

と、ギュスターはユーティアを見た。目を合わせるとユーティア

は少し上目遣いと言う。

「それにしても、ギユスターったらまた髪切らずにいるのね。前髪邪魔っぽくはない？」

顔を前へ向けたギユスターは自分の髪を気にしながら答えを返した。

「ん……別に平気だ。まだいける」

「駄目よ、絶対にそれ長すぎるわ。横だって、耳が隠れちゃってるじゃない」

そしてユーティアが彼の伸び放題になった髪へ手を触れると、ギユスターは嫌そうに避ける振りをした。

「長髪のあなたも嫌じゃないけど、せめて結んだらどう？　今のままじゃかっこ悪いわよ」

「そうか？　俺はあまり気にしないんだが……」

ユーティアは手を引くと呆れたように言った。

「春が終わったらもう夏よ。そのままだと見てるこっちが暑苦しいわ」

用意された部屋で待っていたのは車椅子の少女だった。

「は、初めまして。ユーティア・サルヴァです」

初対面の相手をしてつきり大人の女性だと思っていたユーティアはびっくりして、すぐにその少女が予言者だとは信じられなかった。

「お会いするのは初めてね、私はミシュガーナ・ノルン・オードと申します」

十五歳くらいだろうか、外見のわりに大人びた口調だった。長い黒髪をひとつに結っており、車椅子に座った身体は華奢だ。脚が悪いらしく、下半身全体を隠すように青い膝掛けがかけられている。

「ミシュガーナ、あまり彼女をいじめてやるなよ。いくら機嫌が良くても抑えてろ」

彼女の隣にいたシルフがそう忠告すると、ミシュガーナは言った。「大丈夫よ、シルフィネス。それに私の機嫌を良くしてくれたのは

あなたですもの」

シルフが呆れて溜め息をつき、ギュスターはユーティアを見る。

「まあ、そういうことだ。話したい事があるなら好きにやってくれ」

「……う、うん」

頷いたユーティアは静かに彼女の元へ歩み寄り、改めて声をかけた。

「予言者さん、なんですよ？ あなたののおかげで、わたしが保護されたって聞きました」

「そんなに丁寧な言葉、使わなくていいわよ。私も敬語で話す気はないから」

あまりにも堂々としたミシュガーナの態度にユーティアは困惑した。

「あ、うん。えっと、それでわたしが伝えたかったのは……わたしを見つけてくれて、ありがとう、ってことです。あなたがいたおかげでわたしは今日までやってこられたから」

そう言ってユーティアがにこっと笑うと、ミシュガーナはきよとんとした顔をした。そしてシルフを見上げると、

「しばらく二人きりにさせてもらっても良いかしら？」

と、問う。シルフはぶっきらぼうに「どうぞ、お嬢さま」と、返した。

「ちょっとあっちへ行きましょう」

ユーティアに向き直ったミシュガーナは、すぐに部屋の隅へ向かう。今まで自動で動く車椅子を見たことのなかったユーティアは、それに感心しながら、彼女の後を付いて行った。

ギュスターとシルフが遠くからこちらを見守る中、ユーティアは尋ねる。

「その車椅子、どうなってるの？」

ミシュガーナはまたきよとんとした顔を向けた後、少し嬉しそうな顔をした。

「シルフィネスが作ってくれたのよ。彼、魔法石の研究をしている

でしよう？　それでその実用化に向けて、試験的に車椅子に魔法石を取り付けたの。魔法石は一定時間しか稼動しないから、週に一度動作点検をするの。でも今日、彼が新しく改良した魔法石を取り付けてくれたから、今までの何倍も移動が楽になったのよ」

と、一気に説明をする。ユーティアは第一印象と違う彼女の姿に困惑しながらも、車椅子の仕組みに興味がわく。左右の肘掛けに不透明な黄色の石がついており、左右の車輪にも同じ物がはめ込まれている。それに手を触れることで魔力が発生し、自在に動かす事が出来るらしい。しかし、遠くから見ただけでは、普通の車椅子とあまり変わらないように見えた。

「シルフさんの研究ってこういうことだったのね、すごいわ」

「でも、まだ実用化するには程遠いらしいわ。私だってはつきり言うてしまえば、ただ実験に使われてるだけだもの」

そう言いながらもミシュガーナは、やはり嬉しそうな顔をしていた。

「そういえばあなた、シルフィネスの空馬車に乗ってイザヴェルへ来たんでしよう？」

「ええ」

ユーティアの返事に、ミシュガーナは再び長々と話し始めた。

「あれも魔法石を使用しているのだけれど、普通の空馬車とは違うのよ。一般的にはペガサスの飛ぶ力で動いて、車体に取り付けた魔法石に自分の魔力をぶつけることで宙へ浮くの。でもシルフィネスは、魔法石その物にある浮力を魔力で引き出しているだけなのよ。だから普通の空馬車よりも疲れないで済むし、何より一定した安定感をずっと保っていられるの。素晴らしいでしょう？」

まるで自分のことのように従兄を自慢する彼女は、何だか可愛らしかった。きつと従兄妹同士、仲が良いのだろう。

「あなた、シルフさんのことが大好きなのね」

するとミシュガーナがきよんとした。

「……別に、嫌いではないけれど」

と、首を傾げる。どうやら彼女は、あまりそのことについて考えたことがないようだ。

「でも、彼とは兄妹みたいなものよ。シルフィネスのしていることは素晴らしいし、正直、感謝してるわ。だけど好きとか嫌いとか、あまり考えたことなかったわね」

そう言ってミシュガーナは少し俯いた。このまま悩みだしそうな彼女の様子にユーティアは言う。

「それはつまり、好きってことだわ。嫌いだったら、他人に傲慢なんかしないでしょう？」

「……それもそうね」

納得しかけたミシュガーナがこちらを見て、ユーティアはにっこりと微笑んだ。

「だから、そんなに考え込まないで。兄妹みたいに思える人がいるなんて、すごく素敵なことよ」

ミシュガーナは目を丸くすると、やがてふわりと微笑みを浮かべた。

「あなた、面白い人ね」

＊ ＊ ＊

所々にリボンをあしらった薄青色のワンピースに白の薄いカーデイガン、前髪を横で留めた髪飾りは大人しい白の花型だった。

「おはようございます、ユーティアさん」

「おはようございます、シルフさん」

いつものようにシルフが小さく微笑み、ユーティアもにっこり微笑み返す。

「昨日はミシュガーナが世話になったな。また会う約束もしたんだって？」

メイリアスが朝食の準備をしに部屋を出て行き、シルフはいつものように椅子へ腰掛けた。

「はい、一週間後に約束しました。今度はこの部屋に案内してお洒落したり、昨日は出来なかった話をたくさんする予定です」

「そうか。あいつ、身体のせいで友達がいらないから、ユーティアがいてくれて嬉しいよ。結構ひねくれてるけど根は良い奴だから、長く付き合ってくれると助かる」

と、シルフは安心した笑みを見せた。まるで保護者のようなことを言うな、とユーティアはおかしく思う。

「心配しないで下さい、言われなくてもそうするつもりですから」
そう返すと、シルフはほんの少し目を丸くして、「ありがとう」と、笑った。

今朝は妙に空気が湿気ており、外ではぱらぱらと雨が降っていた。庭へ出ようと思っても、天気が悪いので気分が乗らない。

「ところで、今日の午後からサロンが開かれるそうだ。プリンセス・克蘭ベリーから招待状が来ている」

シルフはそう言ってユーティアへ白い封筒を渡した。

「月に一度行っている定期サロンなんだが、今回は巷で噂になっている吟遊詩人を招いているらしい。天気も良くないし会場も城の中だから、行ってみるか？」

封筒から取り出した招待状を一通り見て、ユーティアは嬉しそうに顔を上げる。

「はい、ぜひ行かせていただきます」

サロンには多くの貴族がやってくる。そこに画家や音楽家などを招いて芸術を鑑賞し、同時に批評するのが通例となっていた。

「あ、ユーティアだ！」

サロン専用の広間へ行くと、すぐに克蘭ベリー王女がユーティアを見つけてくれた。

「来てくれてありがとう。今日はシルフと一緒になんだね。シルフ、ごきげんよう」

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

と、シルフが返し、場の雰囲気には戸惑いながらユーティアも言う。
「えっと、ごきげんよう、プリンセス・クランベリー。今日は招待していただき、ありがとうございます」

クランベリーはにっこり笑った。

「ううん、お礼を言うのはぼくの方だよ。ユーティアが来てくれて嬉しいもん」

その無邪気な返答にユーティアが安心した直後、クランベリーがユーティアの手を引いた。

「ちゃんと席は取ってあるんだ。こっちだよー」

と、部屋の中央へ向かう。

室内には上質な素材のやわらかいソファがいくつも置かれ、その中央付近に小さな舞台が設置されていた。

すでに集まっていた貴族の視線が王女の隣にいる少女に向かい、ユーティアはますます戸惑ってしまうが、近くに付いているシルフもまた、同じように視線を集めていた。

「プリンセス・クランベリー、彼女にもちゃんと気を遣ってくださいね」

と、シルフが言うのと、ようやくクランベリーは状況を把握したらしくはっとした。

「あ、うん。でもユーティアにはぼくが付いてるから、そんなに心配しないで良いよー」

そうは言っても、貴族たちがユーティアを悪く思わないはずがない。クランベリーが彼女の手を強く握り、ユーティアは強気でいようと決意する。

「……ありがとうございます、お二人とも」

やがて始まったサロンは美しい音楽に溢れていた。余興で数人の楽士たちが演奏をし、場内は一気に盛り上がる。

「今日のメインはこれからだよ。吟遊詩人のミスター・マーニって人」

と、ふいにクランベリーがユーティアに話しかけた。

「ぼくにはよく分からないんだけど、女の人みんな惚れちゃうくらいカッコイイって言われてるの。ま、見てみれば分かるよ」

そして周囲がざわざわし始めると、くすんだ色合いの青でまとめた、いかにも旅芸人風の衣装を着た青年が舞台へ立った。整った顔に切れ長の目が魅力的で、長く伸ばした金髪はゆるく後ろでひとつ結びにしている。

その手には弦楽器のリュートがあり、彼は仰々しくお辞儀をしてみせた。

「……すごい人気ですね」

先ほどまでは静かだった女性たちが、きゃあきゃあと声を上げていた。吟遊詩人のマーニはそんな黄色い歓声を身振りで制し、おもむろにリュートを奏で出す。

——混沌の中心に泉があった——泉から水があふれ出て、空気に触れて大地が出来た——泉は拡大し海を成し、大地と溶け合った瞬間に巨人が生まれ出た——。

「いつ聞いても素晴らしい声だわ、うっとりしちゃう」

ある女性のそう呟く声が聞こえると、克蘭ベリーがむっとした。「声なら、ノアの方が絶対に綺麗なのに」

——彼の血が海と混ざると黒い赤ん坊が、彼の血が風と混ざると白い赤ん坊が生まれた——白い方は大地で最も高いところに居を構え、黒い方は最も低いところに家を作った——やがて白い方は光の王国を築き、黒い方は闇の王国を築く——。

誰もがマーニの歌に聞き惚れていた。滴るように紡がれていく声と弦の音色が、聞く者の心をつかんで離さない。

やがて歌が終わると、マーニが再び大げさな礼をした。歓声上がり拍手が沸き起こる。

この場に慣れてきたユーティアも、いつの間にか彼の歌に心を躍らせていた。

「ありがとうございます、ご婦人、そして紳士の方々。今回は要望にお応えしてもう一曲、披露させていただきます」

と、マーニがまたリユートを構え、場が静まる前にユーティアと目を合わせた。ドキッとしたユーティアに、彼は艶っぽく微笑むと言った。

「お聞きください……ミール・ノートー」

その刹那、室内にいた人々が次々に気を失って倒れだした。はっとして隣にいた克蘭ベリーへ目をやると、彼女もまた同じように意識を失っている。

ユーティアがその異変に気づいた時には、全員が床へ伏せてしまっていた。

「さあ、脚を見せていただきますようか。神の宿り主さん」

数分前にはなかった顔がそこにあった。鋭い目つきを尖らせて、リユートを捨てたマーニがこちらへ寄ってくる。闇魔法だ、とすぐに思った。

「いや、誰かっ……シルフさん！」

怖くなって叫び声を上げるが、すぐそばに立っていたはずの彼すらも……否、彼の姿が見えなくなっていた。状況を理解できなくて頭の中がぐちゃぐちゃになり、視界がぼやける。

腰を抜かして怯えるだけのユーティアへ近づき、マーニがその場にひざまずく。骨ばった手がスカートの中に入ると、背筋が震えた。「いや、やだっ……どうしてよ、なんで……なんでこんなっ」

マーニが嫌な笑みを浮かべる。まくり上げられたスカートはすでにその証拠を晒していた。

「何故城に入れた？」

ふいにマーニの動きが止まり、見るとシルフがその後頭部にナイフを突きつけていた。

「さすがは魔法使いといったところですか。人の目を誤魔化すのは簡単ですよ、時間をかけて作り上げた名声があれば、なおさら」

と、マーニが瞬時にユーティアの背後へ回り、涙の伝う頬へその手を触れる。

「残念ですが、彼女はいただきますよ」

ユーティアには何がどうなっているのか分からなかった。とにかく頭が混乱して涙がやまないのだ。

シルフは何も返さなかった。――直後、冷たいマーニの手がユーティアの頬を離れた。低い呻き声がし、マーニが床へくずおれる。

「え……？」

呆然とするユーティアの耳に、会話が聞こえてきた。

「早かったな、ダリウス。急所は狙ってないだろうな？」

「ああ、大丈夫だよ。状況を理解せずに毒矢打っちゃったけど、一日もあれば目覚めるから安心して」

徐々に危険から救われた事を理解し、涙がついと止まる。

「あ、証拠の痣、初めて見た」

と、シルフの近くに來たダリウスがユーティアを見て言う。しかしまだ上手く反応することが出来ず、シルフが心配して声をかけてくる。

「大丈夫か、ユーティア？ もう敵はいないから安心しろ」

ユーティアはいまだに呆然とした顔で小さく頷いた。シルフはスカートをちゃんと下ろしてやり、その脚を隠す。

「他の二人には、サロンで吟遊詩人が誘拐未遂を起こしたと伝えてくれ。俺は先に彼女を部屋まで連れて行くから、詳しい話は後でする」

と、シルフは屈んでユーティアを抱き上げた。はっとしたユーティアは何か言おうとして口を開けるが、言葉が出てこない。

「了解。わざわざこんな時に事起こさなくて良いのになあ」

ダリウスの呟きを背にしてシルフは部屋を出た。

ようやく気分が落ち着いてきたユーティアは、だんだんと申し訳ない気持ちになってシルフを見上げる。

「あ、あの、ごめんなさい……」

シルフはこちらを一瞥し、素っ気無いが優しい言葉をくれた。

「気にするな。突然のことで驚いただろ？ あとは俺たちに任せておけ」

「……っ」

もう怖いものはなくなったのに涙が視界を埋めて落ちる。ユーテ
イアは小さく嗚咽しながら、ぎゅっとシルフにしがみついた。

「ギユスターに見られたらまずいな」

と、シルフは半ば冗談めかして言うだけだった。

第四章 密偵の可能性

ベッドで休んでいたユーティアは、ふと目を覚ました。

「気づいたか？ ユーティア」

心配そうな顔をしたギュスターが駆け寄ってくる。……あれから自分は泣き寝入りしてしまったらしい。

ふいに昼間の出来事が脳裏で再生されて不安になり、ユーティアは恋人に抱きついた。

「っ、ギュスター……！」

「ユーティア、もう心配するな。これからはさらに警備を強化して、護衛も二人で付くことに決まった」

優しい声がそう言っ、ユーティアは思わず顔を上げた。

「え？」

「そのままの意味だよ。護衛は二人いた方が心強いだろ」

と、ギュスターの後ろからダリウスの声がした。見るとそこにはシルフもいて、メイリアスもいる。

「あ、ごめんなさいっ」

それまで彼らの存在にまったく気づかなかったユーティアは、すぐにギュスターから離れると顔を赤くした。

「え、でもそれじゃあ、これからはギュスターと二人きりになれないの……？」

ふと浮かんだ疑問をぶつけると、ダリウスとシルフが同時に呆れた溜め息をつく。

「残念ながら、それは無理だな。ノーアが言うには、ユーティア自身も油断しないように、いつでも身構えておけてことだ」

と、シルフが言う。馬鹿な質問をしてしまったと恥ずかしくなり、ユーティアは俯いた。

タイミング良く扉が開き、ノーアが部屋に入ってきた。その後ろにいた小さな少年もとい克蘭ベリー王女が、たたたとベッドに

向かって駆けてくる。

「ユーティア！　ごめんね、大丈夫だった？　怪我はない？　マーニが悪い奴だなんて、ぼく知らなかったんだ」

と、早口に言いながらギユスターを退かし、克蘭ベリーはユーティアの手をとった。

「わたしは大丈夫ですから、どうか謝らないでください」

と、ユーティアは克蘭ベリーの手を握り返して微笑んだ。

「良かった。ユーティアが危ない目にあったって聞いたから、すごく心配だったの。でも元気そうで安心したよー」

克蘭ベリーはそう言うてにっこり微笑む。

「気分は落ち着きましたか？」

と、寄ってきたノアが克蘭ベリーの隣から声をかけてきた。

「はい、もう大丈夫です」

「それは良かったです。少し話をしたいのですが、よろしいでしょうか？」

と、克蘭ベリーの様子を伺う。

「……お仕事の話、だよね。うん、どーぞどーぞ」

と、克蘭ベリーはすぐにユーティアのそばを離れて行った。すかさずメイリアスが克蘭ベリーの相手を引き受ける。

「居合わせた人々への説明はすでに済ませましたが、幸いなことに闇魔法の影響による不調を訴える者は一人も出ていません。ユーティア、あなたはどうですか？」

ギユスターがただこちらを見ていた。

「……大丈夫、だと思えます。頭も痛くないし、特に悪いところはありません」

「それなら良いのですが、もし何かあったらすぐに教えてくださいね。それと明日からは私とダリウス、シルフとギユスターの二人ずつで護衛をさせていただきます。あなたの気持ちは分かりますが、これもあなたを守るためなのです。どうか我慢なさってください」

群青色の瞳がまっすぐに自分を見据えていた。ユーティアは頷き、

疑問を口にする。

「ところで、さっきはどうして、すぐにダリウスさんが駆けつけてくれたんですか？ 普段は仕事で外に出ていると聞きましたが……」
がたつとシルフが椅子を立った。軍服の胸に付いた石を取り外して見せる。

「俺たちには魔法石があるからな。これは闇魔法を感知すると、その情報が他の三人に伝わるようになってる」

一見するとただの飾りにしか見えないそれは、薄い緑色に染まっていた。ノーアの胸には赤い石が、ギユスターとダリウスのベルトにはそれぞれ青と黄の石がはまっていた。

「それで、たまたま近くにいたオレが一番に駆けつけたってわけ。この魔法石は軍が独自に作り出した物で、戦場に出る時はみんなが身につけることになってる」

と、ダリウスは言った。ユーティアが納得すると、シルフがまた口を開く。

「ユーティア、勝手にいじってしまって申し訳ないんだが、ペンダントの石を魔法石に変えさせてもらった。これには闇魔法を跳ね返す力があるから、これからは忘れずに毎日身につけてほしい」

と、近くに来たシルフが花形のペンダントを手渡す。それはヴィアンシュにもらった時とほとんど変化がないように思えたが、よく見ると中心の赤い石が前よりも透明になっていた。

「え、何それ。オレ聞いてないんですけど？」

「どういことだ、シルフ。許可は取ったのか？」

ダリウスとギユスターが驚いて言う、シルフは答えた。

「ああ、お前たちには話していないが、ノーアの許可はちゃんと取っている」

「ええ、数日前に許可しました」

と、ノーアも言って、二人は仕方なく口を閉じる。

「分かりました、ありがとうございます」

と、ユーティアは顔を上げてシルフを見る。貴族のお洒落に夢中

で存在を忘れかけていたペンダント、自分を守る道具になってくれてとてもありがたかった。

「いや、こっちこそ所有者の許可も取らずに変えてしまっただけだよ」

と、シルフは言う。先ほどまで腰を下ろしていた席へ戻った。まだ不満そうにしているギユスターがユーティアのそばへ寄って、ペンダントをその華奢な首に付けてやる。

* * *

「ミスター・オードもすごい人よねえ。魔法使いで博士号で魔法石の研究者で、出身はかの有名なオード家だね。憧れちゃうわ」
ユーティアの髪を丁寧に梳かしながら、メイリアスがふとそう言った。

「そんなにシルフさんって、すごい生まれなの？」

鏡越しに尋ねてみると、メイリアスは声を弾ませた。

「すごいに決まってるじゃない。ユーティアは知らないでしょうけど、オード家は昔、今の王家に負けないくらい権力があったのよ。それが数十年前に衰退して、それでも没落せずにどうにか貴族として生き残ってきたのがオード一族なのよ」

「それじゃあ、結構なお家なのね。他の人たちは？」

ペンダントを服の中に隠して、ユーティアはメイリアスを見る。

「ミスター・アデュートールは確か、元は隣国の貴族だったって聞いたわね。昔から魔法使いを多く輩出している家系だから、安定した生活をしてきたっていう噂よ」

左右の髪をそれぞれ三つ編みにして後ろで結わえる。

「ミスター・ファールバードはあれでしょ、まだ軍じゃなくて騎士団だった頃の騎士の一人で、功績を称えられて爵位を与えられたっていう。あまり権力はないけれど、騎士の家だけあって剣の腕はさすがよね」

「じゃあ、ダリウスさんは？」

メイリアスは一度、口を閉じてから言った。

「今も昔も、代々続く公爵家として名高いわ。昔の当主が莫大な財産を築いたおかげで、働かなくても暮らしていけるんじゃないかって言われてる。……あたしの家とは大違い、まるで天と地の差ね」

ユーティアはふと不安を覚える。

「ダリウスさんのこと、嫌いなのか？」

振り返って尋ねると、メイリアスは気を遣って何事もなかったように笑う。

「そりゃあ、貧しい村で生まれた身としては恨めしいわよ。でも、彼が嫌な奴じゃないってことはよく分かってる。だからユーティア、そんな顔しないで」

「……うん」

それでも、何か言い知れぬ不安が心の中を渦巻いていた。

闇魔法の使い手は地下牢へ拘束されるのが決まりだった。その内の独居房にいるマーニを見て、ギユスターは言う。

「本名と出身地、今回の事件について知っていることをすべて話してもらおう」

マーニは相手が自分より年下であることに気付くと、

「お子様に話すことは一つありませんよ」

と、偉そうに視線をそらした。年齢だけで相手に甘く見られることはよくあったのだが、今回ばかりは頭に來てしまう。

「さっさと吐け。でないと痛い目に遭わせるぞ」

と、ギユスターは腰に下げた剣の柄に手を触れる。マーニはその殺気に少し怯えた様子で答えた。

「……シャルヴィ・グッドオール、生まれはエルムトです」

「何故ユーティアを狙った？」

「最高神が、宿っていると聞いたので」

「どうしてそれが彼女だと分かったんだ？」

「それは……」

マーニが口ごもる。

「そう聞いたんです、あの方から」

「それは誰だ？」

「わ、分かりませんよ！ 私はただの吟遊詩人で、あの方とは数回しかお会いしていないんです」

怪しいな、とギュスターは思う。それでもユーティアの情報があちらへ漏れていることは確認できた。

「もし彼女を捕らえることができれば、どうするつもりだったんだ？」

「さ、さあ……私は別に、ただ退屈だったので手を貸したまでで情けない大人だと、ギュスターは思った。

「目的を知らないんじゃない、最高神の蘇らせ方も知らないんだな？」

「もちろんです」

マーニの言葉を信用するならば、きっとこれ以上の情報は得られないだろう。

「他に思い出したことがあればすぐに言え」

そう言ってギュスターはその場を離れた。

「密偵の可能性、ですか？」

真昼の日差しが庭に穏やかな風を吹かせていた。

「はい、大きな声では言えませんが、その可能性が出てきました。

昨日マーニは、すぐにあなたが神の宿り主だと分かったでしょう？

しかし、あの場にはたくさんの人たちがいました」

忙しく働く侍女たちを遠目に、ユーティアはのんびりと歩いていた。

「つまり、ユーティアを知る誰かが、君の外見をマーニに伝えたってことだよ。でもこのことは、王家に関わる人間なら誰でも知りえることだから、密偵が誰かを特定するのは難しいな」

ダリウスがそう付け足し、ノーアがまた話を始める。

「侍女でも地位のある人はあなたの事を知っています。プリンセス・克蘭ベリーもあなたのことを気に入っているのです、そこから情報を手に入れたのかもしれませんが。どちらにせよ、どこから情報が漏れています。ストレスになるかもしれませんが、今後はむやみに他人と接触しないようにしてください」

「……はい、分かりました」

ユーティアは頷いて、密かに心の中で溜め息をつく。密偵なんて考えもしなかったし、本当に自分が大事な人間であることを、今更ながらに実感してしまっただけになる。

「まあ、今度また何かあっても、オレたちがいるから大丈夫だとは思うけどね」

と、ダリウスが励ますように言葉をくれた。「はい」と、ユーティアは強がって笑顔を浮かべるが、ちゃんと笑えていない気がした。晴れた午後は太陽が眠気を誘う。さくさくと芝生を踏んで歩くと、風が花の香りを連れてきた。

「あの、ダリウスさん。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

白いベンチに腰掛けてユーティアが口を開くと、ダリウスが彼女を横目に見た。

「ん、何？」

ユーティアは少し言いにくそうにしてから問いかける。

「ダリウスさんは、メイリアスのことが好きなんですよね？」

動きを止めたダリウスに、ノーア的好奇心に満ちた視線が突き刺さる。

「……」

はっとしてユーティアは手で自分の口を押さえた。この話題は今、口にするべきものではなかったらしい。

「あのなあ、ユーティア？　そういうのは、ノーアがいない時に言ってくれ」

「そうですか、やはりダリウスは彼女のことが好きなんですね。以前から、そんな気はしていましたよ」

冷や汗するダリウスを無視するように、ノーアがにっこり笑顔でそう言った。

「さあ、どうぞ遠慮なく続けてください」

「待てユーティア、こいつ実はいじめっ子なんだぞ。オレがいじめられなくなればやめてくれ！」

必死に先を言わせまいとするダリウスにユーティアは臆した。ノーアがいじめっ子というのはこの様子から理解できていたが、ユーティアにはユーティアの好奇心がある。

「……えーと、その、好きになったのには、どんな理由があったのかなって」

「それなら私も疑問に思っていました。ダリウス、ここは素直に答えを返すのが紳士ですよ」

と、ノーアまで言い出し、ダリウスが顔を真っ赤にさせて言う。

「っ、嫌だ！ オレは紳士じゃなくていい！ だから何も聞くな、特にノーア！」

それでもノーアはにこにこ楽しそうな表情を浮かべていた。

「おや、少なくともあなたは公爵家の子息でしょう？ 女性に対して、そんな言い方はないと思いますが？」

物言いは穏やかだが、威圧感がある。ユーティアはおろおろしながら「ごめんなさい」と、何度も口にしたが、手遅れだった。

すると、何かひらめいたダリウスがノーアを睨んで言う。

「ノーアこそ、プリンセス・クランベリーとはどうなんだよ？」

「どう、とは何ですか？ 特に変化はありませんが」

ユーティアは、ダリウスが何故、そんな質問をしたのか分からなかった。

「嘘つきめ、オレは知ってるんだぞ。プリンセスはノーアにべた惚れじゃないか」

「ええ、そうですね。それであなたは何を言いたいんです？」

ノーアの表情は崩れなかった。二人の会話についていけなくなつたユーティアは戸惑う。

「オレはだな、彼女の気持ちを――」

「あの、ノーアさんとプリンセスとの間に、何かあるんですか？」
思いきってそう尋ねると、二人の視線がこちらを向いた。

「お二人は、家庭教師と教え子のはずでは？」

ダリウスが「あーあ」と、溜め息をつく。返答を待っているユーティアにノーアは言った。

「その通りです。それ以下でも、それ以上でもないですよ」

と、いつもの微笑みを向けられた。何となく不自然な返答に思えたが、ユーティアはそれ以上のことは何も聞かなかった。

＊ ＊ ＊

魔法使いの軍服は一般的な軍服とは異なる。どちらもくすんだ緑色を基調としているが、シルフは立襟でギユスターのそれは折り襟だった。

「ノーアは例外で、普通、魔法使いは参謀本部に配属されるんだ。

戦争が起きた時に備えて、その力を隠しておくのが目的らしい」

「じゃあ、シルフさんもその時は戦場に？」

「ああ、そうなるな。でも俺のやりたいのはそうじゃない。中でも魔法研究を専門に扱う部門があって、俺はそこで魔法石の研究をしている。だから、ずっとそこで研究を続けていられれば、俺は満足なんだ」

勲章の数もギユスターと違う。魔法使いはその身を保証されている代わりに、あまり活躍させてもらえないようだった。魔法使いが肩書だけだと噂されるのも、きっとそのせいだろう。

「本当に好きなんですな、魔法石」

と、ユーティアが言うと、シルフは自嘲気味に言った。

「軍に入ったのもそれが目的だからな。元々俺は、戦うのは好きじゃないんだ。むしろ、人に喜ばれる仕事をしたいと思っている」

やっぱり彼は優しい人だ。そう思いながら、ユーティアは素直に

思ったことを口に出す。

「シルフさんには目指す物があるんですね、とっても素敵です」
するとシルフは少し目を丸くして、照れくさそうに視線をそらした。

「まあ、そうだな。だが、魔法石を研究している人間は俺を含めて数人しかいないんだ。成果が出なければ、いつ研究を止めさせられてもおかしくはない」

「でも、シルフさんのやろうとしていることは人を助けるものでしょう？ きつと大丈夫ですよ」

そう言ってユーティアが微笑むと、シルフの表情が和らいだ。

「現実はそのなにごくなくないと言いたいが……ありがとう、ユーティア」

魔法使いになれる者が多くないことから、その存在は貴重なものだった。しかし魔法使いの多くが魔法に頼って戦闘するため、最低限の武術しか身につけないのが普通だ。

「あ、だけど、どうしてシルフさんはこの部隊に？」

ふと浮かんだ疑問をユーティアが口にする、シルフはきちんと答えてくれた。

「まず、最高神の宿り主を保護する場所として、この城の北棟が選ばれた。王族の住居であるここは、警備が厳重だからな。その次に、ここに入入りしてもおかしくない人間として『貴族』であることと、宿り主を守るのに最適な者が挙げられたんだ」

ユーティアが小さく首を傾げれば、シルフが言う。

「俺はオード家の次期当主、魔法石の扱いに長けているし馬車も所有している」

「……じゃあ、他の人たちは？」

「ダリウスは他の貴族よりも王家と面識があるし、遠くからでも戦闘に参加できる。ノーアはプリンセスと仲が良く、一級魔法使いとしての確かな実力を持っている。ギュスターは貴族というよりも、剣術を評価されてのことだろう」

と、シルフは部屋の隅にいるギュスターを見た。ユーティアもそちらに目をやって、なるほどと頷く。

「……本当に選ばれた人たちなんですね。そういうのって、何だか素敵です」

ユーティアがにこっと微笑むと、シルフの胸が無意識に高鳴った。「ああ、そうだな」

それを何かの間違いだと自分自身に言い聞かせ、シルフはふいと視線をそらす。

蒼白い月が浮かんでいた。

誰もが寝静まった頃、人気のない廊下を一人の足音が支配する。

それは少し慌てているようで、音の間隔がにわかには縮んでいた。

窓から差し込む月光がその頬を照らし、足音がふと止んだ。

「次に彼女を狙えるのは？」

低い声が辺りに響き、暗い大きな翼が視界の半分を埋める。

「……五日後の平日。記念日のために、街へ」

翼はふっと微笑むと、一枚の金貨を投げた。無機質な音がうるさく響き渡り、構うことなく翼は夜の闇へと羽ばたいて行く。

窓外に消えた姿をじっと睨んでいた。やがて床に落ちた金貨を拾い、冷たい瞳でそれを眺める。

再び走り始めた足音が廊下を行くと、夜がまた静寂に包まれていった。

第五章 シルフィネス

愛するギュスター様へ

あなたは気づいていますか？ もうすぐで、わたしたちが交際を始めて三年が経ちます。でも、今のわたしたちにそれを祝うだけの余裕はないですね。分かっています。だけどわたしは、何かしたいなと思っています。それにその日はちょうど、あなたが護衛にく日なので。

最近わたしは、シルフさんと話が合うことに気がつきました。読書が趣味という共通点に加え、ミシュガーナのこともあって、わたしは意外と彼が嫌いではないと思えるようになりました。あ、誤解しないで下さい。元々、嫌っていたわけではないんです。ただ最初の出会いが最悪だったから、いまだにそのことを思い出すと、嫌になるというだけです。今ではその出会い方も不自然ではないと理解していますが、シルフさんは第二印象が気難しい人だったので、こうして仲良くなれたのは嬉しいです。

もしかして、嫉妬しちゃいましたか？ 大丈夫、心配しないで下さい。わたしにはあなたしか見えていません。いつでもあなたが一番だし、あなたのおかげでわたしは今も頑張ってやれています。二人きりになれないのは残念だけど、仕方ありませんよね。

ところで最近、ミシュガーナの体調が良くないらしいです。大事な友達なので、わたしは心配になるのですが、大丈夫なんでしょうか？ 今度、シルフさんに頼んでお家を訪ねてみるのも良いかな、と思います。でも、体調が悪い時に行ったら迷惑になるかもしれないですね。とりあえず今は、シルフさんから伝え聞くだけで我慢します。

それでは一日でも早く、平和になることを祈って。 イザヴェル城のユーティアより

＊ ＊ ＊

「シルフ、ユーティアと初めて会った時、お前彼女に何をした？」
手紙から顔を上げたギユスターが、向かいの席でレポートを見ていたシルフへ問う。

「ああ、スカートをめくったな。先にあざを確認させてもらっただけだ」

と、シルフは彼を見た。

「……いきなり、か？」

「そうだな……あの時は焦っていたから、いきなりだった」

と、シルフはレポートを整えて引き出しへしまう。ギユスターは溜め息をつくと言った。

「失礼な奴だな。他人の恋人なんだから、少しは考えてから行動しろよ」

ユーティアからの手紙を封筒へ戻し、一番下の棚へ丁寧にしまいこむ。

「そう言われても過ぎたことなんだから仕方ないだろ。それにあの時は、急な予言で慌てていたんだ」

「……だがシルフ、あまり彼女と仲良くなるなよ」

青い球状の魔法石を手にながら、シルフはギユスターを一瞥する。

「嫉妬か？」

ギユスターは一切反応しなかった。

「心配するな、俺にそんな気はまったくくない」

妙な空気が狭い室内を満たしていた。

＊ ＊ ＊

白地に鮮やかな花柄のドレスだった。横髪を後ろでまとめた薄い黄色のリボンが、頭から少しはみ出ている。

「今日は気持ちよく晴れたのと、ユーティアが一番お洒落な格好を
したいって言うから、こんな衣装になりました。どうです、紳士の
方々？」

スカートの裾には細かくレースがあしらわれ、にっこり笑うユー
ティアの笑顔がとても眩しかった。

「ワンピースじゃないんだな、動きにくくないか？」
と、ギュスターは言った。

「ううん、大丈夫。今日は街に出るんだから、うんとお洒落したか
つたの」

ユーティアはそう答え、シルフが口を開く。

「良いんじゃないか？ よく似合ってるよ」

にっこり笑ったユーティアは少し照れながら返した。

「えへへ、ありがとうございます」

そして鏡に映った自分の姿を確認する。

この生活が始まってから幾度もドキドキさせられてきたギュスタ
ーだが、今日ほど嬉しそうな笑顔を見るのは久しぶりだった。

「靴もこの日のために注文した物なので、慣れないと歩きにくいか
もしれません。そういう時は、ちゃんと気を遣ってあげてください
ね」

と、メイリアスがギュスターを見る。

「あ、ああ、そうだな」

ずっとにこにこしている彼女が可愛くて、二人きりであればすぐ
にでも抱きしめてやりたかったが、そうは行かないのが現実だ。

「ユーティアも気をつけてね。全部特別注文なんだから、汚しちゃ
駄目よ」

「うん、気をつけまーす」

と、ユーティアはまた笑った。

恋人になって三年という節目、それがいかに大事であるかよく分
からないと思った。

「今日は髪、結んできたのね。素敵だわ」

唐突にユーティアがそう言ってギュスターの腕をとる。

「ん、まあな……」

照れているのかそっぽを向いて返した彼に、ユーティアは言った。
「いつもよりもすっきりして見えるわ。ただ、前髪がまだ邪魔っぱいけど」

「ああ、時間がなかったんだ。髪を切るとなると、時間がかかるからな」

シルフは自分よりも背の低い彼の後頭部に目をやる。普段は毛先が肩に付いてぼさぼさの髪が、今日は茶色のリボンで一つに結わえられている。

「それなら仕方ないわね。でもこれからは、毎日結ったらいいと思うわ」

今朝見た時はただ珍しいとしか思わなかったが、それが彼女のためにしたことであると知ると、何だか妙な気分だ。シルフは前を行く二人から視線を外した。

「……そうか？」

ギュスターが遠慮がちに聞き返すと、ユーティアは微笑んだ。

「うん。だってギュスターが髪結んでるなんて、新鮮で素敵なもの」

「……分かった、そうしよう」

そしてギュスターが嬉しそうに口元を緩ませる。

街中に植えられた木々が緑を揺らし、その下を行く人々は誰もが明るい顔をしていた。春はいつだって人の心をそれぞれに喜ばせる。

「ねえギュスター、どこかでお茶しましょう」

あのお店なんて雰囲気良くない？ と、ユーティアは向かいの喫茶店を指さした。眩しい太陽がきらきらとその看板を照らし、ギュスターが言う。

「ああ、そうだな」

腕を組んで歩く二人が、妙に眩しい。道を横断し店へ入ると、上機嫌なユーティアが真っ先に注文をした。

向かい合う二人、間にシルフ。きっと今の彼女にはギュスターしか見えていないのだろうが、変な気分だった。

「ギュスターが貴族なのに頭悪いって、年上の子たちにかかわれたことあったよね。そしたら、ギュスターが木の棒で彼らをやっつけちゃって、わたし本当はあの時から気になってたんだー」

「ああ、そんなこともあったな。あれは、お前たちが彼らにいいめられないようにと思ってしたことだ。数年後にはよくつるむ仲間になってたがな」

「ええ、そうね。村のみんな、今頃どうしてるかしら？　きっとヴィアンシュたち、寂しがってるだろうなあ」

「そういえば、両親に手紙書いたんだろ？　返事はまだなのか？」

「うん、まだ来てないの。きっとわたしがいなくなったから、みんな忙しくしてるのね」

ユーティアが服の上からペンダントに触れた。大事な友人からの贈り物、故郷を思い出させる唯一の物なのだろう。

店を出た後、適当に街を歩いていて。楽しそうにはしゃぐ二人を眺めながら、シルフはふとはぐれてしまいたくなる。――他人のデパートに付き合わされるのが、これほど辛いとは思わなかったな。

「……シルフさん、聞いてました？」

はっとして我に返ると、ユーティアがシルフを見ていた。無駄な動悸が体温を上げて、とりあえず詫びの言葉を発する。

「悪い、聞いてなかった」

ユーティアは少し口を尖らせると言った。

「諦めが肝心だっていうことですよ。シルフさんもそう思うでしょう？」

と、また笑顔を浮かべる。――ああ、きっと彼女に嘘はつけないな。

「ああ、そうだな」

ギュスターが何か反論したが、シルフにはよく聞こえなかった。大通りへ出ると、一気に人が増えたように感じられた。平日だと

いうのに、多くの人が行き交っている。

ユーティアはギュスターにしがみつくようにして歩いていた。人とぶつからないよう配慮しているためか、歩きづらそうだ。

ふいに、誰かがユーティアにぶつかった。

「きゃっ」

彼女がバランスを崩してギュスターに支えられる。謝りもせずに通り過ぎるとはなんて礼儀のない奴だ、とシルフが思った時、ユーティアが声を上げた。

「っ、ペンダント！」

はっとして彼女の首元に目をやると、服の下に隠した鎖が消えていた。その価値を一番よく理解しているギュスターが、こちらを見ている。

「シルフ、ユーティアを頼んだ！」

と、盗人の消えた方へ走り出す。

「……どうしよう、大事な物なのに」

先ほどまでの笑顔が嘘のように、ユーティアは今にも泣きだしそうな顔をする。シルフはそんな彼女の手をとると、人込みから抜け出して横道へ入った。

「心配するな、ギュスターのことだからすぐに取り返して来るさ」

ユーティアは頷いたが、まだ不安げだ。

シルフはきよろきよと周囲を見回して安全を確認した。ペンダントを失った今、闇魔法に襲われたら大変だ。それでなくとも、今の彼女は立派な貴族に見える。金目の物を持っていると勘違いされでは、もっと困る。

「――シルフさん、何か聞こえませんか？」

ふと顔を上げたユーティアがそう言い、シルフは耳を澄ませた。

……何か大きな物が地面を這いずるような音がする。

「……し、シルフさん」

怯えるように言った彼女の視線の先には、闇が広がっていた。どうして嫌な事が現実になるのだらうと思ったが、すぐに彼女の手を

とって道へ出る。

——遅かった。そこにはすでに闇の空間が形成されていた。真っ暗な闇色に世界が染まり、存在することを許された者だけが空間上に立つ。

「どこだ、術者はどこにいる」

震えるユーティアの手を強く握り、捕らわれないように抱きしめる。だが、彼女から荒い息遣いが聞こえてはっとした。

「ユーティア？」

闇魔法が彼女の身体に侵入しているようだ。シルフはすぐに自分のペンダントを外して彼女に渡した。

「大丈夫だ、一定時間なら守られる」

と、彼女を地面へ座らせる。乳白色の魔法石が不思議な光を発し、闇魔法からユーティアを防御していた。

「わざわざ狙ってやってるっていうのに、用意の良い学者さんだねえ」

すぐさまシルフが自分自身に防御壁を張ると、ふいに上方から声がした。

「ごきげんよう、オード家の坊ちゃん。そして最高神の宿り主よ」

小柄な女性が二人を見下ろしていた。

「あたしを憶えてる？ 小学校の時同じクラスだった、イズンだよ」と、女性がふわりと下へ降りてきてにっこり笑う。シルフは目を細めてその姿を確認したが、すぐには思いだせそうになかった。

特徴的なのはふわふわの赤毛と、大人のようにも子どものようにも見える外見だ。だが、印象には残りそうにない。

「頭だけで軍人になったあなたのこと、どうせ戦闘能力は大した物じゃないんでしょ？」

イズンが一步一步とこちらへ寄り、シルフはとっさに身構える。

武器は護身用のナイフだけ、構えは魔法使いのそれである。

「さあユーティアお嬢様、あたしたちと一緒に行きましょう」

と、イズンがユーティアに向かって手を伸ばすが、魔法石の力に

跳ね返されてしまう。

「……素敵なお守りだね、闇を全部跳ね返してる。でもあなたが倒れてしまえば、それも意味ないわ。ラティ・ノート」

大小の見えない石が、シルフの身体にぶつかってくる。じわりと闇に侵されていくのが分かった。

鈍い痛みを堪えながらイズンを睨む。どうやら敵はそれなりの実力者らしかった。——ならばこちらも。

「エオー」

重たい空気の刃が小柄なイズンを切り裂く。避けようともせず、ただ翻弄された彼女はシルフへ向き直り、また笑顔を浮かべた。

「ギューフ・フェンリル・ノート」

煙のような白い狼が現れてシルフに襲いかかる。とっさにそれを避けると、狼がうずくまっていたユーティアに噛みつくようにした。

本来の狙いがそちらであると気づいた時には遅く、かろうじて魔法石がユーティアを守っていた。

「ハガル」

すぐに召喚消去魔法で狼を消し、再びイズンに目を向ける。

「んー、やっぱり魔法使いは違うねえ。でもその程度じゃ勝てないわよ？」

そう言ってイズンは三度目の魔法を唱えた。

「カノ・ノート」

瞬間、炎が自分を取り囲む。

「ウル・ラーグ」

小規模な嵐で炎をかき消すと、イズンがいつの間にかユーティアのすぐそばにいた。

「あらら、うなされてるようだね。魔法石ももう限界かしら？」

「っ、エーギル」

大量の水流がイズンをユーティアから離し、立ち上がったイズンはまた言う。

「彼女、ずっと恋人の名前呼んでるけど」

「だから何だ？ 俺には関係ないことだろ！」

シルフがそう返せば、イズンがにっこり微笑んで。

「あたしには、人心が読めるんだよ」

「！」

唐突に脳裏で記憶が蘇った。確かに会ったことのある人だ。人の心が読めるからいつも他人を避けていた――イズン・ノッド・セアーズ。

「可哀想に。あなた、自分の本心を認めない気なのね？」

むちゃくちゃに魔法を唱えて相手を黙らせたい衝動に駆られるが、シルフは冷静に自分の胸に付けた魔法石を見やる。石から発される青い光が強さを増していた。

「――ニイド、グローイ」

それは能力低下魔法と光の合わせ技だった。大きな白光が空間いっぱいに広がって、あらゆる能力が半減し、その隙にギユスターが中へ飛び込んでくる。

「っ……！」

イズンがその気配に気づいた直後、剣を手にしたギユスターがその背中を斬りつけ、闇魔法は瞬時に途絶える。

地面に倒れたイズンは気を失っていた。

「よく保ってくれたな」

と、ギユスターがシルフを見る。仲間が近くにいたからこそその光魔法だった。空間を切り取る闇魔法は外からの侵入を受け入れないが、一時的に光で満たしてしまえば第三者も中へ入り込める。

「いや、それよりもユーティアが心配だ」

シルフの魔法石を手にしたユーティアも、すっかり意識を失っていた。

第六章 彼女

「やはり最高神が宿っているせいで、人よりも闇魔法の影響を受けやすいようです。しばらく静養していればすぐに体調も良くなるでしょうが、この状態で再び闇魔法に触れたら、彼女の命に関わるかもしれません」

ユーティアに侵入した闇を出来るだけ光で除去したノアが、神妙な顔でそう言った。

「さすがにそれはあちらも望んでいないでしょうが、油断は出来ませんよ」

眠り続ける彼女にギュスターはずっと寄り添っていた。

「あいつら、俺がユーティアと二人になった時だけを狙っています。どうやら、俺が実戦向きの人間ではないと考えているようです」

と、シルフは口を開いた。丁度メイリアスが夕食の支度をしに部屋を出ていた。

「まあ、確かにシルフは武術できないよな。魔法石扱わせたら、誰も勝てないと思うけど」

ダリウスがそう相槌して、ノアがふと立ち上がる。

「では、その隙を作らないように編成しなおしましょう。シルフに抜けられては困るので、彼女が外出する際は私たち三人の内、二人につき、室内にいる際はシルフに加わっていただく、というのでどうでしょう？」

「でもノア、そうしたら順番に回せなくなりますよ？」

ダリウスの口出しにノアはうろろと辺りを歩き回る。

「……では、これからは外出を禁止しましょう。何が起こるか分からないので庭へ出るのも制限し、護衛は今までどおり二人で行います。本当はあまり厳しくしたくないのですが、止むを得ません」

ギュスターの取り返してきたペンダントがユーティアの胸で光を反射していた。

「もうひとつ気になる事があります。俺たちがイズンに襲われる前、彼女のペンダントが何者かに盗まれました。それを偶然ではないと考えるなら、やはり密偵の可能性が濃くなると思いませんか？」

シルフはずっと考えていたことを口にし、全員が押し黙る。あのペンダントに魔法石が付いている事を知っているのは、それを彼女へ渡した時、部屋に居合わせた人物だけだ。

「まさか、プリンセス・クランベリーだったりしてな」

苦笑いでダリウスがそう呟くと、ノーアが反応した。

「ありえないと言いたいところですが……彼女も精神的にはもう大人ですからね。何か目的があるのであれば、可能性がないとも言いきれません」

「だが、メイリアスの可能性だってある」

と、シルフが言うのと、ダリウスがとっさに反論した。

「どうして彼女が？　メイリアスはオレたちが指名した侍女なんだから、そんなわけないだろう」

言い終えると、ダリウスはノーアの視線を感じて苦笑いを浮かべる。

「そんなにむきにならないでください。いくら彼女に好意を寄せていても、決めつけるのは危険ですよ」

いじめっ子の表情がダリウスを見つめていた。察したシルフが淡々と言う。

「ああ、やっぱり彼女が好きなのか。だが密偵の可能性は捨てきれないんだから、下手に庇うな。相手は何を考えているか、分からないだぞ」

ダリウスは不機嫌に舌打ちをした。笑っていたノーアが、ふと真剣な顔をして言う。

「……一番嫌な展開ですが、私たちの中に裏切り者がいる、という可能性は？」

「それなら、俺は疑われる余地がありませんね。わざわざ自分も一緒に狙わせて、怪我すると思いませんか？　それに二度ですよ」

と、シルフは返す。

「オレだってそんなのと思うなー。だいたい、最高神がどうと
かっていうのも、つい最近知ったことなんですよ？」

ダリウスもそう返し、ノーアがギュスターを見る。

ギュスターはユーティアから目を離して、三人を振り返った。

「ずっと遠距離で辛い思いをさせてきた恋人を、これほど危険な目
に合わせる彼氏がいますか？」

そして視線はノーアに集まった。

「私だって疑われる余地ありませんね。ただでさえプリンセス
の家庭教師に軍務、敵方の情報集めにユーティアの護衛、と、毎日
予定がたくさん入っているんです。闇魔法との繋がりなんて築けま
せんよ」

もし克蘭ベリー王女と共犯だったら——と、三人は考えたが、
誰も口にはしなかった。

＊ ＊ ＊

光の当たらない部屋だった。地下の牢獄で、もつとも深く冷たい
独居房にイズンは監禁されていた。

「お嬢さん、知ってること全て話してくれませんか？」

と、面倒くさそうに問いかけて来た茶髪の青年に、イズンは言う。
「今はまだ嫌だね。話しても話さなくても、罰は変わらないんでし
よ？」

床にはめ込まれた魔法石のせいで魔力が封じられていたが、彼女
は強気だった。

「あー、まあな。でもお嬢さん可愛いから、素直に吐けば少しは軽
くなるんじゃないか？」

と、ダリウスは大きなあくびをする。

本心ではないと分かっているけど、イズンにとっては抵抗を覚える
台詞だった。

「じゃあ、ミスター・オードを出してくれない？ 彼になら全て話すわ」

「……お前も恋する乙女か？」

イズンは反応しなかった。椅子を立ったダリウスはのんびり歩き出し、出口付近で待機していたシルフを呼ぶ。

「シルフ、ご指名だぜ」

と、奥の檻を指差した。シルフは溜め息をついてからそちらへ向かう。

イズンは壁に背を預けて待っていた。

「何だ？ さっさと吐いてくれないと困るんだが」

シルフはそう言いながら椅子に腰掛ける。イズンは目を合わせることもなく言った。

「あんた、あの子のことが好きなんだね」

シルフは答えなかった。

「お前らの目的は何だ？ 最高神を復活させてどうするつもりだ？」

「でも彼女には恋人がいる。可哀想なあんたに、良いことを教えてあげるよ」

空気が悪いのをシルフは感じた。窓がないからだろうか、息苦しい気がする。

「あの方が一番恐れているのは彼だ。若さと能力のバランスが、あんたらの内の誰よりも優れている。間違いない、彼が盾だ。あの方は絶対に彼を殺すよ」

「そんな情報は欲しくない。俺の質問に答えろ」
遠い目がこちらを見た。

「あんた、喜んでるね？ これだから人間は怖いんだよ」

にやりと笑うその顔が怖くて、シルフは口を閉ざした。人心が読める彼女には何を言っても無駄らしい。

「それとも、このまま彼女に想いを伝えずに辛い思いをし続けるかい？ 彼女を奪うチャンスは一度しかないよ」

イズンの声が狭い空間を跳ね返って重く響く。――相手の口を封

じてやりたい。これ以上、余計な事は聞きたくない。

「いつまでも隠しているのは辛いでしょう。自分の思い通りにならない世界は、何よりも恐ろしい。それなのに、素直になってしまえば気分は楽になるっていうのに、あんたは何もしないでいるつもり？ 彼女の生きている今だからこそ、やれることをやるべきじゃないか？ あんたは臆病だ。他人の気持ちも考えずに自分までも騙し続けて、本当にそれで良いと思っているのかい？」

気持ちが悪くなる。今も彼女にずっと付き添っている彼の姿が、彼女の明るい表情が脳裏をめぐって吐き気を覚える。

「精神的な攻撃はもう止してください」

ノーアの声が耳に届いてはっとした。

イズンが悔しそうに舌打ちをする。

「シルフ、後は私がやるので少し休んでてください。ちゃんと気を落ち着かせて、くれぐれも冷静な行動を」

と、肩に手を触れられ、シルフは立ち上がった。

「……っ、すみません」

そう返し、シルフは足早に出口へ向かう。途中でダリウスが声をかけようとしたが、何も言えずにその背中を見送った。

＊ ＊ ＊

気分が悪かった。目を覚ましたはずなのに頭が重い。

「おはよう、ユーティア。気分はどう？」

メイリアスの声がしてそちらを見上げる。

「頭が痛いわ……気持ち悪い」

心配そうな表情でメイリアスはユーティアを見た。

「今日は起き上がらない方が良いかもしれないわね。熱っぽくはない？」

ユーティアは頷いた。

「じゃあ、ゆっくり寝ていればじきに良くなるわよ。きつとまだ、

闇があなたの中に残っているんだわ」

ぼーっと新しい記憶を思い起こしながら、ユーティアは今の状況を理解する。ペンダントを盗られて闇魔法が自分を……。

「そうだ、ペンダントは？」

はっとしてユーティアはメイリアスを見た。

「大丈夫よ、ちゃんとここにあるわ」

と、メイリアスがユーティアの首にかかったペンダントを持ち上げる。それを見て安心したユーティアは微笑み、その後はどうなったのだろうと疑問に思った。

「今日は誰と誰が護衛なの？」

「ミスター・アデュートールとダリウス様よ。もうすぐ部屋に戻ってくるわ」

「……今日って、何日？」

そう尋ねるとメイリアスは答えた。

「三月と十三日目よ。あなた、この二日間はぐっすり眠ってたわね」
ユーティアは驚いたが、それをどう表せば良いのか分からずただ茫然としていた。

扉が開くと、久しぶりに見るミシュガーナの姿がそこにあった。

「ミシュガーナ！」

予想外の来客にユーティアは思わず驚いてしまう。ノアとダリウスも一緒に戻ってきたのを見ると、どうやら二人は車椅子の彼女を迎えに行っていたらしい。

「ようやく目覚めたようですね」

と、ノアが呟くと、ミシュガーナがベッドのそばまでやってきた。

「話は聞いたわ、ユーティア。何だか大変なことになってるわね、身体はどう？」

心配そうな表情でそう問われ、ユーティアは言う。

「今日一日ゆっくり寝ていれば平気よ。それより、あなたの調子は

？」

ミシュガーナがにこつと微笑んだ。

「私はもう大丈夫よ。他人の心配はしないでいいから、自分を心配なさい」

「あ、うん……」

そして方向を転換したミシュガーナは、椅子に着いたノーアとダリウスに向かい合う。

「さっそくですが、私の予言は当たりましたわ。ユーティアは二度の危険にさらされましたが、その結果は私には見えていました」

と、ミシュガーナはノーアを見た。彼女が部屋を訪れたのは、彼らと話をするためでもあったようだ。

ユーティアはベッドの中で耳を澄ませた。

「そうでしたか、ミス・オード。しかし、結果に関する予言を私たちには教えてくれませんでしたね、何故です？」

「その必要がないからです。私はあなた方を信用しているし、結果を伝えることで、あなた方が少しでも油断してはいけないので」

一人の予言者として彼らと話をしている声は、立派な大人の声だった。十五歳の少女にはとうてい思えない。

「なるほど。ですが、今日はそれを伝えるためだけに来たのではないでしょう？ 本題をお聞かせ下さい」

ノーアがそう言うのと、ミシュガーナはしばらく間を置いてから言った。

「近くに闇魔法と繋がっている者がいます。その者自体に力はありませんが、これまでとは比べ物にならないほどの危険が迫りつつあります」

「やはり密偵が？」

「ええ、それが誰かまでは分かりませんが、確かに近くにいますわ」ユーティアは小さく溜め息を漏らした。自分の近くに密偵がいるだなんて、考えたくなかった。

「ありがとうございます、ミス・オード。余裕があれば、こちらで

も調査を進めていきましょう」

と、ノーアは言った。

「いえ、私にはこれくらいしかできませんから。それにこれは、大切な友人のためでもあるので」

ミシユガーナが少し微笑み、ユーティアの心が弾む。大切な友人という響きがとても嬉しかった。

「話は以上ですか？」

「はい、今はこれだけです。また何か見えたら連絡しますわ」

そして車椅子を動かして彼女が再びこちらへやってくる。ユーティアがにっこり微笑んで待っていると、ミシユガーナがきよんとした顔をした。

少女たちの話し声が聞こえるだけの室内で、ダリウスがふいに呆れた声を出す。

「嫌ですね、密偵だなんて」

ノーアは彼を見ずに返事を返す。

「そうは言っても仕方ないでしょう。ミス・オードの予言能力は本物です、一度だって彼女の予言が外れたことはないんですよ」

「……まさに天才、ですね」

と、ダリウスが言くと、ノーアはどこか苦い顔で口を閉ざした。

＊ ＊ ＊

「メイリアス、まさかお前じゃないよな」

仕事を終えて自室へ戻ろうとしていた彼女を、ダリウスは待ち伏せしていた。

「ダリウス様……密偵のことですか？ もちろんあたしじゃないですよ」

と、足を止めたメイリアスは再び歩き出そうとして、

「その言葉遣い、やめろって何度も言っただろ」

ダリウスの真面目な声に動きを止めてしまう。髪をまとめていた

帽子を脱ぐと、色素の薄い赤毛が胸の辺りまで落ちた。

「……あたしのこと、疑ってるの？」

ダリウスはただ壁に寄りかかっていた。

「まあ、あなたたちの話を聞いていると、あたしが疑われるのも無理ないわよね。だけどあたしは、闇魔法の奴らに協力なんかしないし、したいとも思わないわ」

そうメイリアスが言うと、ダリウスが口を開いた。

「お前を疑っているわけじゃない。信じたいから聞いたただけだ」
静寂が通り抜けていく。

「別に信じてもらわなくて結構よ。世話役の侍女であるあたしが、一番疑わしいもの。……分かってるのよ」

地味なメイド服に彼女の髪が揺れる。どこからか吹いてくる風が、メイリアスを揺らがせていた。

「オレはお前がそんな奴じゃないって信じてる……メイリアスは裏切るような奴じゃない」

そしてダリウスは彼女とすれ違い、廊下を去って行った。

第七章 満月の夜

親愛なるシルフィネス様へ

突然のお手紙、申し訳ありません。誰かに伝えたいことがあったのですが、誰にするか迷って結局あなたに決めました。

わたしは神の宿り主と呼ばれていますが、別名に「フリーアの娘」というものがあるそうですね。この前、ミシュガーナが教えてくれました。わたしの中には神様が宿っていますが、それは女神フリーアに選ばれた証であり、そこから「フリーアの子、フリーアの娘」という呼び名が付いたそうです。ですが、わたしにはむしろこの名前の方がしっくりくるような気がします。最高神アルファズルは自ら人間界に下りたのではなく、女神が彼をこの地へ下ろしたからです。そしてそれが今、わたしの中に宿っている……。

この前、闇魔法に襲われた時、わたしは意識を失うまでに感じたことがありました。わたしの魔力は平凡の域を出ませんが、あの時自分の中にある光の力が闇に染まっていくのを感じたのです。それは元からある魔力のことではなく、もっと奥深くにあるものでした。その自分の中心とも言える部分に闇が入り込んできた時、わたしはあまりの息苦しさに気を失ってしまいました。どう表現したらいいのか分かりませんが、わたしは確かに最高神を見た気がしました。闇魔法は自分でも見えないところに眠っている彼を、その力で無理やり起こそうとしているのではないのでしょうか？

わけの分からないことを長々と書いてしまい、申し訳ありません。
ユーティア・サルヴァより

＊ ＊ ＊

「シルフさん、これ、後で読んでください」

ある夜、ユーティアはそう言ってシルフへ白い封筒を差し出した。

「手紙……？」

と、いぶかるシルフに、ギュスターが睨むような視線をよこす。恋人の様子に気づいたユーティアは慌てて言った。

「あ、大したことじゃないんです。ギュスターには話しても分かってもらえない気がしただけで、特に深い意味はないの」

そしてそれを受け取ったシルフは言う。

「……そうか、分かった」

自分が一般的な人間でないことは理解しているつもりだった。しかし改めて自分自身に向き合ってみると、どうしても前向きにはなれない。

最高神のこと、女神のこと、自分の運命のこと……闇魔法のこと。考える事柄が多すぎて、何も考えたなくなる。けれども思考は心を見捨てず働いている。

「……ユーティア？ そろそろ上がらないとのぼせるわよ」

扉の向こう側で、メイリアスがユーティアを気遣ってそう言った。ユーティアは「うん」と小さく返事したきり、浴槽から身体を出そうとしない。

手の平にすくった熱い水がゆらゆらと揺れている。それを水面から浮かせると、手からその温度が逃げていった。――わたしの中にある光も、水のようにたやすく闇に落ちてしまうのかしら。

「ねえ、ユーティア。……明日は満月よ。あたしが話をつけてあげるから、一緒に見に行かない？」

蒸気の満ちた浴室にメイリアスの声が響く。

「あなたにはペンダントがあるから、少しの時間ならきっと許されるはずよ」

そのペンダントすらもいつかは無力になってしまふ気がして怖くなった。

ふと右腿の痣を掻き毟りたい衝動に駆られたが、思い留まる。そんなことをしても痣は消えないし、自分の中にはすでに最高神が宿

っているのだ。今更変えられる現実など、どこにも存在しない。

「……聞ってる、ユーティア？」

扉を叩く音がしてユーティアは我に返った。

「ええ、聞ってるわ」

慌ててそう返すと、メイリアスが呆れた風に溜め息をつくのが分かった。

「もう、とりあえず上がりなさい。のぼせちゃう前に」

と、メイリアスが扉を開けて顔を覗かせる。

「あ、うん。すぐ上がるわ、だから大丈夫っ」

手振りでメイリアスの仕事を止めさせ、ユーティアは彼女がまた扉の向こうへ消えるのを待って浴槽を出た。

頭が少し熱っぽくなっていた。水滴を散らしながら着替えを終えるまで、ユーティアはまた思考が後ろ向きになっているのを感じた。――きつと気分転換が必要なんだわ。そう、何もない毎日に飽きないはずがないもの。

「明日の満月、ちゃんと見に行くわ」

そう言いながら扉を開けると、メイリアスが不思議そうな顔をしていた。

＊ ＊ ＊

外出を禁止されたユーティアを気遣ってか、克蘭ベリーが部屋を訪れた。

「ユーティア、ごきげんようー」

いつもの口調で挨拶する克蘭ベリーに、ユーティアはにっこり微笑む。

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

ノーアとダリウスがそれぞれに彼女たちを見守っていた。

すぐさま克蘭ベリーは読書をしていたユーティアに近づき、それを横から覗き込む。

「何の本読んでるの？」

「光魔法に関する本です。シルフさんが読んでおけ、と、貸してくださいました」

克蘭ベリーは興味がない様子で適当に相槌を打つと、ユーティアへ言った。

「そんなことより遊ぼうよー。今日はぼく、たくさんおもちゃを持ってきたんだ」

と、付き添いの侍女が抱えた袋を指差す。

「おもちゃ、ですか？」

ユーティアはすぐに本を閉じると立ち上がった。克蘭ベリーが侍女から袋を取り上げて床へ座り込み、中身を出していく。

「これが昔お父様にもらったお人形で、これが新しい鉄道模型でしよー、それでこれがぼくの宝物の――」

克蘭ベリーの隣に座りこんだユーティアは、初めて見るおもちゃの数々に早くも心を奪われていた。端正な顔立ちの少女の人形を手にとり、まじまじと眺める。

「ノーア、もしプリンセスが密偵だった場合、あのおもちゃには何か意図がありますよね」

ふと呟くようにそう言ったダリウスに、ノーアは視線を向けた。

「一人を疑い出したらきりがありませんよ。あまり疑心暗鬼にならないで下さい」

ダリウスは黙ったがその疑いが消えることはなく、ただ二人は複雑な気持ちで楽しそうに遊ぶ少女たちを見つめていた。

ユーティアの、普段他人には見せない子どもっぽさがありりと晒されていた。金髪碧眼の人形の服を脱がして、別の服を着させる。それを見て克蘭ベリーも笑った。

「まるで姉妹のようですね、あんなに楽しそうな彼女を見るのは初めてです」

「まあ、確かに。でもあれは姉妹というか、むしろ一緒に遊んでますね」

そんな彼女たちを眺めていると、今自分たちの直面している危機が夢か何かに思えてくる。目の前にある素敵な時間がいつまでも続けば良いと、その場にいた誰もが考えていた。

「もしオレたちが負けたら、彼女を失うかもしれないんだな……現実から逃げたくなるよ」

小さすぎる声だった。ダリウスの言葉を聞き取れずとも、その意図するものを感じてノーアは言い返す。

「みんな同じ気持ちですよ。一番辛いのは当人でしょうが、ギウスターもまた、大変辛い思いをしているはずですよ」

それはきつと、ユーティアの安らげる数少ない時間でもあった。だからこそ、なおさら強く願ってしまう。——どうか、普通の少女に平和な人生を。

夕食を運んでいる途中、メイリアスは少しぼーっとしていた。暗さを増し始めた夜空に蒼い満月が浮かんでいた。

ポケットの中がふいに重くなった気がして立ち止まる。誰もいない廊下で、メイリアスは頭を振って気分を変えた。

「失礼します、夕食をお持ちしました」

と、来客が帰ってすっかり静かになった部屋に入る。

読書の続きをしていたユーティアは、きりのいいところまで読んで本を閉じた。棚にそれを置いてから、席へ座る。

いつものようにてきぱきと机に食事を並べる彼女を見ていた。ノーアとダリウスも席に着き、メイリアスが全ての皿を出し終える。

「ユーティア、あの本はちゃんと勉強になっていますか？」

「はい、とても興味深いことばかりですごく勉強になります。あともう少しで読み終わるんですけど、とても良い知識になります」

ユーティアはノーアの質問にそう答え、メイリアスが丁寧に紅茶を淹れた。

「それは良かったです。シルフがどのような意図で貸したのかは分かりませんが、きつと彼も喜んでいますよ」

三つのカップがそれぞれの前に渡され、メイリアスが後ろへ下がった。

一ヶ月以上もこの城内で暮らしているユーティアは、王家の食事にももう慣れていた。前のようにどきまぎしながら落ち着かない食事をする 것도、料理の美味さに感動することも少なくなっていた。ギユスターの教えのおかげで礼儀作法も完璧だ。

紅茶を飲もうとしてノーアは顔を顰めた。そして何を思ったのか、口をつけずにカップを戻してしまう。彼はその後、ちらりとダリウスを一瞥した。その一部始終を見ていたユーティアは、何だか嫌な予感がした。

皿の上が空になると、メイリアスがすぐに片付けを始めた。相変わらず満足させられる味だと思いながら、ユーティアは口を開く。

「あの、ノーアさん、何かあったんですか？ 全然紅茶に口つけてなかったようですが」

「いえ、何でもありませんよ。気になさらないで下さい」

と、ノーアは首を傾げる彼女へ返す。それでも何かあると思えて仕方なかったユーティアは、また後で尋ねてみようと思う。

片付けを終えたメイリアスが部屋を出て行き、ダリウスが眠たそうにあくびをする。

小棚の上に置いた本を手に取り、ベッドへ腰掛ける。――考えていたって答えが出ないのだから、今は他の事を考えよう。ユーティアは本の続きを開き、読書に集中することにした。

メイリアスが部屋へ戻ってくる頃には、退屈に耐え切れなかったのかダリウスが居眠りをしてしまっていた。

「ミスター・アデュートール、彼を注意しなくていいんですか？」

と、メイリアスがノーアへ問うと、どこか冷たい返事が返ってきた。

「連日の疲れが溜まっているのでしょう、たまには許してあげるのも悪くありません」

メイリアスは意外そうな顔をしてユーティアの方へやってくる。

「大変ね、彼らも。ところでもう本は読み終えたの？」

ユーティアは閉じた本の表紙を見つめて言った。

「うん、すごく勉強になったわ。退屈しのぎにもなったし、シルフさんには感謝してる」

そしてメイリアスは時計を確認し、口を開いた。

「ユーティア、今日は満月よ。まだ就寝時刻まで時間があるし、一緒に見に行かない？」

「あ、昨日の話は本当だったのね。うん、行くわ」

と、ユーティアは本を小棚の上へ置いた。こちらを眺めているノアにメイリアスが話をしに向かう。

「ミスター・アデュートール、これからユーティアと満月を見に行きたいんですけど、よろしいでしょうか？」

すると珍しくノアは笑わなかった。

「満月ですか、感心しませんね」

メイリアスの肩がぴくりと震えた。そのすぐ後ろでユーティアが首を傾げる。

「あなたはユーティアが闇に侵されやすいことを知っているはずですよ」

腰を上げ、立ち上がったノアが眼鏡越しにメイリアスを睨みつける。

「残念ですが、彼は騙せても私は騙されません。『睡眠薬』には慣れているのでね」

相手を威圧する口調だった。

『睡眠薬』の言葉にはっとしたユーティアがメイリアスを見る。

メイリアスは言った。

「ごめんね、ユーティア」

その言葉の意味するものに、ユーティアは悲しみが込み上げる。

そしてノアがその細い腕を掴もうとした一瞬早く、メイリアスはユーティアの首にかかったペンダントを力任せに取り上げて逃げだした。

「メイリアス!？」

彼女を捕らえ損ねたノーアは立ち尽くすユーティアへ言った。

「私から離れないで下さい!」

すぐさま後を追って廊下へ出る。――親友と言えるくらい近くにいた彼女が密偵だなんて、信じられなかった。

メイリアスは走りながら予定が狂ったことを苦く思っていた。本来なら上の階へ移動するはずだったが、これでは自分の体力がそこまで持ってくれないだろう。――それならせめて、窓のあるところまで……!

「あ」

足がもつれた。床へ転んだメイリアスの手から、ペンダントがすり抜ける。見ると後方には彼らが迫ってきていた。

「――ハティ! ヴアナ・ド・ハティ!」

とっさにメイリアスが声を上げると、数メートル先にあった窓ガラスが派手な音を立てて割れた。

「君にしては上出来だね。こうなることは予想していたよ」

先を行っていたノーアが立ち止まり、追いついたユーティアも足を止めてその姿を確認する。

それは月光に照らされて白々と輝く翼だった。白い服に白い肌、白い靴と白銀の長髪――そして異様な眼力を持つ黒い瞳。

「っ……!」

目が合った途端に息が苦しくなった。くず折れたユーティアを横目に、ノーアは言う。

「……彼女は渡しませんよ」

ノーアは身構えた。――翼を持つ人間は禁忌を犯した証。女神の封印した魔法を、何らかの方法で蘇らせたことを意味している。それはつまり、闇に身を売ったも同じだ。

「夜は闇の味方をする。いくら天才と呼ばれた君でも、この僕に勝てるとは思えないね」

挑戦的な声が辺りに響き渡る。

睨み合う二人の尋常でない空気を感じたメイリアスは、ただ廊下の隅へと後ずさった。

「グレイプニル・ノート」

先に攻撃を仕掛けたのはハティだった。細く透明な紐が散らばるガラス片を宙に浮かせ、ノーア目掛けて投げ飛ばす。

「ウル・カノ」

灼熱の壁がそれらを一瞬で溶かし、二人の視線が交差した。

「ラティ・ノート」

「ギューフ・リントヴルム」

細かい石は赤い召喚竜に食いちぎられて姿を消すが、ハティに隙は出来なかった。

「ハガル！ ギューフ・フギン・ノート」

高速の鷹が背後からユーティアを狙う。

「ギューフ・ニーズホッグ」

緑の蛇が鷹を追い払い――ベルカナ・エーギル・ノート――黒い洪水が、ノーアを遠くへ吹き飛ばす。

体勢を立て直し、ノーアはすぐに顔をそちらへ向けて魔法を唱えた。

「ベルカナ・ロギ」

「エオー・ノート」

しかし火の粉は風にかき消されてしまった。――魔法の出現速度がまったく違う、やはり夜は闇の味方か。

「だから言ったでしょう？ 君じゃあ僕には勝てない」

と、ハティが倒れているユーティアへ近づく。

「ギューフ・フェンリル」

阻止しようとして召喚した幻獣も、――ハガル――再びハティはかき消した。

どんな抵抗も無駄のようだ。ノーアは冷静に思考しようと両目を瞑る。

ハティが床へ跪き、ユーティアの頬へ恭しく触れた。

「ウル・レーヴァ」

光をまとった剣が目標を定め、ハティはそれを岩で押し留めようとした。

「ウル・スヴィティ」

前方を塞がれた剣は壊れ、その反動で岩も砕ける。二つの魔力が消える直前に、ノーアは叫んだ。

「ギューフ・ウンディーネ！」

直後、水の上級精霊ウンディーネが現れた。散り散りになる白と黒の中を、美しい水の軌跡がハティへ向かう。再び同じことをしようとしたハティだったが、近づいてくる足音に気をとられた。

「ラーグ」「ガンダールヴ・パース」

シルフの水滴がノーアの魔法を増幅させ、それが身体を捕まえるのと同時に、ギュスターの美しい太刀捌きがその白い翼を切り落とす。

かろうじて自分の身は守られたが、右の翼が半分の大きさになっていた。

「ギューフ・フギン・ノート、ゲルギー——」

二つ目の呪文が言い終わる前にギュスターが剣を振り上げ、ユーティアをさらおうとする鷹をシルフが「ハガル」と、かき消す。

遅れてやってきたダリウスが、逃げ出そうとするハティに向かって矢を放ち、それをハティはギリギリで避ける。

「イス・ノート」

と、ハティはわずかにできた余裕で回復魔法を唱え、切られた翼を再生させた。

その光景に驚きながらも戦闘をやめない四人を、メイリアスは見ていた。——きつとこの戦いが終わったら、裏切り者と呼ばれるんだわ。ユーティアにも嫌われて、誰もがあたしを置いて行ってしまう……。

強力な魔法を使ったせいで力をなくしたノーアは援護に回り、ギ

ユスターとダリウスが次々に攻撃を仕掛け、ユーティアの前に立ったシルフが隙を見て魔法を唱える。さすがのハティも相手の人数が増えてしまうと、先ほどもまでの勢いをなくしたようだった。

それでも――それすらも予定の内だったのか――、ハティが唐突に強力な魔法を唱えた。

「ベルカナ・ゲルギヤ・ノート！」

濃い闇の気配が辺りを包み、無数の黒い鎖がノーアを襲い、ギユスターに向かい、シルフを狙って、ダリウスの身体を傷つける。

気づくと、廊下が赤い液体で汚れていた。メイリアスは目の前で起こっている事態の深刻さに気づき、恐怖に震えた。

ダリウスが床に両手を付いて痛みに耐える。――信じていると言ってくれた彼さえも裏切って、あたしはいつたい、何をしているの？ 恐ろしさの反動で足が勝手に床を蹴った。落ちていた弓を拾い、彼の肩に触れる。

「大丈夫？ これくらいでやられてちゃ、軍人失格よ」

顔を上げたダリウスは驚いた。

「メイリアス……？」

彼女の両目には涙が溢れていた。

「ほら、しっかりしなさいよ。あなた、男でしょ？」

と、メイリアスが泣き笑いの顔になる。頷いたダリウスは立ち上がり、弓を受け取った。

一人で応戦していたギユスターに加勢すると、ハティがまた劣勢に追い込まれる。

「カノ、ウル・エオー」

「グローイ」

ノーアが熱風を送り、シルフが光を付加すると、それを避けようとしたハティに隙が出来る。

そして助走をつけることなく飛び上がったギユスターがほぼ真正面から、

「ノルズリ・パース」

と、水の渦巻く剣で白い身体を大きく斬りつけた。バランスを崩した身体に何本もの矢が放たれ、隙だらけになったハティにシルフがとどめを刺す。

「ウル・ゲルギヤ」

大きな鎖に動きを束縛されて、ようやくハティは大人しくなった。

それから怪我の治療を終えて戻ってきた四人が、メイリアスに顔を向ける。ベッドに寝かされているユーティアを背に、メイリアスは表情をこわばらせた。

「あなたが密偵だったんですね」

と、ノーアが第一声を発する。メイリアスは何も答えなかった。

「いつから密偵を？ それと理由を教えてください」

申し訳ない気持ちが胸を満たし、瞼が徐々に熱くなる。

「二月ほど、前から……彼らが、情報を買ってやるって、言うから」
静かな室内にメイリアスの涙声が響く。

「お金が、欲しかった、んです。故郷にいる、家族を……養うため、そして、借金を返すためでした。この城で侍女をしているのも、そのため……だけど、三ヶ月前に母が病気に倒れて……どうしても、お金が必要だったんです。そんな時に彼らが、情報を買ってやるって、持ちかけてきて……」

腕や腹に包帯を巻いたダリウスが何か考える様子で彼女を見つめていた。

「っ、ごめんなさい……こんなことのために、みなさんを、裏切って……あの子を危険な目に合わせて……本当に、ごめんなさい」

泣いて詫びるメイリアスに、誰も声をかけられない。貴族である自分たちには、貧しい彼女の気持ちなど、とうてい理解できなかった。

しかしただ一人、いつの間にか目を覚ましていたユーティアが優しい声で言った。

「――それなら、仕方ないと思います。わたしもメイリアスと同じ

立場なら、卑怯なこと、たくさんしちゃうと思うから」

ギユスターがすぐにユーティアへ寄り、ノーアが小さく唸る。

「ユーティア、もう平気なのか？」

「うん、大丈夫。……だからメイリアス、わたしはあなたを嫌いになんかならないし、憎みもしないわ。あなたにはあなたの事情があったんだもの、仕方ないことよ」

メイリアスの背中が震えた。俯いた顔からぽたぽたと涙が零れ落ちる。

「あ、あたし、あんなひどい、こと……したのに、どうして、ユーティア……？」

ゆっくりと上半身を起こすと、その首に掛かった赤い石が光を反射した。

「だってわたしたち、大事な友達なもの。裏切られたなんて思わないわ。ちゃんと、許しあわなくちゃ」

優しすぎると、あまりにも温かすぎると思った。メイリアスがついに声を上げて泣き始め、ダリウスがそっとそばへ寄りそう。

「ユーティアがそう言うのなら仕方ありませんね。内密に処理しましょう」

と、ノーアは言った。すると、ダリウスがおもむろにメイリアスの肩を抱きしめた。

「なあ、メイリアス……」

彼女にしか聞こえないような声で言う。

「そんなに金が必要なら、オレのところ……嫁に来ないか？」

「っ、え……？」

メイリアスが顔を上げると、ダリウスが顔を赤くして言った。

「だから、お前の家族の分まで、オレが養うよ！」

その求婚は室内にいた全員の耳まで届き、視線が自然と二人に集まる。

「……っ、嫌なら、別に良いけどよ」

と、顔をそらしたダリウスにメイリアスは答えた。

「か、考え、とく……」
いつの間にか涙が止まっていた。

第八章 忌々しい翼

平和だが忙しい日々だった。

密偵はいまだに判明していないということで内密に処理され、メイリアスは今までどおりに仕事を続けていた。

「あの、ミスター・ファールバード、ダリウスってどんな人？」

と、仕事の合間にメイリアスはこっそりと尋ねた。退屈していたギユスターは彼女に顔を向けて言い返す。

「何を今更……君の方が、あいつとは付き合い長いだろう？」

するとメイリアスは、溜め息まじりに説明をした。

「それはそうなんです、あんまり普段の彼を知らないと言うか、ちゃんと仕事してるところを見たことなく……それで、誰かに聞けば分かるかと思ったんです」

それを聞いたギユスターは少し考えると口を開いた。

「ああ見えてダリウスは、仕事はちゃんとこなしてるな。不真面目に見えるが、人の話はしっかり聞いているし、根は真面目だな。やはり、育ちが良いんだろう」

「育ちが良い、ですか。……本当にあたしなんかで良いのかしら」

と、メイリアスは言葉を濁す。楽しそうにシルフと話しているユーティアに目を向けながらギユスターは言った。

「自信を持っていと思うぞ。あいつが人前で君に求婚したんだから、その想いは嘘偽りなんかじゃなくて、本当の気持ちなんだろう」

メイリアスが俯いた。ちらりとそちらを伺えば、彼女はわずかに頬を紅潮させていた。

「……あ、ありがとうございます」

と、仕事の続きを再開させる。ギユスターはまた退屈を持て余し、ぼーっと室内を眺めた。

ハティたちの取り調べはいまだ続いているが、これですべてが終わったわけではない。なかなか口を割らないハティの様子から、ユ

ーティアの護衛は変わらずに二人ずつで付いていた。闇魔法の勢力はまだユーティアを狙っているはずなのだ。

「光魔法というのは、一番他の属性から影響を受けやすいものなんだ。対にある闇属性であれば、なおさらな」

ユーティアの前には一冊の本が置かれていた。

「だから理屈を言うと、俺たち人間が魔法を使えるのも、基盤にあるものが光属性だからなんだ。そのおかげで俺たちはどんな属性の魔法も使うことができ、その基盤を強くしていくと強力な魔法が使えるようになる。この世界には無属性というものも存在するが、それは一つの属性として捉えるのが正しいわけだ」

本にもそう書いてあっただろ？ と、シルフが尋ねる。ユーティアが納得して頷くと、シルフは言った。

「そしてこれは最後の章に書いてあったことだが、人間は光が基盤になっているせいで闇に染まってしまう。それは光の量が多ければ多いほど、限界まで闇に侵された時の抵抗が大きくなるんだ。つまり俺たち魔法使いが闇に染まってしまうと、命を落とす可能性がある」

「臨界爆発、ですよね」

シルフは満足げに頷いた。

「ああ、光が闇に抵抗し、二つの属性が互いを打ち消そうとして起こるものだ。そしてこの現象は、ユーティアにも起こりうる」

「それは……危険、ですね。魔法はそんなに使えないけど、基盤に最高神を宿すわたしは、光を人よりも多く持っているから――」

なぜシルフが自分にこの本を貸してくれたのか、ユーティアはようやく理解した。

狭い檻の中、ハティは窮屈そうに羽根を閉ざしていた。

「さっさと答えてしまえば楽になりますよ」

と、向かい合ったノーアは言う。

「それならもっと広い場所に移せ」

ハティは先ほどからずっと同じことを要求していた。その生意気な態度が気に食わず、ノアは呆れ果てていた。

「ではお聞きしますが、その翼はどうして手に入れたのですか？」
返事はなかった。仕方なくノアは質問を変える。

「やめましょう。出身はどこですか？」

「……」

やはり何も答えないハティにノアは言った。

「ヴァナ・ド・ハティという名前ですが、偽名ですよね？」

「……ギムレーだ。本名はハティ・ランドグリーズ」

ノアは手にした用紙に筆を走らせながら、思いついたことを口にした。

「流行り病が最初に起きた場所ですね。もしや、あなたが？」

ハティは顔をそらしていた。――国内を騒がせた流行り病。それを引き起こしたのが彼であれば、翼はその代償として得たものか。

「何故、そのような真似を？」

ハティは口を閉ざしたまま、ノアを二度と見ようとはしなかった。

夜、仕事を終えたダリウスが報告のために部屋を訪れた。

「ハティの奴、全然吐こうとしないぜ。ノアが忍耐強く相手してるけど、分かったのはあいつが流行り病の元凶らしいってことだけ」
心なしメイリアスを避けるようにして寄ってきたダリウスは、小さく溜め息をついてそう言った。

「どういうことだ？」

「あくまでもノアの推測なんだけど、ハティは流行り病を引き起こしたせいで、あの翼を手に入れたんだってさ」

寝間着に着替えるために、ユーティアとメイリアスがカーテンの向こうへと消えていく。

「なるほどな。だが、その方法で翼を手に入れたとなると、あいつはそうとう運が良かったな」

ギユスターとダリウスが首を傾げると、シルフは言った。

「禁忌を犯して得る翼には、死ぬほどの苦痛を強いられるはずだ。何人もの命を奪ったのであれば、なおさら痛みは増すと聞く」

——それほどのことまでして、ハティは何をしたかったのだろうか。

「……まあ、あれだけ強力な闇魔法の使い手だ。元々、普通の人間じゃなかった可能性もある。場合によれば、翼を得るのはたやすいことだったのかもな」

と、黙り込んだ二人にシルフは言った。

メイリアスがカーテンを開け、寝間着に着替えたユーティアが出てくる。

「報告はそれだけか？」

ギユスターの問いにダリウスが「ああ」と、頷く。メイリアスが衣服の入ったかごを手を持った。

「そうか。じゃあ行ってこい」

と、唐突にダリウスの背を押す。びっくりしたダリウスが振り返ると、ギユスターは意地悪く言った。

「彼女、もう出てったぞ。二人きりになれるチャンスだろ？」

ダリウスは不満そうに顔を紅潮させると、助けを求めてシルフに目をやる。

「俺には助けられないぞ」

と、シルフが若干楽しそうに言った。すぐに助けしてくれることを期待してユーティアを見ると、彼女も笑った。

「いってらっしゃい、ダリウスさん」

純粋なその応援にダリウスは肩を落とし、愚痴りながらもしぶしぶ扉へ向かう羽目になる。

「ノーア二号め、覚えてろよ」

そう文句して、ダリウスは部屋の外へ出た。

無意識に走って追いかけると、メイリアスはすでに階段を下り始めていた。

「……、メイリアス！」

勇気を出して呼びかける。彼女が振り返り、ダリウスはすぐにその隣へ並んだ。

「何よ、いきなり」

と、メイリアスは驚いた顔で尋ねる。ダリウスは顔をそらした。

「いや、その……特に用はないんだけど、追い出されちゃって」

意味が分からない、と、メイリアスは思った。構わずに階段を下り始めれば、ダリウスもその後をついてくる。

仲間たちに促されてここまで来たはいいが、どうしたら良いのか分からない。素直に言いたいことを言えればいいのだろうが……ダリウスは深く息を吸った。

「……オレ、さ。ちよつと反省してるんだ。あの時、金で釣るような言い方しちゃって」

メイリアスが驚いたように彼を見た。

「ぶっちゃけオレ、自分に自信ないからさ……あんなことしか言えなかったんだ」

「……」

「でも、オレは嘘つかないから。何があっても、絶対に」

階段を降り切ったメイリアスが足を止めた。数段上で立ち止まるダリウスに背を向けたまま言う。

「九号」

「え？」

理解できず呆然とするダリウスに、彼女が言う。

「指輪のサイズよ。ちゃんと覚えなさいね」

そしてメイリアスは彼に顔を向けることなく、足早に廊下を進んでいった。

「……指輪……あ、ああ！ えっと、九号……だな。うん、よし」

ようやくその意味を理解したダリウスは、人知れず喜んだ。

こんな時でも仕事を休むつもりはなかった。一時的にでも現実か

ら離れられるのならば、むしろそれは彼にとってありがたかった。

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

扉を開けて中へ入る。現在使われている王族の私室で最も派手なその部屋は、相変わらず子どもっぽい活気で溢れていた。

「あ、ノーア！ ごきげんようー」

それまで侍女と遊んでいた克蘭ベリーが、嬉しそうにこちらへ駆け寄ってくる。そしていつものようにノーアへ抱きつくが、抱きしめ返すその両腕は、普段よりも弱々しかった。

彼の様子に気づいた克蘭ベリーは、すぐにその顔を見上げた。

「……疲れてるの？」

——他人は騙せてもプリンセスだけは騙せない。

「ええ、少しだけ。でも大丈夫ですよ、授業を始めましょう」

と、ノーアは克蘭ベリーを促した。透き通るような空色の瞳は、まだ心配そうに彼を見つめていた。

侍女が静かに部屋を出て行き、席に着いた彼女の隣でノーアが教科書を開く。

「えーと、この前はどこまで話しましたっけ……」

そう言って記憶を手繰る彼を克蘭ベリーは見抜いていた。我慢できなくて、つい口を開いてしまう。

「ぼく、知ってるよ。今すぐ大変なんですよ？ 変な奴が城に入ってきて、ユーティアをさらおうとしたって」

純真な瞳に見つめられ、ノーアは思わず目を丸くした。

「その取り調べが進まなくて、寝る暇もないって。無理しちゃだめだよ、ノーア」

それは彼を心から想う彼女ならではの言葉だった。

「……ありがとうございます、プリンセス。ですが、その話は誰から聞いたんですか？」

「ダリウスから……」

返答を聞いて、ノーアは溜め息をついてしまう。いくら仲が良くても、彼女を心配にさせるようなことは、極力しないでほしかった。

「でも、ぼくがしつこく聞いたからなの。ダリウスは悪くないよ、ぼくが知リたかっただけだから」

と、必死に言い訳を始める克蘭ベリーが不思議と愛らしくて、仕方なくノーアは顔を上げた。

「分かりました。そういうことにおきましよう」

そう言って呆れ混じりに微笑めば、克蘭ベリーが不満を顔に表す。

「だって本当のことだもん、ぼくが先に聞いたただけだからね！」

と、照れなのか怒りなのか、顔を赤くさせる。

「ええ、分かっていますよ」

――目の前にいる少女と共に過ごせる時間がある内は、何だって出来る気がした。帰る場所が、受け入れてくれる人がそばに在る内は、どんなことでも成しとげられると……。

＊ ＊ ＊

ずっとだんまりを続けるハティにすっかり辟易していた。

「これはやはり、まだ何かあると考えていいな」

と、憂鬱そうにギユスターが呟く。

ベンチに腰を下ろしたシルフも苛立った様子で返す。

「いっそのこと拷問にかけてやりたいよな」

檻の中で退屈しているハティが非常に腹立たしかった。

「ああ、そうだな。ノーアに掛け合うか」

と、ギユスターが壁へもたれる。シルフは億劫な様子で腰を上げると、ギユスターへ言った。

「お前は休んでいろ、俺が掛け合ってくる」

「ああ、ありがとう」

そしてシルフが扉を開けて出ていくと、奥の方で騒音がした。顔を上げたギユスターの耳にイズンの声がする。

「ミスター・ファールバード！ そこにいるんだろう！？」

どうやら自分が呼ばれているらしい。ギユスターは頭が痛くなるのを感じながら、そちらへ向かった。

「何だ？」

小柄な彼女を見下ろすと、イズンはにやりと微笑んだ。

「あんた、何にも気づいてないんだね？」

ギユスターは思わず眉をひそめる。人心を読める彼女とは、必要以上に会話しないと言われていた。

「どうということだ？」

「宿り主のことだよ。ミスター・オードは彼女に好意を抱いているわ」

そう言い切ったイズンに、ギユスターは驚いた表情を見せてしまった。

「嘘だと思うなら、直接本人に聞いてみな。彼は否定も肯定もしない、つまり好きだってこと」

イズンはただこちらを見ていた。

冷静な思考を取り戻そうとして、ギユスターは声を絞り出す。

「……魔法石にしか興味のなさそうなあいつが、ユーティアに好意だと？」

馬鹿馬鹿しいと口にする直前だった。

「馬鹿なのはあんたの方だよ。この事実から逃げようとしてる。信じてくなくてもこれは本当のことだ。そして彼は横恋慕したにもかかわらず、あんたがいなくなればいいと思ってる。まったく、ミスター・オードは自分勝手な人間だね」

——さあ、どうする？ ミスター・ファールバード。

「……分かった、受け入れよう。だが俺は、お前の言ったことなど信じない」

我ながら矛盾した台詞だと分かっているが、ギユスターはそう言い捨てた。

足早にその場から離れる。……いつの間にか頭痛がひどくなっていた。

「拷問、ですか。良いと思いますよ」

と、ノーアはシルフへ言った。

ダリウスが二人の会話に耳を傾けながら退屈そうにしている。ユーティアはそれまで眺めていた窓の外から視線を外し、彼らの方を見た。

「ありがとうございます。では、方法はどうしますか？ 火責めか、水か……鞭打ちという手も」

シルフがそう言ったのを聞いて、ユーティアは思いがけず嫌な気分になる。

「そうですね、まずは肉体的に責めるべきだと思います。それでも吐かないのであれば――」

心なし気落ちした様子のユーティアにダリウスが声をかけた。

「大丈夫だよ、殺しはしないから」

それは知識として知っていた。だがそれが身近な場所で起こるのだと思うと、恐怖を覚えずにいられない。

「でも、拷問って痛いんでしょう？」

「んー、まあね。だけど、今現在、一番有力な情報を持っていそうなのがハティだし」

それを聞いてユーティアは顔を俯けた。シルフとノーアがその様子に気づき、はっと口を閉じる。

「……確かハティは、翼を広げたがっていましたね。その忌々しい翼を縄で縛り上げましょう」

「はい、分かりました」

優しいユーティアを氣遣ってノーアがそう言い、シルフもそれを理解して頷く。

「出来ればその後、両方の翼を火あぶりに」

と、ノーアが小声で付け足すと、シルフは何も言わずに部屋を出て行った。

ダリウスがユーティアのそばへ寄り、その肩に手を触れる。

「あんまり考えない方がいいぜ？ ユーティアが拷問されるわけじゃないしさ」

しかし彼女は顔を上げなかった。——きっと、間接的にでも誰かを傷つけてしまうのが嫌なのだろう。

「それが私たちの仕事です。時には残酷さも必要なのです……どうか、それを理解して下さい」

と、ノーアが静かな声でそう言った。

ユーティアは頷いたが、背中にはまだむず痒いような悪寒が残っていた。

第九章 溜め息

寂しかった。みんながそばにいるけれど、本当は独りぼちな気がしていた。

「……ユーティア？」

自分のせいで不幸になる人たちがいるという事実が、何故かひどく怖かった。その矛先を誰に向ければいいか分からなくて、心もやもやする。

「大丈夫か、ユーティア」

悲しかった。いつも部屋に一人きり、笑顔で過ごしていれば許される毎日。求めたくて伸ばす手を、勇気が無くて抑え込む。

「ユーティア、聞こえてるんだろう？」

哀しかった。全ての人を許せない自分が情けなくて。その上で幸せに暮らす毎日の、いつか切れてしまう時が、ひどく怖い。

「おい、ユーティア」

ギユスターに肩をつかまれて、ユーティアははっとした。見るとすでに朝食の支度が済んでいた。

「……何」

「何度呼んでも返事をしないから……また何か考えてたんだろう？」
呆れた風にそう尋ねる彼を、ユーティアはただぼーっと見ていた。

「そうね、うん」

ギユスターが訝しげに彼女を見る。傍目にも顔色の良くない彼女はベッドから腰を上げ、朝食の席へと向かった。

シルフが椅子を引いてやり、ユーティアはまたはっとして動きを止める。メイリアスが首を傾げて彼女を見つめ、シルフもその様子を怪しむ。

「……わたし、わたし」

声が震えていた。やがてユーティアはがたがたと震えだし、その場にぐず折れてしまう。

「ユーティア!？」

シルフが慌てて彼女のそばで膝を付く。

「わたし、わたし何もしてない……何も、してないのにつ」

シルフがその肩に手を触れると、ユーティアはぴしゃりとそれを拒絶した。思いがけないことに驚いて、シルフはひるんだ。

「わたし、だって、ただここに……こんなところ……何で、わたし
ばっか、何も」

彼女のこんな姿は初めてだとギユスターは思う。それ故に、どう
対処するべきか分からない。

「わたし、何もしてないのよ。それなのに、どうして彼らは、わた
しのせいで……わたしのせい? わたしは何もしてないのに?」

視線が遠くを彷徨っていた。気分が悪そうに苦しい呼吸を続け、
喘ぐように言葉を紡ぐ。

「わたし……女神なんて信じない。誰も助けてくれないなら、信じ
ないっ」

ひとまず彼女を落ち着かせなければならないと、メイリアスがそ
の身体に手を伸ばす。

「やめてっ」

と、シルフ同様拒絶されてしまい、メイリアスはすぐに手を引い
た。

「ノーアを呼んでくる」

無理矢理にでも彼女を落ち着かせようと考えてギユスターがそう
言うのと、ユーティアの震えがぴたりと止んだ。歩き始めたギユスタ
ーの耳に、不吉な言葉が響く。

「そうだわ、わたしがいなければ彼らも不幸にならないで済む」

はっとしてそちらを見ると、ユーティアが二人を振り切って立ち
上がっていた。そして扉へ向かって駆けだし、ギユスターはとっさ
にその腕を掴んだ。

「馬鹿な真似はよせ!」

「やめて、わたしさえいなければ世界は平和なのっ」

ギュースターは逃れようとしてもがく彼女を取り押さえたが、彼女は抵抗を止めなかった。

「きつとみんなが迷惑してる。わたしがいなくなれば、全て片付くのよ」

どこか冷静な口調でそう言った彼女はギュースターの腕から抜け出し、再び前へ顔を向けてしまう。

「そうじゃないだろ！ お前は……」

と、ギュースターは後ろからその華奢な身体を抱きすくめた。彼女の足は動きを止めず、顔もそちらへ向いたままだった。

「お前がいるから、俺はここにいるんだ。他の奴らだって、みんなお前のことを迷惑だとは思っていない、あいつらだってそうだ」

「じゃあ、どうしてギュースターはわたしを愛してくれないの——？」
腕に込めた力が一瞬だけ抜けた。その隙に彼女が扉を開けて廊下へと消えて行く。

「っ、馬鹿！！ 城内の全ての人間にユーティアが消えたと伝えろ！俺が彼女を追うから、お前はノーアたちにこのことを早く！」

シルフとメイリアスが部屋を出て行く姿を見送って、ギュースターは呆然と頷いた。

「……ああ」

彼女に嫌われたなんて考えたくなかった。しかし、ありえない話ではないと思ってしまう自分がいるのも——残念ながら事実であった。

神様なんていない。わたしはわたし。女神なんて作り物。わたしは普通の人間。わたしはわたし。

床を駆ける、足音が響く。世界ってこんなに広がったんだ。知らなかった。誰かの声、通り抜ける風。階段を蹴る足は軽い。

太陽が眩しく顔を照らす。心地良い。ああ、このままどこかへ飛んで行けそう——。

「ユーティア……!」

はっとして目の前を見ると、遠ざけられた窓が横に倒れていた。

「え……?」

そしてユーティアは、自分が廊下へ倒れていることに気がつく。

直後、シルフが自分を引きとめたことにも。

「いきなりどうしたんだよ、ユーティア」

シルフの息は上がっていた。

太陽が記憶よりも高い位置にある。すぐそこに窓があるというのに、ユーティアは呆然として何も言えなかった。

赤い装飾のされた廊下、見たことのない場所、町の喧騒が遠くに聞こえるところ。ユーティアはおもむろに上半身を起こした。

「……っ、わ、わたし」

自分が何をしようとしていたのか、ようやく思い出した。途端に涙がぼろぼろと溢れてきて止まらなくなる。

言葉にならない声を上げて泣き始める彼女を、シルフはそっと抱きしめた。

「ここ、四階だぞ。何があったのかは分からないけど、危ないことはするな」

と、背中を撫でられながら、ユーティアの冷静な思考はそれまでの事柄に整理をつけ始めた。

騒ぐ侍女や兵士たちをすり抜けて、ただひたすらに走っていた。心が後ろ向きな考えにはまりこんで、途中で見知った人に捕まえられそうになったけれど、それすらもすり抜けた。……今も周囲では、たくさんの人がわたしを見ている。

「しばらく何も考えるな。気が済むまで泣いておけ」

優しい声がそう言うので、ユーティアはすぐに思考を放棄して、その胸にすがった。

シルフの胸ですやすやと眠る彼女を、ギユスターは複雑な面持ちで眺めていた。

「一件落着ですね」

ノーアが溜め息混じりにそう呟き、ダリウスが言う。

「きっと情緒不安定だったんでしょね」

ユーティアの寝顔は安らかだった。もうその心が自分に向いていないのではないかと思うほど、安心しきった表情だった。

シルフが立ち上がりうとして彼女を横抱きにすると、ダリウスがすぐにそれを補助した。しかしシルフは彼女の身体をダリウスへ預けてしまう。

「悪いが彼女を頼む。どうやら足を挫いたらしい」

「マジかよ、了解」

ダリウスに抱かれた彼女がわずかに表情を歪めて見えた。口元がかすかに動き、ギュスターはそれを凝視する。しかし、彼女の口元からは何も読みとれなかった。

部屋へ向かう二人を追ってギュスターが向きを変えると、右足を庇いながらシルフが横を通り過ぎていった。

『どうしてギュスターはわたしを愛してくれないの——？』

……今まで自分は彼女に何をしてやれた？ 後悔と不安で、手の平に汗が滲んだ。

＊ ＊ ＊

室内は静まっていた。ユーティアが目を覚まし、ギュスターがいち早くそれに気がつく。

「……ごめんなさい」

小さな声がそう言い、ギュスターは椅子を立つ。彼女のそばへ寄ると、その瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「本当にごめんなさい、わたし……わたし、何しようとして——」
ギュスターはその頬へ手を伸ばす。

「もう気にするな、ユーティア。謝ることはない」

全ての物に優しくしてしまうユーティアだから、ストレスを限界まで溜めてしまったのだろう。しかし、次に彼女の発した言葉は、

彼の想いを裏切るものだった。

「……シルフさんと、二人きりにさせて」
雪崩のように不安が募る。やはり彼女は、もう自分のことなど……。

「ギュスター」

シルフが目で従えと言う。

彼女から手を離し、半ば放心状態のギュスターをダリウスが連れて行く。

——彼女の心変わりなんて、信じたくなかった。

シルフはただ天井を見つめる彼女へ近づき、ベッドの端に腰を下ろした。

「さつきは、ありがとうございました」

と、落ち着いた声でユーティアが言う。この状況が何を示しているのか理解しかねていたシルフは、何も返さなかった。

「わたし、飛び降りるところでした。本当はそんなこと、したくないのに」

シルフは床を見つめていた。

「どうしてでしょう。わたし、不満なんてないのに。今の生活は楽しいし、わたしはみんなに守られていればいいのに。わたし……、闇魔法の人たちを可哀想だと思ってしまいました。最高神が宿っているわたしを狙ったせいで、牢屋に入れられて、すごく不幸な人たちだと」

「……傲慢だな」

「ええ。わたしも今では、そう思います」

「じゃあ、どうしてあんなことを？」

ユーティアは一つ息をつく、静かな声で言った。

「——彼の気持ちが、よく分からないんです。仕事だと分かっているけど、どうしてもわたし……彼に甘えたくて」

彼女の気持ちはまだギュスターに向いていた。

シルフは溜め息で想いを隠し、彼女へ言った。

「それであいつを困らせたのか」

「……はい。きつと、そういうことです。わたしはただ、彼に助け出して欲しかったんだと思います」

「だからって、あんなこと……」

「よく分かりません。わたし、自分のことなのによく分からない……」

「ゆっくり休んだ方が良い。変なことは考えるな」

彼女が目を閉じる。うわごとのように「ごめんなさい……もつとわたし、大人になりたい」と、彼女が口を閉じる。

やがて整った寝息が聞こえて来た頃、シルフはユーティアを振り返った。あどけなさを残す純粋な少女の寝顔、優しさを灯す柔らかな……愛おしい女性の。

「……」

触れてはいけないと分かっていた裏で、二人きりでいるこの状況を上手く使え、と、もう一人の自分が囁く。触れられるのは今しかない、誰も自分を見ていない、目の前にいるのは紛れもない彼女。

頭では理解していたはずなのに、手が勝手に伸びていた。白い頬に触れ、そっと撫でる。……彼女の口が疎ましい人の名前を呼ぼうとも、今はただ彼女を独り占めできることが幸せだった。

——こんな自分は、彼女に何をしてやれるのだろうか？

第十章 大事な事

紅茶がゆらりと揺れていた。その水面に映る自分の顔から、ユーティアは目をそらした。

「失礼ですが、以前からそのような願望はお持ちで？」

「はい、普段は前向きになろうと努力してるんですが、時々どうしようもなく怖くなって、変なことばかり考えちゃって。頑張ってるんですけれど……」

ノーアが小さく溜め息を零す。

「なるほど。そういう時は誰でもいいので言ってくだされば、ちゃんと話を聞きますよ」

と、半ば呆れたようにノーアは笑った。ユーティアは誤魔化すようにカップへ口をつけ、横で聞いていたダリウスが口を挟む。

「オレだっているし、メイリアスにだって話そうと思えば出来るはずだぜ？」

その通りだとユーティアは思う。しかし後ろ向きな思考に氣を取られると、そんな考えすら出来なくなるのが自分の悪い癖だった。

「とりあえず、今日は中庭にでも行きましょう。太陽の下を歩けば、気分もよくなるはずですよ」

ユーティアがカップを戻し、ダリウスがノーアを見る。

「え、危険じゃないんですか？　ってゆーかオレ、初耳なんですけど」

「今日は特別です。いつ何が起くるかは分かりませんが、だからと言って、ずっと部屋に閉じ込めておくのも心身に毒ですからね」
ダリウスが「マジかよ」と、どっちつかずの返事を返し、ノーアはユーティアへ目を向けた。

「今回のことは私たちにも責任があります。今後は更なる配慮を心がけますが、辛くなったらすぐ誰かに教えてくださいね」

おずおずとユーティアが顔を上げれば、二人の穏やかな視線に会

った。その内には、ユーティアに対する強い決意が秘められている。
「……はい」

ユーティアはほんの少しだけ、元気になれた気がした。

「そういえばこの前、睡眠薬には慣れているって言ってましたけど、
どういう意味なんですか？」

久しぶりに歩く中庭は涼しく、昨日よりもだいぶ元気を回復した
ユーティアは、ノーアへそう尋ねた。

「……ああ、そのことですか」

と、少し考える様子の後にノーアは答えを返す。

「私が一級魔法使いになった頃、多くの人間から恨まれましたね。
そういう事を、何度か経験しただけですよ」

驚いて何も言えないユーティアに、ダリウスが補足をする。

「十年前はすごかったんだぜ、天才魔法少年って噂が流れてさ。そ
れを喜ぶ人もいれば、負けたくないって悔しがる人もいて、あの頃
は本当にやばかったよ」

「当時は騒がれすぎて、嫌でしたけどね」

見ると珍しくノーアが視線を遠くに向けていた。それに気づいた
のかそうでないのか、ダリウスがまた口を開いてユーティアへ言う。
「そうそう、アデュートール家の天才児が少し風邪を引いただけで
も、貴族の間にはすぐ情報が入ってきてさ。愛されてるんだと思っ
てたけど……やっぱ、違うんだな」

ユーティアはますます何て言えば良いのか分からなくなってしま
った。ノーアが彼女を見てにこりと微笑む。

「ですが、それも今では良い経験だったと思います。あの頃が
なければ、今の私はありませんからね」

「……そうだったんですか、ありがとうございます」

と、ユーティアは無難な言葉を返した。

そして静寂を数歩進んだ時、居辛そうにしていたダリウスが唐突
に言い出した。

「オレ、小さい頃から魔法使いには憧れてたんですけど、本当にそうなりたいてって思ったのは、その頃なんですよね」

ノアは何も応えない。

「世の中にはこんなすごい人がいるんだって、その時知って、義務教育を卒業したらすぐに魔法使いを目指そうって決意したんです」

三人とも誰かと目を合わせようとはしなかった。ただ続いていく道のりに、温い風が吹き抜ける。

「だけど、どんなに頑張っても魔法使いにはなれなかった。人には才能があるんだと聞かされて、仕方なくオレはそれを諦めました。それでも憧れの人に会えるならと思って、軍に入っただけです。同じ立場になれなくて悔しかったけど、せめて顔だけでも見たかった。でも、しばらくその人に会うことは出来なくて、ずっとオレは憧れてきました」

ダリウスの足が止まる。ユーティアが立ち止まり、ノアが動きを止めて後ろを振り返った。

「それなのに、本物がこんなに嫌な奴だなんて、思いっきり期待を裏切られましたよ」

そう言っただけで笑ったダリウスに、ノアがいつもの笑顔を浮かべた。「上手い作り話ですね。ダリウスにしては良く出来ていると思いますよ」

「ちがっ……！ え、ええ、ありがとうございます」

再び二人が歩みだし、ユーティアもその後を追って歩き出す。ノアの表情に笑みが戻り、ダリウスも楽しそうにしていた。

「だいたいにして、魔法は元来単純なものなんです。ただ、小学校で教わる事を全て根本から理解できなければ、魔法使いになるのはまったく無理なことですけどね」

「どうせオレは馬鹿ですよ。まあ、ノアみたいに物事をいちいち難しく考えること自体、すごく面倒だと思いますしねー」

「おや、私は馬鹿だなんて言ってますが？ 少し自意識過剰になっっているんじゃないですか、ダリウス」

「そういうあなたはちょっと臆病なんじゃないですか？ 一級魔法使いなら魔法使いらしく、もっと堂々としていれば良いのに」

「それもそうかもしれませんがね。ですがその前に、自分自身を振り返ることも必要ですよ。もしかしたらメイリアスのことで舞い上がっているのかもしれませんが、一度頭を冷やしたらどうです？」

ダリウスが押し黙り、ノーアがにやりと笑う。そんな二人を見ていたら、傍観者のユーティアまで楽しい気分になってきた。

「そ、それよりもオレは、オレは……っ」

「何ですか？」

睨み合う二人の様子にユーティアが思わず笑い声を漏らすと、ダリウスが叫んだ。

「ああ、もうっ！ さっきの話、全部取り消し！」

さっき、というのがどこからどこまでなのかはあえて聞かないことにして、ユーティアはただ笑っていた。

＊ ＊ ＊

彼女の弱さを受け止めるのが自分の役目だと思っていた――。

ギユスターは煮え切らない気持ちを抱えたまま、城内をうろついていた。

「あ、ギユスターだー」

ふいに名前を呼ばれて顔を上げると、克蘭ベリー王女がこちらへ向かってくるのが見えた。

「ごきげんようー」

と、近寄ってきては、お決まりの気の抜けた挨拶をしてくる。ギユスターはそれまで考えていた全てを振り払って、彼女へ返した。

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

彼女とは特別神衛部隊に配属されてから顔見知りになったのだが、いまだにギユスターはどこか堅苦しい貴族の挨拶に慣れないでいた。

「元氣ないねー？」

克蘭ベリーは自分の周りにいた侍女たちへ顔を向けると「ちょっと話したいから、待ってて」と、言いつけた。そして立ち尽くすギュスターに視線を戻し、克蘭ベリーは優しく笑う。

「ユーティアと喧嘩でもしたの？」

「……いえ、そういうわけでは」

まったくその通りではなかったが、ほとんど凶星に近かった。複雑な顔になるギュスターを見て、克蘭ベリーはその裾をきゅっと引っ張った。

「やっぱり、ユーティアのことなんですよ？　ぼくが相談に乗ってあげるよ」

地下牢に足音が響く。

一番奥まで進んでいくと、シルフは下へ目を向けた。

「あら、オード家の坊ちゃんが自ら来るなんて珍しい。また事情聴取かい？」

「特に用があってきたんじゃない」

両膝を抱えていたイズンは姿勢を変えることなく彼を見上げた。

「ああ、とうとう自覚したのね。それと同時に限界も来てる」

シルフはただイズンを見下ろしていた。

「だけど他の奴らには言えないから、あたしに会いにきた。ミスター・オード、残念だけどあたしには何もしてやれないよ」

と、イズンが普段と変わらぬ口調で言う、シルフの身体が落ちるようにして檻へ寄りかかった。そして重い溜め息を一つつく。

「それくらい分かっている。俺が聞きたいのは――」

「彼女に今の自分が何をしてやれるか？　ふん、知るはずないだろ。あたしに聞く方が間違ってる」

「……っ」

檻が揺れる。

「彼女は何も気づいてくれない、仲間たちには言いたくない。でも、彼女の優しさと弱さが自分を傷つける……羨ましいね、宿り主のお

嬢さんは」

シルフから目をそらし、暗い天井を見上げると、イズンは言った。
「あたしもそうなりたかったな。きっと彼女は、みんなに愛される存在なんだろう？」

「でも、だから……っ」

何か言おうとして口を開くシルフを、イズンは蔑むように一瞥した。

「あんたが壊れる姿は見たくないよ、しばらく黙ってな」

相変わらず空気が悪かった。

「まあ、そうだね。強いて言うなら綺麗さっぱり諦めて、その想いを捨ててしまえば良いさ。それがあんたに出来るとは思えないけど、そうするのが誰も傷つけずに済む一番の方法だね」

床は冷たく、はめ込まれた魔法石が鈍い輝きを放っている。

「あんたも本当はそれがいいと思っているんでしょ？　なのに迷っている。何を迷う必要があるのか、あたしにはいまいち分かんないけどさ、彼女の幸福を願っているんだったら、そうするしかないよ」

それにあんた、もう大人だろ？　――両目を閉じたシルフの頬に、懐かしい温度が伝って落ちた。

「貴族の紳士なら、さっさと諦めな。あたしは別にあんたがどんな結末を迎えたって、どうでも――」

「これほど心地良いと思ったのは初めてなんだ」

「……それで、今の関係が続けて行きたいと？　なのに想いは捨てきれないわけだ。彼女に胸ときめかせられる毎日が楽しい？」

シルフが唇を噛む。イズンは微笑を浮かべる。

「所詮、恋なんてただの幻想でしかないんだ。相手を好きだと思っ
ていても、それは自分がそう錯覚しているだけ。人間が本当に愛せるのは、自分だけなんだよ」

イズンは立ち上がり、背を向けた彼へそっと手を伸ばした。

「良い夢を見たと思って諦めな。他にもあんたを夢中にさせてくれ

る女はいっぱいいる」

小さな冷たい手が震えていた大きな手に触れて、シルフはとっさにイズンを拒絶した。

怯えた表情でこちらへ身体を向ける彼に、イズンはなお手を伸ばす。

「あんたなら乗り越えられる。早く大事な事に気づきな、彼は盾だ。あんたがどんなに頑張っても、彼には勝てやしないよ」

そして細い腕に身体を捕らえられる前に、シルフは逃げ出した。

「シルフが、ユーティアを……で、でもユーティアはそんなことないよっ！」

思いきり否定した少女にギュスターは心なし驚いてしまった。

「だって、だって、ユーティアはギュスターのこと大好きだもん！」

「……ですがプリンセス、あの時彼女は、俺を必要としなかったんですよ」

「違うよ！　きっとそうじゃない！」

なんて言ったら良いのかわかんないけど……、と、克蘭ベリーは俯く。ギュスターが小さく息をつくとき、克蘭ベリーがまた顔を上げた。

「大事な人だからこそ、心配かけたくないんだよ。ぼくだって……そういう時、あるもの」

外見は少年でも中身は立派な女の子らしい。ユーティアの気持ちを必死に代弁しようとする彼女に、ギュスターは言った。

「そういうものなんですか、俺には全然分かりません」

「うーん、たぶん……きつと、そういうことだと思っただけ……」
克蘭ベリーが唸り声を上げる。――やはり真相は自分で確かめない限り分からないのだろうか。

ギュスターがそう思った直後、克蘭ベリーがひらめいた。

「そうだ。いっそのこと、求婚しちゃえば？　そうしたら、ユーティアの気持ちはどうなっているのか分かるでしょ？」

突拍子のない提案に思わずギュスターはきよんとしてしまふ。
何も返さない彼に、克蘭ベリーがにっこり微笑んだ。

「きつとユーティアは喜ぶよ。でも、万が一断られたら……その時はご愁傷様」

と、克蘭ベリーは苦笑した。その考えは諸刃の剣のように思えたが、それが一番手っ取り早い。

「……そうですね。思いきって、やってみます」

ようやく心の決まったギュスターは、先ほどよりも晴れた顔をしていた。克蘭ベリーも明るい顔で彼の背を押す。

「うん、頑張ってね！」

「はい。ありがとうございます、プリンセス」

* * *

「……」

椅子に座っていたユーティアは困惑する表情を見せた。ギュスターの隣にいるはずのシルフがおらず、代わりにノーアがそこに立っていたのだ。

「執務室の私の机に手紙が置かれていましたね。突然休みたいだなんて、まったく困ったものです」

と、ノーアは言った。状況を飲み込んだユーティアにギュスターは説明をする。

「昨日の夕方から誰も彼を見ていないんだ。何かに巻き込まれたとは思えないが、今は行方不明ってところだな」

「本当はダリウスに代わってもらおうとしたのですが、何か大事な用があると言うので、逃がしてしまいました」

そしてノーアが溜め息をついた。

思わず申し訳ない気分になったユーティアだが、それと同時に何故シルフが休みを願い出たのか疑問に思う。

「……早く、戻ってくると良いですね」

ユーティアがそう呟くと、ギユスターが少しだけ目をそらした。それから朝食を終えてメイリアスが部屋を出て行くと、珍しくノーアがあくびを零した。

「ノーアさん、相当疲れてるみたいですね」

と、ユーティアが言うのと、ノーアは首を横に振って返す。

「いえ、そういうつもりはないのですが……」

そして二度目のあくびを噛み殺すと、ノーアは「申し訳ありません」と、謝った。やはり疲れているのだ。

その様子に、ユーティアは後ろめたくなった。

「そうじゃないって分かっているけれど、わたしの方が申し訳ないです。いつも、ただ守られているだけで……本当にごめんなさい」

ギユスターは口を開かなかった。

ノーアがそんな彼女を氣遣って言い返す。

「謝らないで下さい。あなたは大事な人なんですから」

「……はい、ごめんなさい」

ギユスターは呼吸を整えるように息をつくと、口を開いた。

「お前が謝る必要はない。そうやって、いつも自分のせいにするから不安定になるんだろう」

がたっとノーアが空気を読んで席を立ち、陽光差す窓際へ寄って行く。

「誰もお前を責めないんだから、余計な事は考えるな」

窓の外は快晴だった。

「……分かってる。でもわたし、本当に何も出来ないから」

「それで良いんだ。お前は何かする必要がない」

ユーティアが唇を結んだ。ギユスターの鋭い視線が彼女を睨んでいた。

「何で、何で分かってくれないの……っ」

呟くように吐き出されたその言葉が、静寂の中に跡形もなく消えていく。ギユスターは呆れたように溜め息をつき、彼女から視線を外した。

「分かってるさ、お前のことなら。だからこそ、ユーティアの泣き顔は見たくないんだ」

扉が開き、メイリアスが戻ってくる。それとほぼ同時に、ギュースターが椅子を立ち、ユーティアのそばにひざまずいた。

びくつと肩を振るわせたユーティアに、ギュースターが真剣な目を向ける。

「ユーティア、俺と結婚してくれないか？」

うとうとしていたノーアが目を覚まし、メイリアスが目を丸くする。

「お前が安心して暮らせるようになったら、すぐに村へ戻って一緒に暮らそう」

「いきなり、何で……」

困惑するユーティアにギュースターがその手をとって、甲へ優しくキスをする。

「お前を他の誰にも渡したくはない。好きなんだ、愛してる」

分かりきっていることをわざと口にする彼に、ユーティアはますます困惑してしまった。

「……っ、で、でも」

と、ユーティアは言うのと、両目に涙を浮かばせた。間もなく大粒の涙が頬を伝い、淡い緑色のワンピースを濡らす。

返答を待っていたギュースターは彼女が涙するのを見て、優しくその頭を抱き寄せた。ユーティアが彼の背に腕を回し、嗚咽しながら声を出す。嬉し涙だった。

屋敷の中は珍しくひそひそ話で満ちていた。嫌な空気が循環しているのを感じて、ミシュガーナは世話役の侍女へ尋ねる。

「何かあったの？」

室内を綺麗に掃除しながら侍女は答えた。

「昨夜帰宅したきり、シルフィネス様が私室にずっと閉じこもっているんですよ。どうやら気分が優れないみたいで、今日は仕事も休

んでいるようです」

「シルフィネスが？」

侍女が「ええ」と答え、ミシュガーナは窓外に見える本館へ目を向けた。

「ご心配ですか？」

「……もちろん」

心なし落ち込んだミシュガーナを見て、侍女はにっこり微笑んだ。
「それでは、後であちらへお見舞いに行きましょう。お供いたします」

扉を開けると同時に目に飛び込んできた光景に、ダリウスは思わず、まずい時に来てしまったのかと思った。

「あら……何の用？」

と、ダリウスに気が付いたメイリアスが言う。

「あ、いや、別に」

ダリウスは中へ入り、扉をそっと閉めた。メイリアスが首を傾げ、ダリウスは静かにそちらへ歩み寄る。

「なあ、聞いていいか。何があったんだ？」

「ミスター・ファールバードがユーティアに求婚したのよ」

向かいの窓際にいたノーアがこちらを見ていた。

ダリウスはポケットに手を入れて、しばらく逡巡した後、その中の物を取り出した。

「……これ、やるよ」

彼女には目もくれずに言いながら、ただ腕を突き出す。不意打ちの出来事にメイリアスは驚いたが、その手にあるのが小さな箱であることに気づく。

胸が高鳴るのを感じながら、メイリアスはそれを受け取った。

「あ、ありがとう……」

そして箱を開ければ、乳白色の宝石がついた指輪が現れる。ダリウスは横目に彼女を見ると、言った。

「た、高かったんだから、大事にしろよな。お前、がさつだからさ」
「っ、そっちこそ……！」

メイリアスも顔を上げて言い返そうとするが、何故だか言葉が出てこなかった。喉が詰まって、言いたいことが上手く声にならない。
「……こ、こんな物……もっと、安くて良かった……のに」

半ば独り言に近かった。メイリアスの瞳に涙が溢れ、ダリウスは視線を宙へ向けて言い返す。

「これも、大事な儀式だろ。いちいちお前のわがままに応えてられねえよ」

メイリアスの肩に手を伸ばしたダリウスを見て、ノーアは一人、目を細めた。一日で二組もの恋人たちが婚約を交わすとは――。

ノーアは扉へと向かって行きながら、あくび混じりに告げた。

「では、邪魔者は退散しますか。後は若い方たちだけでどうぞ」

「お邪魔するわよ、シルフィネス」

久しぶりに訪ねたその部屋は薄暗かった。

「シルフィネス、いるんでしょう？」

侍女に車椅子を押されながら、ミシュガーナは室内のどこかにいるであろう人物を目で探す。

「……眠ってるの？」

寝巻きでも普段着でもなく仕事用の軍服のまま、彼はベッドに倒れていた。

「下がってちょうだい」

と、ミシュガーナは侍女を部屋から出して、自分と彼の二人きりにさせた。

シルフがわずかに身体を動かし、ミシュガーナは近くへと進む。

「何があったの？　シルフィネス」

表情は見えなかった。

「あなたが仕事を休むなんて珍しいじゃない。何か理由があるんでしょう？」

「……放っておいてくれ」

抑揚のない声がそう答え、ミシュガーナは眉をひそめた。

「他の人には何て言ってきたの？　きつとみんな心配してるわよ」

「……」

「シルフィネス、何か言いなさいよ」

「……分からないんだ」

「何が？」

「……どうしたら良いのか、彼女のために出来ること、それが分からない」

まったく意味が理解できず、ミシュガーナは車椅子の方向を変えて窓へ寄った。閉ざされたカーテンを開き、彼の方を振り返る。

「……っ」

シルフが眩しそうに顔を背けた。そしてまたそちらへ進もうとした時、ミシュガーナの脳裏にある映像が映った。

「シルフィネス、あなた……あの子のこと」

はっとしてミシュガーナは目をそらす。だらしない軍服姿の彼の背に、隠された本音が見えていた。

「……」

「……」

重たい沈黙だった。ミシュガーナの車椅子が不快な音を鳴らし、シルフは死んだように倒れたまま動こうとしない。

やがてミシュガーナは扉の前まで来ると、彼へ言った。

「最高神と宿り主に関する情報を一から見直すの。その途中できつと、大事な事に気づけるわ」

太陽光が照らす暗い室内を、扉の閉まる音だけが支配する。

第十一章 前向きに考える

「結局、今日もまた来ませんでした」

「……無断欠勤ですね」

「どうするんですか、ノーア。これから先も彼が来ないつもりなら深夜の本部は呆れた溜め息で溢れていた。

「一度、様子を見に行くしかないでしょう。ミス・オードからは、彼がずっと部屋に閉じこもっているとの話ですし」

と、ノーアは椅子の背にもたれた。

「今日はギュスターとオレが護衛だったから、明日はノーアとオレだろ。したら、空いてるのはギュスターだけです……」

「いえ、その役はダリウスに任せます。ギュスターには悪いのですが、明日の午前中だけ護衛についてくれますか？ その間にダリウスはシルフの様子を見てきて下さい。午後はギュスターと交代して、護衛に」

異論はなかった。あのシルフと最も親しく会話できるのはダリウスだけだった。

目を覚ました太陽が少し高さを上げた頃、ダリウスはオード邸を訪ねていた。飽くまでも友人の一人としてやってきた彼は、軍服ではなく私服を着用している。

使用人に案内されて目的の部屋まで来ると、ダリウスは扉を叩いた。

「シルフィネス、ダリウスだ。入ってもいいか？」

返答はなかった。ダリウスは構わずに扉を開けて中へ入る。

「……うわ」

部屋の中は無残に散らかっていた。侍女が綺麗に掃除してくれるはずなのに、それを無理にでも散らかしたらしい。

「シルフ？」

その人物は窓際にいた。だらしない私服姿の彼へ向かっていくと、ダリウスは彼が半ば放心状態になっていることに気がつく。

「今日は良い天気だな、風が吹いてる」

シルフは答えなかった。少しだけ開いた窓の隙間から風が入り込んで来て、部屋をさらに散らかす。

「みんな、お前を心配してるよ。何があったのかなんて分かんないけどさ、とりあえず無断欠勤はやめようぜ？」

数日見ない間に髪の毛が伸びたのではないかと思うほど、彼の頭は乱れていた。

「そろそろノーアが怒り出しそうで怖いんだよ。どうせとばっちり遭うのはオレだろうし」

静か過ぎた。いつもの彼らしくないその姿に、ダリウスは内心戸惑っていた。

「ユーティアだってお前のこと――」

「やめてくれ」

ふいにシルフが声を発し、ダリウスはきょとんとしてしまう。

「は？」

「やめてくれ、何も言うな」

「……そうか」

ダリウスは口を閉じた。

そしておもむろにシルフが床へうずくまる。

「何泣いてるんだよ、お前」

無意識に放った言葉はどこか冷たく、シルフは耳を塞ぐように頭を抱えて嗚咽するだけだった。――どうやら原因は、彼女にあるらしい。

ダリウスは再び窓外に目を向けてしばらく考えると、苦しむ彼に残酷な事実を突きつけた。

「ついこの前、ギュスターが彼女に求婚したよ。二人はもう婚約者同士だ」

シルフがさらに身を縮めた。まるで聞きたくないとでも言うよう

な……否、分かっていると言った風に見えた。

「もう諦めるしかないな。ってゆーか、最初から諦めるしかなかったんじゃないか？」

「……っ」

「お前が誰に好意を抱こうが構わないけど、仕事はちゃんとやったほうが良い。公私の区別はきっちりつけなければいけない、って前にノーアも言ってたよ。まあ、そう言うノーアが、一番出来てないと思うけどな」

やはりシルフの返答はなかった。これ以上は何も得られそうにないと判断したダリウスは、自分に出来る最大の励ましを送る。

「むしろしゃするなら、自分の好きなことに没頭すれば良い。それで少しは心が楽になるし、そんな気持ちだって少しは忘れられるよ」

そして背を向け、歩き始める。シルフがわずかに頭を上げると、ダリウスが「そうだ」と、立ち止まった。

「前向きになることも大事だぜ。ほら、ユーティアもよく言ってるだろ？ 前向きに考える、って」

＊ ＊ ＊

布団から出たユーティアが床へ足を下ろすと、メイリアスがふいに首を傾げた。

「あら、ペンダントが……」

胸元に下がったそれを手に取ったユーティアは、はっとした。中心にはめられた赤い石に亀裂が入っていたのだ。

「……壊れてる」

二人は顔を見合わせてその原因を探し出そうとしたが、まったく何も思い浮かばない。

「とりあえず、着替えましょうか」

「うん……そうね」

いつもと同じ時刻に部屋へ来た二人は驚いた。ユーティアの様子
が何かおかしいと思ったら、いつもは洋服の中に隠してあるペンダ
ントを外に出しており、しかもその中心が割れているではないか。

「おはよう、ユーティア。ってゆーか……」

ダリウスが言葉を濁し、ギュスターもまた複雑な心情で言う。

「おはよう、ユーティア。その……ペンダントは、何があったんだ
？」

ユーティアは曖昧に首を傾げて「おはようございます。これは、
朝起きたら、壊れてて」と、答えた。メイリアスが諦めるように首
を横に振り、部屋を出て行く。

「マジかよ。原因も分からないってのか？」

「はい」

「何だか嫌な感じがするな。とりあえずノーアに報告——」

と、ギュスターは言いかけて言葉を止めた。

「いや、それは後でメイリアスに頼もう。今はどっちも抜けるべき
じゃないだろう」

「冷静な判断だな、ギュスター。まあ、今の時間だとあの人、執務
室に着いたばかりだろうしな」

そして二人は椅子に腰を下ろし、割れたペンダントを眺めた。

「どこかにぶつけたとか？」

「それはないな。普段どおり、寝巻きの下に隠していたんだろう？」

「うん、一応。でも、朝はいつも外に出ちゃうから、寝ている間に
割れたんだと思うわ」

「床には当然、落ちないしな」

「あと考えられるのは、何かがペンダントにぶつかった、ってここ
ろか」

「ぶつかる物なんて、何にもないと思うんだけど……」

「案外、ベッドの柵にぶつけたのかもしれないぜ？」

「まさか。ユーティアはそこまで寝相悪くないぞ」

「……う、うん」

「じゃあ、枕が硬かったとか」

「ないな」

「んー……悪夢を見ていて、知らないうちに握りつぶしていたとか」「わ、わたし、そんなに力ないです！ 悪夢だっと思ってません！」「ふざけるなよ、ダリウス。か弱いユーティアに石を割れるはずないだろう」

「何だよ、結構真面目に考えてるのにー」

結局、何の進展もないまま朝食の時間になってしまった。もやもやした不安を抱えたまま、三人はひとまず朝食を食べ、それが過ぎると再び頭を悩ませた。

朝食の片付けから戻ってきたメイリアスに、すっかり考え飽きていたダリウスが言った。

「悪いけどメイリアス、ノーアを呼んで来てくれ。たぶん東棟の執務室か地下牢にいると思うから」

「あら、分かったわ。ついでに紅茶の準備もしてくるわね」

そして彼女が部屋を出ると、誰ともなくついた溜め息が部屋に響く。

「だいたいにして、魔法石が割れてるのなんて、初めて見たぜ」

「俺もだ。この状態で、それが効力を発揮できるのかどうかも、まったく分からない」

ユーティアが小さく息をつき、ペンダントを手取る。

「本当に、どうしちゃったんだろ……」

不安はいつの間にか倦怠へと変わっていた。

「……これは、何があったんですか？」

「それが分からないんです、ごめんなさい」

ノーアは目を丸くしてペンダントを眺めた。ギュスターとダリウスはその様子をただ見ている。

「少し、お借りしてもよろしいですか？」

「あ、はい」

と、ユーティアが首からペンダントを外し、ノーアへ手渡す。

「何故もつと早く報せなかったんですか？　これはもう使い物になりませんよ、たぶん」

ギユスターとダリウスは謝罪をするよりも先に、珍しくノーアが曖昧な言葉を使ったのが気になった。

「たぶんって、どういうことですか？」

ノーアは赤い石をまじまじと眺めながら、

「魔法石については知識程度にしか勉強していないんです」

と、言った。意外な返答に驚いてギユスターが口を開く。

「じゃあ、ノーアも俺たちと同じで、素人同然ってことですか？」

「ええ、はっきり言うそうなりますね」

そしてノーアはペンダントをテーブルへ置いた。

「やはり駄目ですね、まったく分かりません」

その場にいた誰もが呆然としてしまった。ノーアほどの知識人であるなら、魔法石についても詳しく知っているだろうと、根拠もないのに期待していたのだ。

「うわ、超オレ過信してた」

と、呟くダリウス。ノーアは申し訳なさそうにしながら、この場にはいない仲間を思う。

「シルフを呼ぶしかないでしょう。来てくれるかどうかは、微妙なところですが」

一気に空気が重くなった。おもむろに席を立ったユーティアが、棚から白紙と筆を取って戻ってくる。

「今すぐ手紙を書いて出せば、夕方には届きますよね？」

と、ノーアへそれらを差し出した。なんとなく自分が書くよりも、彼へ任せた方が良い気がしていたのだ。

ノーアは頷き、紙と筆を受け取る。

「そうですね。やるだけやってみましょう」

部屋に閉じこもるようになってから、一週間が経過していた。いまだに部屋から出てこない従兄を見かねて、ミシュガーナは彼の私室へやってきた。

「シルフィネス、いつまでそうしているつもりなの？」

室内は以前より綺麗になっていたが、またいつ彼が散らかすか分からない。

「みんな頑張っているのよ。それなのにあなただけ、どうして逃げるの？」

車椅子を前進させて彼へ近寄ると、シルフは自嘲するように苦い顔をしていた。

「ちゃんと分かっているなら、早く戻りなさいよ」

「……」

「別に、誰もあなたを責めるつもりはないのよ。ただ、あなたがいつまでも籠もっているのが心配なの。分かるでしょう、シルフィネス」

彼の涙は枯れていた。

「早く戻らないと、後で後悔するわよ」

何を言っても無駄だった。ミシュガーナはそれでもその背に呼びかける。

「……車椅子の動作点検。週に一度は、必ずやってくれるんじゃないの？ あなたの力がないと、私は一人じゃ動けないのよ」

ミシュガーナは車椅子を後退させ、方向転換する。

彼の顔が見えないところへ移動すると、ふとミシュガーナの目に真新しい手紙が映った。机の上に置かれたそれは、封を切られていなかった。

「……これ」

シルフに反応がないのを確かめると、ミシュガーナはそれを手に取った。裏返してみると、差出人がよく知る人物である事に気づく。

「ミスター・アデュートールからじゃない！ 何で読まないのよ、シルフィネス？」

ミシュガーナの脳裏に何かがちらついていた。慌てて封を切ると、ミシュガーナはすぐさま文面に目をやった。

「……ユーティアのペンダントが壊れたって……誰もどうしたら良いのか分からず、困ってるって。シルフィネス、あなたが必要とされてるわ」

シルフの背中がわずかに動いた。それでもこちらへ顔を向けようとしないう彼が憎くて、ミシュガーナは思わず大きな声を出してしまう。

「聞いているの、シルフィネス！？ みんながあなたを待っているのよ！」

魔法石に精通する人物は彼しかなかった。だからこそ、この手紙が届いたというのに、シルフに動きは見られない。

「この状況を救えるのはあなたしかないわ、今が戻るチャンスよ。今あなたが動かなければ、あなたはこの先、ずっとこの部屋から出られない。誰もあなたを責めやしない、むしろあなたを待っている」しかし彼はまだそこに立ち尽くしていた。ミシュガーナは手紙を机の上へ戻すと、車椅子を扉に向けて前進させた。

「……早くみんなの所へ戻りなさい。あなたが今すべきことは、それだけだわ」

車が軋む。

ふいに何かが床に落ちる音がして、ミシュガーナは動きを止めて振り返った。

シルフが机の上を荒らして、工具の入った鞆を取り出していた。中身を確認してから戸棚へ向かい、数個の魔法石を取り出して鞆へ入れる。そしてそれをベッドへ放ると、さっさと軍服に着替えた。

「行くぞ、ミシュガーナ」

と、先ほどとは似ても似つかない様子でシルフは鞆を手にも、ミシュガーナの横を通り過ぎる。

「え、私も行くの？ ちょっと、シルフィネス！」

ミシュガーナは慌てて彼を追いかけた。

扉を開けるのはためらわれるだろうと思っていた。しかしシルフはそんなミシュガーナの不安にも関わらず、その扉をいつもと変わらない様子で開いた。

誰もが自分たちの登場に驚いていた。ノーアが安心するように微笑み、ダリウスが嬉しそうに目を丸くし、メイリアスは呆然とし、ギュスターがどこか生意気に口元を緩め、ユーティアが驚いた表情の後ににっこりと微笑む。

「おかえりなさい、シルフさん」

ミシュガーナの見上げた彼は、すっきりした顔をしていた。

「……長い間、勝手に休んでしまって申し訳ありません」

シルフが謝ると、ノーアは首を振った。

「いえ、良いんですよ。そんなことよりも、魔法石を」

と、彼へペンダントを手渡す。シルフはそのひび割れた魔法石を観察しながら歩みを進め、テーブルの上に鞆を置いた。空いた席へ腰を下ろし、ペンダントをテーブルへ置く。

「普通に身につけている分には壊れる事はないと思っていたが、甘かったみたいだな」

鞆から数種類の工具を取り出し、その一つで石を外す。

「この石は他の魔法石に比べて傷つきやすいんだ。ちょっとした衝撃で割れてしまうことがある。だからこれはあまり実用性がないんだが、闇を払う力には一番長けているんだよな」

持ってきた魔法石を全てテーブルに広げ、ペンダントにはまりそうな物を見極める。

その場にいた誰もがシルフの手慣れた動きに見入っていた。きらりと光を反射する薄い赤色の石を手にとると、シルフはそれをペンダントに合うよう工具で慎重に形を整えた。

「……よし、これくらいでいいだろう」

軽くやすりをかけてから石をペンダントにはめ込むと、シルフは透明な石の破片を取り出した。それを赤い石とペンダントの接触部

分に乗せ、自らの魔力で起こした火により接合させる。

「火で溶かし、その後冷やすと固まる性質がある。これは魔法石じゃないけどな」

と、シルフはまた自ら冷たい風を起こしてその石を固めた。

「これで終わりだ。もう安心して良いぞ、ユーティア」

そう言っつてシルフは腰を上げると、ユーティアの傍へ寄って行つた。その首にそつとペンダントをかけてやれば、ユーティアが微笑む。

「ありがとうございます、シルフさん」

シルフも優しく微笑みを返し、その場を離れて片付けに取り掛かる。

思っていたよりも短時間でペンダントの修復が終わった。

「つてゆーか来るの遅すぎだろ、シルフ」

「それよりも、石が壊れた原因は何だったんです？」

「悪かったな。原因として考えられるのは、何かにぶつかったところですね。それほど硬い物でなくても、勢いさえあればすぐに壊れますから」

「じゃあ、別に頭悩ませる必要はなかったってわけか。あー疲れた」
ダリウスがわざとらしく項垂れると、ギユスターが言った。

「やはりお前がいないと駄目だな、魔法石なんてよく分からない」
シルフが手を止めて彼を見る。ギユスターははっとすると、気まぐすそうに視線をそらした。

「……まあ、まだまだ魔法石は研究が進んでいないからな。そのために魔法石を勉強するのは、一般人には難しいらしい」

そうからかい混じりにシルフが返すと、俯いたギユスターが鼻で笑った。

「ふん、どうせ頭が悪い俺らには理解できないんだろ。知ってるさ、それくらい」

シルフがおかしそうに笑い声を漏らすと、ギユスターも珍しく笑った。

「ところでミス・オード、何故あなたまでここに？」

「さあ、シルフィネスがついて来いと言うので来たまです、ミスター・アデュートール」

「そうでしたか。何か、新しい情報はないのですか？」

「そうですね、強いて言うなら……近く、また闇魔法の勢力が動き出しますわ」

第十二章 フリーアの娘

愛するギユスター様へ

ここ最近、あなたとシルフさんとの仲が良くなったように思います。二人の間に何があったのかは分からないけれど、わたしは嬉しく思います。

シルフさんから貸していただいた本に、精霊の話が書かれていたのを、昨日、ふと思い出しました。学校でも習いましたが、遙か昔この世界は精霊に支配されていたんです。中でも最も強い力を持つ者（最高神）がその頂点へ立ち、わたしたち人間を生み出しました。次に最高神は、精霊と人間が共存できる世界を作り出そうとしました。けれども、その最中に悪神に狙われてしまい、精霊はわたしたちの见えない世界で生きるようになりました。才能のある魔法使いは精霊を使役することが出来ますが、それは女神が最高神の意志を継いだ結果です。だから精霊を呼び出すことは出来ても、言うことを聞かせるには契約が必要になります。その方法はいろいろですが、一般的なのは精霊に自分の血を飲ませることだそうです。そうすることで互いの間に見えない絆が築かれ、いざという時に助け合うことが出来るようになるそうです。飲むのは血でなくても構わないようです。何だかすごいですよね。

ノーアさんは契約可能な精霊の全てと、契約を完了させたと聞きました。シルフさんは力がないので、下級精霊との契約しか行っていないそうです。ノーアさんのように四大精霊を使役できたらカッコいいんだけどな、と、ぼやいていました。

剣にしか興味のないあなたには、少々退屈な話だったかもしれないですね。でも、わたしがもし魔法使いだったら、きっと何か力になったと思うのです。自分のことも、自分で守れたはずです。

……ごめんなさい。 イザヴェル城のユーティアより

＊ ＊ ＊

「せめてイズンだけでも、ここから出してやれないのか？」

「無理です。彼女が貴族の生まれであっても、それとこれとは関係ありません」

両翼を縄で拘束されたハティが不満げな顔をした。

「僕は村の生まれだし、家族とはもう絶縁状態にある。でも彼女には帰る場所があるんだ」

ノーアは動じなかった。

「それはあなた方の本部ですか？ 何を言っても無駄です、いい加減に新しい情報を教えてください」

するとハティは口を閉ざした。どうにかして救いの手を打とうとしているのが見え見えだ。

しばらく沈黙が続くと、ハティが顔を上げた。

「それなら、ひとつ聞いてもいいか？ 答えてくれたら僕も君の質問に答えよう」

と、突拍子もなく提案をする。

「ええ、分かりました」

ノーアは少し驚いたが、彼が何を聞いてくるのか気になった。ハティがこちらをじっと見つめて、どこか遠慮がちに言う。

「……その髪は、生まれつきか？」

まったく関係のない、それこそ個人的な内容の問いだった。そういえばハティの髪も白髪で、自分のそれと近似している。

「残念ですが、私の場合は染めています。元は茶髪なんです、幼い頃から白髪が多かったので、それを誤魔化すためにやっているだけですよ」

事実をそのまま述べると、ハティは少し落胆した様子を見せた。

「……そうか」

どうやら彼の髪は本物らしい。

ふとノーアは自分の過去を思い出す。――数本の白髪でも他人に

からかわれて嫌な思いをさせられた。すると、生まれつき白髪である彼は、きつと自分以上に嫌な思いをしてきたのではないだろうか。「次は私の番ですね。……流行り病を起こした理由を教えて下さい」他にも聞くべき質問は多くあったが、ノーアはそう尋ねていた。「仕返ししてやりたかったんだ。ただ僕は村のみんなを恨んでいて、やり返す方法をたまたま見つけてしまった。……それだけのことだ」原因は言わずとも知れていた。やはりノーアの推測は当たっているようだ。

「そうするのが禁忌だと知っていて？」

「……自分も、死ぬつもりだったからな」

翼の生えた人間は、その痛みで普通は命を落とす。そう知っていて、彼はその道を選んだようだ。

「それなのにあなたは今ここに生きている。……残酷ですね」

そうノーアが返すと、ハティが小さく頷いた。

「あのペンダントのことだけどな、今の魔法石は三代目なんだ」

メイリアスとの会話に夢中になっているユーティアを見つめながら、シルフはふとそう言った。

「は？」

シルフが仕事に復帰してくれたおかげで、すっかり元通りになっていた。

「ハティに襲われた時、彼女にペンダントを取られただろ？ その時、床に落ちた衝撃からか、石は完全に割れていたんだ」

「……それは初耳だな」

と、ギュスターは複雑な気分で返す。

「でも、いつ修理したんだ？ あの時はそんな時間なかっただろう」

「ああ、お前たちが怪我の治療を受けている間にな」

相変わらず淡々とした口調で言うシルフに、ギュスターは思わず首を傾げた。

「お前、あの時怪我しなかったのか？」

「少しはしたさ。ただ治療が早く済んだから、お前たちを待っている間にペンダントを直しておいたんだ」

羨ましくもあるその行動力に、ギュスターは苦笑いを返す。

「……相変わらずちゃっかりしてるな、シルフ」

するとシルフが彼に目を向けて尋ねた。

「それは褒め言葉か？」

「まあ……どちらかというと、な」

あれ以来、ギュスターは素直に言葉をかけられるようになりつつあった。シルフもギュスターに対する見方を変えたようで、

「そうか。だが正直、お前に言われても嬉しくないな」

と、軽い冗談を返せるまでになっていた。以前の二人であれば、どちらかが会話の途中で黙り込んでいたはずだ。

「じゃあ、さっきのは皮肉にしておこう」

「はは、その方がお前らしいかもな」

ギュスターが口元を緩め、シルフが陽気に笑う。

「とりあえずの問題は解決しましたが、心配ですね」

本部で書類に目をやっていたノアがふいに呟いた。うとうとしていたダリウスが、はっとして聞き返す。

「どういことですか？」

「闇魔法の彼らについてですよ。目的も組織の構成も、まだそのほとんどが推測の段階でしかありません」

「ああ、一番情報を持ってるはずのハティさえも、何も吐かないんですもんね」

「次が最後になるのか、はたまたまだ続くのか……とりあえず太陽の上がっている時間にこちらを襲うことは考えにくいですね」

ダリウスは机の上に重なった資料の束を見てうんざりする。

「あのハティが夜に来たとなれば、次も夜、か。魔法使い並みに強かったら、マジで洒落になりませんね」

「そうですね。しかしハティは、検定で測ると三級にはなるでしょ

う。つまりそれ以上の者が来ることは間違いありません」

「……マジですか。それじゃあ、やばいですね」

「やばいですよ、本当に」

と、ノーアが苦い顔で言う、ダリウスが構わずにあくびを漏らす。

「せめてもの救いは、シルフが戻って来てくれたことでしょうね。あのままでは戦闘になった際、確実に不利でした」

ダリウスは眠気を押し殺しつつ、シルフのことを思い浮かべて言った。

「それと、ギユスターとの仲が前よりも良くなったことですね。この様子なら、ちゃんと協力し合える」

「……ええ、そうですね」

以前から彼らの仲があまり良くないことを二人とも心配していた。いつかは打ち解けてくれることを願っていたが、実際にそうなって見ると、何となく複雑である。

「だいたいにして、ギユスターが素直じゃないから駄目だったんですよ。シルフも優しくないから、あいつには何も言わないし」

「それが突然仲良くなるなんて、まったく不思議なものですね」

しかし、この結果が悪い方向へ転ぶ事だけはないと予感していた。ノーアとダリウスは目を合わせて、それを無言で確かめ合う。

「あいつらが本気出して協力すれば、きっと上手くやりますよ」

「ええ、そうですね。ダリウスもいざという時は、本気出して頑張ってくださいね」

「な、オレはいつだって本気ですよ！」

怒りだすダリウスが面白くて、ノーアは笑い声をあげた。

＊ ＊ ＊

「オースサズ、ド、ファルノウン、ホーパ、フィヨルニル」

錠が外れ、扉が開かれる。人気のない図書室のその奥に入ったシ

ルフは、静かに足を進めた。

——だいぶ前にミシュガーナに言われた言葉を思い出し、最高神と宿り主について一から調べなおそうと思い立ったのだ。彼女の予言が当たるのならば、自分が望む以上の物を発見できるはずだった。古ぼけた書物のたくさん並んだ本棚、そこから資料として一度は目を通した本を取り出して見る。以前見落とした文章があるかもしれないと思い、最後まで頁を繰り続けたが、新しい発見はなかった。仕方なく本を棚へ戻すと、ちょうど下段にあった本の背表紙に目が行った。古い字体で『精霊魔術について』とある。

「……」

何故だか興味が湧き、それを手にとって表紙を開く。

何枚かページを進めていくと、現代では失われた古代魔法について主に書かれているのだと分かった。シルフはすぐに興味を失ったが、次の頁で思わず目を止めてしまった。

『上級精霊を体内に収める方法とその解法』

「最高神は……元は精霊、だよな」

胸につけた緑色の魔法石が、青く光った。

本部へ戻る途中だった。今夜は何か様子が変だと気付いてはいたものの、まさか自分が狙われるとは——。

「よくそんな大勢で城に入ってこられたな」

前方を塞ぐ数十人の人々を睨みつけながら、ギュスターは剣の柄に手をかけた。

「……」

まったく、東棟は軍の本部だろうに、なぜこいつらを止められなかったのだ。否、貴族の振りをして城へ入りこみ、衛兵たちをかわしてやって来たのだらう。武器を持っている者もいるが、多くが魔法の使い手だと分かる。もちろん、闇魔法の、である。

敵意を向ける人々にギュスターは意識を集中させる。しばらく睨み合いが続いた後、最初に行動を開始したのはあちら側だった。

ノーアとダリウスの魔法石が同時に青く発光し、二人が顔を見合わせる。

「これは、ギュスターですね」

夕食の後片付けでメイリアスは部屋を出ていた。心配そうな顔になるユーティアを見て、ノーアが指示を出す。

「ダリウスは念のためここにいて下さい。私が行ってきます」

と、すぐさま部屋を飛び出して行く。ユーティアがそちらを見て、困惑するような様子を見せる。

ダリウスはそんな彼女に顔を向けて言った。

「そんなに心配するなって。あいつのことだから、闇魔法に遭遇してもすぐ返り討ちにするだろ」

彼女の気を紛らわせようと軽い口調でそう言ったが、内心ダリウスも胸騒ぎを感じていた。

「とにかく待とう。ユーティア」

俯いたユーティアは、ただ首を縦に振った。

次々に襲いかかってくる敵を剣で薙ぎ払う。魔法はすべて避けていたが、じきに避けられなくなるだろう。

「ラティ・ノート」

「グレイプニル・ノート」

「スヴィティ・ノート」

こちらへ向かってくる紐と岩を、ギュスターは敵を盾にすることで防ぐ。隙を作る間もなく他の敵へ攻撃を返し、振り下ろされた斧をギリギリで避ける。

「グローイ・パース」

相手が闇ならこちらは光、と、ギュスターは手にした剣に光属性を付加する。一時的に強くなったそれで数人を一気に切り捨てたが、その数はまだ多かった。

「ロギ・ノート」

「ラীগ」

飛んできた火の玉をとっさに水でかき消す。基本的な魔法なら使えたが、やはりこの戦闘は不利だ。それでもギユスターは、自尊心を捨てなかった。

「グレイプニル・ノート」

しつこく向かってくる敵を振り払い、まっすぐに伸びてくる黒い鎖を避けようとして――その存在に気が付く。

「！」

背後から投げられた小形のナイフ。避けきれず利き腕を直撃した直後、前方から黒い鎖が身体を拘束してくる。抗うこともできずに床へ伏せたギユスターは、ついに剣を手放してしまった。

「くっ……」

隙だらけになったギユスターに、闇魔法の使い手たちが攻撃を加え始めた。少しでも痛手を抑えようと頭を抱えたが、魔法使いでない自分にこれ以上身を守る術はなかった。

「――ギューフ・ニーズホッグ、ギューフ・フギン！」

徐々に遠ざかりかける意識の中、聞き慣れた声がある。緑色の蛇と大きな鷹が自分の周りから敵を離し、ギユスターは目を開けた。

「大丈夫ですか、ギユスター」

やがて二匹の幻獣は消されたが、一級魔法使いの登場に相手は少々怯んだ様子だった。

「ウル・イス、グローイ」

と、ギユスターの腕からナイフを抜き取って傷口を癒す。ギユスターは苦痛を堪えながら再び立ち上がるが、短時間で大量に受けた痛手のせいで足元がおぼつかない。

勇敢に攻撃を再開し始めた数人をノーアが炎で制し、ギユスターへこの場から遠ざかるよう目で促す。しかしギユスターは聞かなかった。

「まだ、やれます……っ！」

「駄目です、ここは私に任せて下さい」

負けを認めない、負けず嫌いのギュスターだからこそ、今のよう
に強くなれたのだろう。しかし、今回ばかりはそうも行かない。ど
んなに回復魔法を使ったとしても、体力に限界が来ているのは目に
見えていた。

「ベルカナ・カーリ」

ふいに突風が吹きぬけ、敵を翻弄する。足音の響く方を振り返る
と、シルフが遅れてやってきた。

「何ですか、この状態は」

と、合流したシルフが二人へ問うたが、ノアは答えなかった。

「それよりもまず片付けましょう。ギュスターはもう何もしないで
良いですから」

その言葉にギュスターは悔しくなるが、大人しく口を閉ざした。
ますます怯んだ敵にノアとシルフが同時に魔法を唱える。

「ウル・レーヴァ」

「グローイ」

避けようとして慌てふためく人々を強大な光が包んでいく。それ
が鎮まると、まだ数人の使い手が立っていた。

「ベルカナ・ラーグ」

「ノルズリ」

量を増した水の流れが敵を翻弄する。役目を終えた水が消えてい
くと、ようやく騒ぎは収まった。一人で相手するにはきつい人数だ
ったが、一人一人の実力は平均的なものだったらしい。

ギュスターが床に片膝をつく。

「これだけの数を一人で相手にするなんて、無謀です」

と、ノアがまたギュスターに回復魔法を唱えたが、まだ体力を
回復するには至らない。

「……っ、すみません」

シルフは倒れた人々を見まわしながら思考していた。――盾であ
るギュスターが狙われたということは、やはりイズンの言うことは
本当だった。そうすると、ギュスターが一時的でも力をなくした今、

次に来るのは……。

三人の魔法石が黄色く光った。

「これは罠だ！」

シルフが駆け出し、ギュスターが立ち上がる。ノーアは二人を交互に見た後、ギュスターへ言った。

「後から、応援に来て下さい」

そしてシルフの後を追って走って行く。

窓ガラスが割れた。唐突な出来事に驚いた二人は、次に壁が壊される音を聞く。

「闇魔法、まさか……っ」

立ち上がったダリウスがユーティアの前へ立ち、やがて現れた敵に弓矢を向ける。

「まあ、運が良いわね」

それは女性だった。月夜を背景にした妖しく美しい姿、整った顔立ちの鋭い両瞳がそれを普通の人間でないと分からせる。

「な、何だお前！」

ダリウスは自分一人じゃ相手に勝てないことを本能的に察知していた。ユーティアを立ち上がらせ、じりじりと壁際へ距離をとる。

「あたしはヘル、神話で地獄に落とされた乙女と同じ名前よ」

素敵でしょう？ と、ヘルはにっこり微笑んだ。弓を引く手に力を入れたダリウスは、一刻も早く——この状況からすると無理かもしれないと分かっていたが——仲間たちが来てくれるのを願う。

そしてヘルが笑顔を崩し、真面目な顔で言った。

「そんなことよりも、あたしはさっさと用を済ませたいの。ちよつとどいてくれるかしら？ ウル・グレイプニル！」

ダリウスが矢を放つのと同時だった。しかし数秒早くヘルの魔法が勝り、黒い鎖がダリウスを直撃する。

「っ、ダリウスさん！」

ユーティアが悲鳴に似た声を上げると、ダリウスは痛みをこらえ

て再び弓を構えた。

「まだやるつもり？　あなた、なかなか手強そうね」

と、ヘルが笑う。

ふいに部屋の扉が開き、慌てた様子でメイリアスが戻ってくる。すぐにユーティアの方へ目を向けたメイリアスだが、ヘルに睨まれて立ちすくんだ。

「……っ」

ヘルがメイリアスを見て不敵に笑う。

「あら、まだ生きてたの？　裏切り者のくせに——ベルカナ・ラーグ！」

「ウル・ヨルズ！」

ダリウスのとっさに唱えた魔法は冷たい水流に飲み込まれてしまう。悔しくて再び矢を放つダリウスだが、無意味だった。

「あなたに力はないわ、いい加減に認めてそこをどきなさい」

と、ヘルはそれを避けてこちらへ歩み寄ってくる。床に倒れたメイリアスはすっかり意識を失っている。

「オレだって、やる時はやるんだ！」

そう言いながらダリウスは弓矢を構えたが、矢を放つタイミングを完全に見失っていた。

やがてヘルが目の前に立つ。

「その子の命まで奪う気はないわ。あたしはただ最高神を蘇らせただけ。スヴィティ」

ダリウスは一步も動かないで、その攻撃を真正面から受けた。

圧倒するような苦しさが身体全体を包み、バランスを崩して倒れ込んでしまう。身体が鉛のように重くなって動かない。

「嫌、来ないで……！」

ヘルが一步一步とこちらへ近づいてくる。ユーティアは恐怖に震えながら後ずさり、改めて自分の無力さを呪った。

「怖がらなくていいのよ、フリーアの娘。あたしは最高神を呼び出したただけなんだから」

鋭い瞳が笑みに歪む。ユーティアの背が壁に当たり、ヘルがさらに笑顔になる。

「さあ、諦めて大人しくなさい」

ヘルの白い手がその頬へ伸ばされると、ユーティアは腰を抜かして床へ座りこんでしまった。片膝をついたヘルがユーティアの顔を無理矢理上げさせる。

「大丈夫、あなたは死なないわ」

一体どういうことだろうかと思った直後、ヘルはユーティアの唇に唇を重ねた。

ダリウスは、ヘルが何故、やすやすと彼女に近づけたのか考えていた。闇魔法の首領であるなら、自身も闇に染まっているはずだ。それなのに、何故ペンダントに跳ね返されなかった？

「まさか……っ」

ようやく身体を起こしたダリウスは、ヘルの手が証の痣に触れているのを見た。そして唇を離れたヘルが口を開く。

「ガンダールヴ・グローイ、ギューフ・アルファ——」

「ベルカナ・カーリ！」

騒々しく扉が開き、突風がヘルをユーティアから遠ざけた。虚ろな状態のユーティアを守るようにシルフが立ちはだかる。

「もう少しだったのに……ウル・ヨルズ！」

「アウストリ・パース！ 行け、ダリウス！」

ヘルの出現させた砂の固まりはダリウスの構えた弓矢に吸い寄せられ、土属性を付与された矢がヘルに向けて放たれる。

「っ、なるほどね」

それを交わしたヘルは怯む様子もなく、にやりと微笑む。

「ベルカナ・ラーグ、ウル・ラティ！」

「ベルカナ・ロギ」

飛んできた水と石をシルフの炎が燃やす。その隙にダリウスが矢を放つと、ヘルはまたそれを避けながら言った。

「これがあなたたちの本気？ 弱すぎるわね。ウル・ゲルギヤ！」

逃げる隙もなかった。身体が拘束されたように動かなくなり、半透明の鎖によってシルフとダリウスは床へと倒された。

「ベルカナ・グングニル！」

「エイワズ」

不意打ちの魔法すら防御壁に跳ねられ、遅れて来たノーアはヘルを睨んだ。

「ただの魔法使いなんですね」

ヘルがふっと笑う。

「同等か……いや、それ以上」

「さあ、どうかしらね。ベルカナ・スヴィティ」

ノーアはすぐに横へ逃げると、伏せているシルフとダリウスへ駆け寄った。

「ベルカナ・イス」

と、二人を鎖から解放してやり、再びヘルへ向き合う。

「誰が来たって無駄よ、最後の一人が来ない限りね。ウル・ラティ！」

それぞれを狙って飛んでくる黒い影、シルフとノーアは魔法でそれを相殺したが、まだ体力の回復しきっていないダリウスは足を取られてしまった。床に腰を落とした状態から足掻くように弓矢を放ち、二人がそれぞれに魔法を唱える。

「ベルカナ・ミステイル、スズリ」

「ギューフ・フェンリル、ベルカナ・エオー」

火をまとった矢が飛んでいくと、その後を追う風と共に白狼が駆けていく。ヘルは姿勢を低くすると、素早い動きですべての攻撃を回避した。唸る白狼を「ハガル」と、かき消す。——ついに本領発揮、というところらしい。

ヘルと目が合ったシルフは、視線をそらさずに大蛇のような紐を出現させる。

「ベルカナ・グレイプニル」

「アウストリ・パース」

そしてノーマがダリウスへ土の属性付加魔法を唱えると、直後に弓矢がまっすぐヘルへ向かった。

——心が割れそうだった。正確に言うと、身体と心がかけ離れて
いるようだった。

ユーティアは呆然とする視界の中で、三人が一人と戦闘しているのを見ていた。しかしかけ離れてしまった心のせいで、何がどうなっているのかよく分からない。

魔法が飛び交う。部屋が荒れる。矢が壁に刺さる。狼たちが一人を襲う。火が燃える。土が舞う。水が流れる。風が吹く。

誰かの身体に傷がついて、大切な人の声が自分の名前を呼ぶ。

——ユーティア……！

第十三章 精霊王の力

現れるはずのないギュスターの登場に、誰もが驚いていた。剣を構えたギュスターがヘルに向かって一直線に駆けて行く。

「くっ、ギューフ・フギン！」

とっさに召喚したヘルの鷹を切り捨て、なおもギュスターは立ち止まらない。

「ノルズリ・パース」

シルフがその剣に水属性を付与した直後、ギュスターが剣を振り下ろした。間一髪でそれを避けたヘルはそれまでの余裕を失くして魔法を唱える。

「ギューフ・シェイド！！」

一瞬、視界の全てが闇に覆われた。

眩暈のようにだんだんと光を取り戻していく中、闇の上級精霊シェイドがその場に出現する。――初めて見る闇の精霊に、誰もが覚悟を迫られた。禁忌が指定された頃、シェイドの存在もそれと同時に消えたと思われていたのだ。

後退したギュスターに、ヘルが不敵な笑みを向ける。その様子を見たノーアは唇を噛んだ。

「ギューフ・ウンディーンネ！ ギューフ・ノーム！」

シルフとダリウスがはつとした。一度に二体もの上級精霊を呼び出すことは、いくらノーアであっても無謀なことだった。上級精霊は使い手の体力を奪う代わりにその指示を受けるのだ。

そしてシルフがノーアに駆け寄ろうとすると、

「ギューフ・サラマンダー！」

三体目の上級精霊が召喚された。ノーアが顔を歪めてくず折れる。「死ぬつもりですか！？ もうこれ以上、魔法は使わない方がいい！」

シルフの声にノーアは喘ぐように答えた。

「夜のシェイドは、危険です。それでも、足りないくらい……」

と、床に両手を付いて持ち応えようとする。しかし、ノーアは立ち上がれずに意識を放してしまった。

最もその近くにいるギュスターは闇に侵されまいとしていたが、遙かに強大な力を前に身体の震えは止められずにいた。ギュスターを庇うように上級精霊たちが実体を持ったシェイドへ襲いかかる。

しかしシェイドにはどんな攻撃も効かないらしかった。ほとんど無意味と知りながらダリウスは矢を放つも、やはりむなしく跳ね返されて終わる。

ギュスターが距離をとろうと身体を動かすと、シェイドのいびつな右腕が影のようにギュスターへ振りかかった。抵抗する間もなくなぎ倒されるギュスター。

その様子を見てシルフが叫ぶ。

「ダリウスは本体を狙え！　どうかウンディーネ、ギュスターを！」

そしてシルフはギュスターの元へと急ぎ、ウンディーネがギュスターを癒す。すぐに目を覚ました彼を見て、シルフは心を決めた。

「……ギューフ・シルフィード……！」

二級魔法使いのシルフに、上級精霊を呼び出せる可能性はほとんどなかった。それも契約を必要とする精霊となると、それは絶対に叶わないことだ。しかしノーアのしようとしたのは四大精霊を一度に呼び寄せ、シェイドを破るというものの……。

やはり駄目かと思った直後、シルフの身体に衝撃が走った。血液が逆流するような、心臓を潰されるような……大きな力の消費。――これをノーアは三度も体験したのだと考えると、確実に生死に関わると思った。

立ち上がったギュスターが再び剣を構えて闇を睨む。

「グローイ・パース！」

仕上げてシルフが剣へ光を付与し、四体の精霊がギュスターを取り囲む。そしてシェイドへ切りかかろうとすると、爆発するような眩しさが一瞬視界を埋めた。光の剣に集った精霊たちが闇に対抗し、

シェイドの力が徐々に弱まっていく。

一方で、ヘルを追い詰めていたダリウスにシルフは加勢する。

「ベルカナ・グングニル」

ヘルは余裕を持って二人の攻撃を避けていた。

「ギューフ・ニーズホッグ！」

「ハガル——！」

召喚は無意味に終わり、ノーマのいない今、二人だけでは勝てそうになかった。——その刹那、闇が膨れ上がった。

広がる闇に目を奪われる。

闇が大きくなっていく中、ギュースターの顔が苦痛に歪む。

両腕を広げたシェイドは、まるで最高神を狙う悪神のようだった。精霊たちが闇に飲まれまいと手を取り合う。

「やだ、やめて……！」

ユーティアは叫んでいた。かけ離れていた心と体が一致した瞬間、自分の中に眠る最高神アルファズルが遠くから呼びかけてくる。

『彼らを助けたいか、ユーティアよ』

ユーティアは必死に頷く。

「助けてい。わたしにできることがあるのなら、それでみんなを助けられるなら……っ」

闇の力が精霊たちを押しつぶそうとする。いびつな笑みを浮かべたシェイドが、がくりと膝をついたギュースターを見る。それでもギュースターは、剣を手放さなかった。

闇に浸食されていく感覚にシルフは表情をゆがめた。上級精霊を呼び出し、使役したことによるダメージがまだ残っているらしい。一方のダリウスはヘルに矢を向けていたが、立っているのが精一杯で放つことが出来なかった。

『良い返事だ。それでこそ、光の精霊王にふさわしい……！』

どこからか眩しい光が生まれ出ると、あっという間に闇を凌駕し

てしまった。その光がギュスターの剣に力を宿し、精霊たちも再び立ち上がる。

シェイドの動きが鈍っていた。ギュスターは導かれるように、強く剣を握り直す。

「――これで終わりだ!」

眩いほどの美しい輝きと共に、ギュスターは剣を振り上げ、その大きな身体を切り裂いた。

呻き声をあげたシェイドは足掻きながら、だんだんと色を失くしていく……。

闇が急激に衰えていくのに気を取られていたヘルは、次の瞬間、矢が脚に直撃した痛みで我に返った。

「っ、ウル・イス! ギューフ・リント――」

慌てて口を開いたヘルだが、首にナイフを突きつけられて押し黙る。シルフはヘルを睨んで問うた。

「もう終わりだ。今ここで殺されるのと、一生檻の中にいるの、どっちがいい」

跡形もなく消え去ったシェイド、こちらに向けられている弓矢。

「……どうぞ、殺しなさい」

ダリウスが弓を引き絞った。精霊たちはその場に倒れたギュスターを見守るように、徐々に姿を消していく。

ふいにシルフはナイフを引いた。その直後、ヘルの横を弓矢が掠めて行く。

「!??」

シルフが静かに背を向けると、ダリウスはへにやりと笑った。

「紳士に美人は殺せねーよ」

部屋の外から騒がしい音が聞こえた。顔を覗かせた衛兵たちは、そこに広がる惨状に声を失う。

シルフは到着が遅すぎた彼らへ言った。

「あいつを地下に連れて行け。それと、医者を頼む」

＊ ＊ ＊

夏の空気が廊下に充満していた。

「やっぱり、あいつは強いな」

四月に入ってすでに一週間が過ぎていた。シルフの呟きにダリウスが顔を上げる。

「何言ってるんだよ、お前だって強いじゃん」

「お前には分からなかったかも知れないが、あいつは精霊に愛されてる。俺が上級精霊を使役できたのも、たぶんあいつのおかげだ」

そう言ってシルフは手にした書類に目を落とした。

あれからメイリアスは翌日から仕事へ復帰し、魔力を使い果たしたノーアもわずか一週間の療養で以前の体調を取り戻した。

「考えてみれば納得出来るだろう。闇の濃くなる夜に、闇の上級精霊とあんな間近で戦ったんだ。普通の人間ならとっくに死んでる」

「闇に触れたも同然、か」

あの場にいた人間でまだ目覚めていないのはギュスターだけだった。息はあるが、意識が戻っていないのだ。

「それに加えて、その前に大勢を相手に戦っていたんだ。その時点で意識を失っていてもおかしくないのに、よく来たよな」

「……そうだな。でもさ、最高神が精霊だったのは盲点だったよな」と、ダリウスが言って、シルフは言葉を返す。

「正しくは精霊の頂点に立つ者だ。それを俺たち人間が神として崇めていたおかげで、精霊という認識はすっかり薄れていた。まあ、儀式を中断できたのが救いだな」

「確か、口付けの後に精霊の宿っている証に手を触れて詠唱、だろ。やる側としては面倒な儀式だよなあ」

「詠唱の言葉は、その属性によって違ってくるしな」

シルフがそう付け足すと、ふいにダリウスがこちらを見た。

「すごいやシルフ……、ユーティアのことだけど、お前さ」

横目にそちらを見てシルフはさらりと言う。

「ああ、好きだった。いや、今も好きだな」

「え、やっぱりか……でも、何で立ち直ったわけ？」

その問いにシルフは特に何か思うわけでもなく、答えた。

「諦めるしか無いからさ。何しろ、あいつは盾だ。彼女を守れるのはあいつしかいない」

「何だよ、それ」

「上級精霊は契約がないと扱えないだろ？ それと同じで、契約を結んだ者が互いを助け合うように、最高神にも盾となる存在が必要だったんだ」

すると、ダリウスは首を傾げた。

「でも、ギュスターは精霊じゃないぞ」

「しかしユーティアは宿り主だ。どちらかに力があるなら、契約が成立したっておかしくはない」

「……じゃあ、あいつらはその契約を？」

「したんだろうな。きっと、他の精霊たちに愛されるのもそういうことだろう」

魔力を封じられたヘルは、平凡な一人の女性だった。

「本名はヘレンディーゼ・スリュムヘイム、出身はグラスヘル、年齢は二十五歳。これで間違いありませんね？」

ヘルはただ頷き、ノーアがさっそく質問を始める。

「何が目的だったんですか？」

檻の中の彼女は素直に答えてくれた。

「最高神を蘇らせて、時を止めたかったの。……時代は変わってしまっから」

「難しい望みですね。最高神にはそれが出来ると思ったんですか？」

「もちろん、だってこの世界を作った人よ。時代の変わらない世界だって、創造できるはずでしょう」

懇願するような瞳でそう言った彼女に、ノーアは冷たい言葉を浴

びせる。

「最高神がこの世界を作ったのなら、時代が変わるようにしたのも最高神です。自分の作り出したものをたった一人のために作り替えるほど、最高神は優しくないでしょう」

「……」

ヘルは俯いた。冷たい地下牢で、今まで自分のやってきたことをすべて否定されたようで悲しかった。

「ですが、あなたにも事情があったのでしょうか。それまで否定する気はないですよ」

と、ノーアは言った。

顔を上げたヘルの視界に優しい微笑みが映る。

ヘルの取り調べが続く中、奥の檻でイズンがまたシルフを呼び出した。

「もう彼女は諦めたみたいだね。何があったんだい、ミスター・オード」

「あいつには勝てないとはっきり分かった、それだけだ」

そう返せばイズンが不思議そうな顔をして、にやりと微笑む。

「そう、それだよ。昔、あんたはいつだってその顔をした。最初から何もかもを諦めているくせに、子どもみたいな好奇心を隠してる、その顔だよ」

「？」

「そりゃ、自分じゃ分からないさ。だけどね、あたしはいつだってあんたを見てたんだよ」

「どういうことだ？」

するとイズンが今まで見せたことのない穏やかな表情を浮かべて言う。

「あんたとなら、結婚してやってもいいってこと」

とっさに頭が働かなくなり、その意味を理解するのに時間がかかった。呆然としていたシルフがだんだんと微妙な顔へ変わる。

「えっと……その、何だ。からかうのはよせ」

照れたように視線をそらす彼を見て、イズンが年頃の女性のようにふふっと笑う。

「その気になったら、あんたのコネと財産で、あたしをここから出してくれたっていいんだよ。それくらい、簡単に出来るだろ？」

「っ、出来るわけないだろう。出来たとしても、そんなことはしない。……もう戻ってもいいか？」

すっかり機嫌を損ねたシルフにイズンは言った。

「まだ駄目よ、最後にいいことを教えてあげる」

「何だ、早く言え」

シルフは顔をそらしたままぶっきらぼうに言う。イズンは彼に背を向けると、ぽつぽつと語り始めた。

「あたしらはね、それぞれにこの世界を恨んでたんだよ。ハティは生まれつきあの白髪だし、ヘル様は大事な人を亡くしてる。あたしだってこんな能力、なければ良いって昔から思ってた」

シルフは彼女を見下ろした。口ではそう言っているけど、彼女が――彼女たちが闇に手を染めた事実が変わらない。

「町へ出れば、いろんな人の心が読めて気持ち悪くなる。誰と居ても、その本心にはあたしに対する思いやりのかけらもない。そんな時にね、ヘル様はあたしを救ってくれたんだよ。あの人の気持ちはいつも正直だった。自分の目指していることに少しも疑心を持っていなかった。だから付いて行こうと思えたの。だけど、間違ってた」

「話はそれだけか？」

イズンはシルフを見上げた。

「……本当はあたし、ヘル様じゃなくてあんたに救い出してもらいたかったんだよ。優しいあんたなら……って、ずっと思ってた」

生きているのか死んでいるのか、その境界に立たされた彼の手は冷たかった。

「……ギュースター」

呼びかけたって反応がないのは分かっていた。視界が涙でぼやけ

そうになり、慌てて指で拭う。

「ユーティア、そろそろ部屋に戻りましょう」

メイリアスがそう言って肩に手を触れる。

椅子から腰を上げて、眠ったままの彼へ背を向ける。メイリアスの哀れむような視線がユーティアは怖かった。彼はもう目を覚まさないんじゃないか……そう考えたくなくて、両目をぎゅっと瞑る。

「大丈夫よ、ユーティア」

と、メイリアスはその手を取った。

扉の前まで歩いてゆくと、メイリアスが扉を開けてくれた。ユーティアはふと後ろを振り返って彼を見つめる。

メイリアスがそんな彼女を促そうとして口を開くと、ユーティアが突然ベッドへと駆けて行った。

「どうしたの、ユーティア」

と、かけた言葉は彼女の耳には届かなかった。

「ギユスター、気づいたのね！ ギユスター！」

慌ててそちらへ向かうと、先ほどまで閉じられたままだった目がうつろに開いていた。――まさか、と、疑う前に奇跡が起こったことを知る。

「ギユスター、わたしが分かる？ ねえ、ギユスター」

ユーティアは何度も彼の名前を呼びながら、冷えた手を両手で握った。

「……ユーティア」

と、小さな声が彼の口から漏れ、ユーティアがさらに顔を明るくする。

「良かった、本当に良かった。わたしね、ずっとあなたを待っていたのよ。あなたの意識が戻るのを、ずっと」

ギユスターが理解できないという顔をした。自分の置かれている状況をまだ把握していないのだろう。

「ありがとう、ユーティア」

それでも彼は、そう言って微笑んだ。

「メイリアス、みんなを呼んできて」

と、ユーティアが振り向く。メイリアスはすぐに頷き、部屋を飛び出して行った。

エピローグ

「もう四月も半分終わったな」

「ええ、せっかくの長期休暇も台無しね」

清々しく輝く太陽の下を、ダリウスとメイリアスはのんびり歩いていた。

「結局休み無しだったもんな。そろそろ休みたいぜ、マジ」

と、ダリウスが空に向かって伸びをする。

「あたしだって休みたいわ」

そう言いながらメイリアスは、城内を行き来する侍女たちへ目をやった。隣を歩く彼女を見ながら、ダリウスはふと尋ねる。

「……事件が終わりかけた今だから聞くけど、お前はさ」

「何？」

「あいつらとは、どこまで関わってたんだよ？」

帽子の下に覗く赤髪が、陽光を受けてきらきらしていた。少し俯いたメイリアスが糸を紡ぐように声を出す。

「最初にあたしに声をかけてきたのがヘル。それ以降は、ずっとハティが連絡役だったわ。彼らの求める情報は全て話してた。あたしは飽くまでも、ただの情報屋だったの」

その様子は反省しているように見えた。

「やっぱり、理由は金か？」

「……ええ」

ダリウスは溜め息をついた。今更ながらに悔しくなって足で土を蹴ると、大地の匂いが一瞬鼻を突いた。

「もっと早く言えば良かったな」

呟きに返事はない。ダリウスは立ち止まり、空を見上げた。

「……メイリアス、今夜オレの家に来ないか？」

少し先で止まったメイリアスがこちらを振り返る。

「両親に紹介したい」

ダリウスが視線を下へずらし、彼女をまっすぐに見つめる。

「遅くなっても構わないからさ……行こう？」

彼らしくない優しい問いかけだった。いつもはへらへらしている顔が、大人びた笑みを浮かべている。

メイリアスの胸がどくと高鳴った。

「でも、深夜になっちゃうわ」

と、メイリアスが遠慮がちに答えると、ダリウスは一步踏み出した。

「少しでも早く、オレはお前と結婚したいんだ。じゃないとまた、金に釣られてどこか行っちゃうだろ」

真面目な口調だった。距離が縮まったせいで、彼が一段と大人びて見える。

「……、でも」

と、なかなか踏み切れないメイリアスにダリウスが痺れを切らした。

「本当ならすぐにでも拘束してやりたい、もうお前に裏切られたくないんだ」

力強い腕がメイリアスを抱き寄せる。

軍服の向こうから伝わる鼓動の音に、メイリアスは唇を噛んだ。

——信じてくれる人がいる、今でも信じ続けてくれる人が……。

「……あたしだって、もう嫌よ」

メイリアスがそう返すと、ダリウスは「うん」と、頷いた。

それから互いの顔を見つめ合って、ダリウスが緊張した様子で言う。

「……キスしても、いいか？」

その問いにメイリアスはムカツとした。まったく、女心というものを分かっている。

「馬鹿！ だからあんたは魔法使いになれないのよっ」

と、彼へ背を向けて歩き出す。

何故怒られたのか分からないダリウスは、慌ててメイリアスの後

を追った。

「それは今関係ないだろう？ 意味分かんねえよ、おい、メイリアス！」

「お疲れ様だね、ノーア」

明るく陽光の差す私室で、克蘭ベリーは心配そうに微笑んだ。ノーアは笑い返さずに溜め息をつく。

「ええ、本当に疲れました」

そして部屋の隅に置かれたベッドへ腰を下ろす。克蘭ベリーもその隣へ腰掛け、問う。

「大丈夫？」

ノーアは首を横に振った。

「大丈夫じゃないでしょうね。正直言って、とても眠たいです」

いつもの彼らしくなかった。ましてや、弱音とも取れる言葉を口にするなんて珍しい。

克蘭ベリーはますます心配になったが、どう言葉をかけたらいいか分からなかった。

「少しの間、眠らせてもらっても良いですか」

と、ノーアは無造作に身体をベッドへ横たえ、眼鏡を外す。

彼の言動に付いていけない克蘭ベリーは困惑しつつも頷いた。

「え、うん。でも、お仕事は？」

「こここのところ休み無しだったので、今日の午後だけ休みなんです」
「午後、だけ？」

「ええ、午後だけです。まだやるべき仕事はたくさんありますが、たまにはサボるのも悪くありません」

普段は真面目なノーアがそう言ってあくびをし、克蘭ベリーは笑みを浮かべた。

授業時間外に彼がこの部屋を訪れることは多々あったが、今日は仕事からの逃避が目的らしい。

「誰も探しには来ない？」

「そうですね、来るかもしれませんが。でもあなたが一緒に眠っていれば、きっと誰も起こそうとはしませんよ」

ノアはそう言うとかランベリーの腕を引いて、優しくその身体を引き倒した。

「ノアが甘えるなんて、本当に珍しいね。何か他にもあったんじゃないの？」

「いえ、ただ疲れただけですよ」

二人して寝そべりながら、束の間笑い合う。室内の空気は見惚れるぐらいに和らいでいた。

「それにしても、勢力の首領が女性だったとは驚きでした」

「その人、ノアと同じ一級魔法使いだったんでしょ？」

「ええ、実力は私と同じか、それ以上……消えたはずのシェイドを呼び出して、使役するくらいですからね」

「すごいね、その人。そんなに強いのに悪いことしちゃうなんて、もったいないよ」

と、寝返りを打って克蘭ベリーは天井を見上げた。

「私もそう思います。彼女自身は闇に染まっていなかったから、いつだって引き返そうと思えば出来たはずです」

「引き返す……かあ。その人、本当は迷ってたんじゃないの？ 光に生きるか、闇に生きるか」

ノアは妙に大人びた横顔を見つめる。

「決断できなかったから、どちらでもなかった……と？」

「うん、ぼくはそんな気がする。じゃなかったら、すぐ闇に染まってるよ」

ノアはいつもと変わらない克蘭ベリーを見つめると、その華奢な身体を抱き寄せた。

「確かにそうかもしれませんが。あなたって人は、本当に賢いですね」

「の、ノア？」

ぎゅっと抱きしめられて、克蘭ベリーの頬が紅潮する。互いに伝う温もりは、揺らめく炎のように暖かった。

「……好きですよ、クランベリー」

「ようやく終わったみたいね」

「いや、まだ全て片付いたわけじゃない」

魔法石を取り替えたばかりの車椅子で、ミシュガーナは庭を散歩していた。

「ユーティアの安全がちゃんと保障されるには、まだまだ時間がかかるだろう。現在捕らえられている闇魔法の奴らの処分も、まだ決まっていないしな」

と、その隣を歩いていたシルフが返した。

「それでも、もう忙しくはならないんでしょう？ 良かったじゃない、シルフィネス」

ミシュガーナがそう言うと、シルフは呆れたように鼻で笑った。

「そうだな。もうお前の予言を聞くこともなくなるだろう」

「それは私にとってもありがたいわね。もうお城に行くのは嫌だったの」

と、少し生意気に返せば、シルフが呆れた顔をする。

「今更だが、本当にお前って可愛くないよな」

ミシュガーナは笑って彼を見上げた。

「そうかしら？ シルフィネスだって優しくないわ」

「……あのなあ」

いつの間にか長くなっていた日が二人を見下ろす。

「そういうことじゃないだろ。お前はまだ子どもなんだから、もっと子どもらしくしろよ」

「良いじゃない、別に」

ミシュガーナが速度を上げて、シルフは追うこともせずその後ろ姿を眺める。庭の木々を風が通り抜け、彼女の髪を揺らした。

そしてシルフが溜め息をつく、車椅子が唐突に方向転換してこちらを向いた。

「でも私は、そんなあなたも好きよ！」

思わず足を止めたシルフに、ミシュガーナが無邪気に微笑む。足を過ぎたそよ風に、車椅子がまた前方を走りだす。

「……おい、ミシュガーナ！」

我に返ったシルフはすぐにその後を追って走り始めた。

彼女が大人びた表情を見せる一方、自分に対しては生意気で可愛くない子どもになるのも、シルフは全て知っているつもりだったが、予言者である彼女には加えてどこか、人より成長の遅れた部分があるらしい。

「何、シルフィネス」

「あんまりはしゃぐと疲れるぞ。それにもうじき夕方だ、そろそろ戻ろう」

「……そうね。でもまだ帰りたくないわ」

「は？ 何でだよ」

「私のこと、可愛いって言ってくれたら、帰っても良いわよ」

シルフは車椅子を捕まえて、無理矢理方向を転換させた。しかしミシュガーナはこちらを見上げて待っている。

呆れて溜め息をついた後、シルフは言った。

「お前は可愛いよ、憎たらしいくらいにな」

「はい、ギュスター」

と、ユーティアは、病室で静養を続けているギュスターへ数冊の本を手渡した。

「シルフさんが、お前はもっと魔法について知るべきだって」

「は？ どういうことだ」

ギュスターはあからさまに嫌悪の表情を浮かべた。ベッド脇の椅子に腰を下ろしたユーティアは言う。

「わたしにもよく分からないの。でもシルフさんが言うには、契約を交わしたなら最後まできっちり責任取れって」

「……意味が分からないな」

「それとノーアさんも、契約は一度したら二度と取り消せない、永

久的な物だって言ってたわ」

彼らの言葉を理解出来なかったギユスターは、渡された数冊の内、一番上にあった本を手にとった。

「まあ、どうせやることもないんだから良いんじゃない？」

そう言ってユーティアは椅子を立ち、棚の上の花瓶に手を伸ばす。

「お水、入れ替えてくるわね」

ぱたぱたと部屋を出て行く音がし、ギユスターはぱらぱらと頁をめくる。難しそうな文章の羅列にすぐ飽きてしまったが、ふと本の最後に手紙が挟まれていたのに気づいた。

『どうやらお前は最高神と契約を交わしているらしい。死なずに済んだのもそれが理由だろう。契約の儀式については百十二頁参照。』シルフからの物であるとすぐ分かったが、ギユスターは首を傾げた。契約なんて全く身に覚えがない。

ギユスターは詳しいことを知ろうと、そこに書かれていた頁を開いて見た。

「植物って素敵よね、目で見てすぐにその体調が分かるんだもの」と、戻ってきたユーティアは花瓶を元の位置に戻す。

それから椅子に腰を下ろしたユーティアに、ギユスターは本を閉じて尋ねる。

「なあ、俺……ユーティアの血を舐めたことって、あったっけ？」

ユーティアは怪しむ様子もなく答えた。

「そういえば、そんなこともあったわね。確かあれば、わたしが十二歳の時だったかしら」

ギユスターの顔が心無し青ざめる。

「小さい子たちに果物をむいてあげようと思って、ナイフで指を少し切っちゃったのよね。そしたらギユスターが、恥ずかしげもなく……」

言いかけてユーティアが目をそらした。

「あ、あの時、わたし、すごく恥ずかしかったんだからね！ みんながいる前で、本当に自然に、ゆ、指、舐められて……！」

そして互いに気まずい沈黙が訪れる。……まさか幼い頃の些細な出来事が、こんな結果に繋がるとは思ってもみなかった。

「そ、そうだったな。ごめん、ユーティア」

「別に、今はもう、良いけど……」

と、ユーティアは言うが、その顔は俯いたままだった。

ギユスターは誤魔化すようにに再び本を開く。

ユーティアは気を紛らすように窓際へ向かった。まだ太陽は傾き始めたばかりだった。

「でもギユスター、何でいきなりそんなことを？」

と、ユーティアは彼を振り返る。

「ん、ああ……なんとなくだ。気にするな」

シルフの言いたいことがよく分かった。——契約は二度と取り消せない、取り消してはならない。

「そう言われると、気になっちゃうわ」

彼女と彼女の中に宿る最高神を守るのは、自分だけだということ。
「お前は知らなくていい。どっちにしろ、この事実は変わらないんだから」

「何それ、どういうこと？」

不満そうに首を傾げる彼女に、彼はふっと微笑んだ。

「俺たちは二度と離れられない、ってことさ」

プロローグ

「結婚式!？」

思わず声を上げたメイリアスに、ダリウスは慌てた。

「大きい声出すなよ!　っつか、当たり前だろ?　それくらいやらないきゃ……お、親とかも心配するだろうし」

「で、でも……その気持ちは嬉しいけど、あたし、まだメイド続けるつもりよ?」

と、呆れたように言うメイリアス。

「……何でだよ」

と、ダリウスは少し口を尖らせた。

「オレのところに来れば、仕事なんてしなくていいだろ」

「じゃあ、ユーティアはどうするのよ?　新しい子に代わっちゃったら、あの子が困惑するし、また何かあった時に巻き込む人が増えるだけよ?」

メイリアスの言うことは最もだった。

今のまま、これまでどおりにしていた方が何かと都合が良い。

「で、でも……それじゃあ、お前はいつ嫁に来てくれんだよっ」

「……とりあえず、あの子が平和を取り戻してからね」

そう言ってメイリアスは彼の頬へキスをした。

「そういうことだから、すぐには結婚できないわ」

「っ……」

悔しそうに口を閉じるダリウスだが、その表情は嬉しそうだった。

第一章 家庭事情

愛するギュスター様へ

もう夏も残り一月になりましたね。お仕事の方はどうですか？

ダリウスさんはほぼ毎日メイリアスに会いに来ていますが、もう忙しくはないのでしょうか？

わたしはあれから魔法と精霊について学んできましたが、やっぱり精霊との契約は出来そうにありません。シルフさんいわく、わたしのような特別な人間には特別な契約しか出来ないのだそうです。遙か昔、古代の宿り主の人もそうだったみたいで、それらしき記述のされた資料を見せてもらいました。やっぱりわたしは、他の人とは違うんですね。今では当然のことだと分かるし、実感も出来るけれど、わたしは早くアルグレーン村へ戻って両親や友だちに会いたいです。

たまにはギュスターも、帰りたいと思いますよね？ イザヴェル城のユーティアより

* * *

本のページをめくるシルフィネスを眺めていた。

ふいに視線に気づいたのか、彼が顔を上げてこちらを見る。

「どうかしましたか？」

「ああ、いえ……」

ノーアははっとして言いよどむ。言うべきことはあったが、賢い彼に通じるかどうか怪しかった。

しかし彼が首を傾げる様子を見て、ノーアはそれまで考えていたことを口に出すことにした。

「シルフは、一級魔法使いになるつもりはないのですか？」

「……ええ、今のところは」

と、少々不思議に思いながらも返答するシルフィネス。

ノーアは落胆するような口調で言った。

「そうですか。……私は、あなたにはその力があるように思えてならないのですが」

するとシルフィネスは目を丸くした。

予想外の言葉に驚き、とっさに本をぱたんと閉じてしまう。

「ですが……まだ、俺には上級精霊を呼び出すことなど――」

「あの時は出来たでしょう？」

と、闇魔法の勢力の首領ヘル（本名…ヘレンディーゼ・）と戦ったときのことを思い出させる。

シルフィネスは悩んだが、言った。

「……それは、ギュスターがいたからであって、俺の実力とは関係ありません」

予想通りの返答にノーアは息をついた。

「それなら、すべて話しましょう」

と、席を立つ。

窓の外に広がる演習場をちらりと見てから、ノーアはシルフィネスのそばへ立った。

「あの時、何故私が最後に風の精霊シルフィードを残したのか……それは、あなたに賭けたからなんですよ」

「俺に？」

「以前から気になっていたんです。シルフィネスにはそれだけの力があるはずなのに、何故自分の得意とする上級精霊とすら契約していないのか……拒否されたのかもしれないと考えたこともありましたが、実際にそれは可能でした」

シルフィネスはじつと口を閉じ、困惑していた。

「つまり、問題はあなた自身にあったというわけです」

「ですが、俺は今のままで良いと思っています。この肩書きだって、研究を進めるために手に入れたものですから」

と、はっきり告げるシルフィネス。

「それに、あの時の痛みを、俺は二度と味わいたくありません」
思い出したように苦い顔をし、ノーアへ視線をやる。

するとノーアは、あからさまに溜め息をついた。

「分かっていますね、あなたは」

「え？」

「精霊というのは、私たち個人の味方をしてくれますが、それだけではないんですよ。契約をする根本的な理由は、彼ら精霊が少しでも長く生きるためなんです」

狭い室内の宙に視線をやって、ノーアは呪文を唱えた。

「ギューフ・サラマンダー」

ふわりとその場に現われる炎の精霊。身に纏った炎が室内の温度を上げ、なめらかな肢体で羽もないのに宙を舞う。

「この痛みは、そもそも彼らのために必要なものなんです。そうですよね？」

サラマンダーはこくりと頷いた。

「精霊の世界はシビアなんです。今は争いもなく平和ですが、そのせいで精霊たちの寿命は縮む一方だそうです」

「寿命が縮む？ それじゃあ、魔法使いが精霊たちと交わす契約と
いうのは……」

「その血を飲むことにより、力を共有するための道筋を生み出し、そこから私たちの力を吸い取って生命力へ変換しているのです。だから私は、あらゆる精霊たちと契約を交わしました」

サラマンダーはノーアの肩へ降り立つと、懐くように身体をすり寄せた。

「このことは、本当に力ある者にしか教えられないことだそうです
が、あなたは特別です」

と、ノーアが笑う。

「……そうだったんですか。じゃあ、精霊が契約者を選ぶというのも、それが理由なんです」

「ええ、そうです。精霊からすれば、自分の人生を任せるわけでは

から慎重になるのも当然でしょう」

シルフィネスはノーアに懐くサラマンダーを見つめた。上級精霊を間近に見るのは初めてではなかったが、こんなにゆっくり眺めたことは一度もない。

「俺たちには、何か悪影響はないんですか？」

「ありませんよ、もちろん。ただ取り消すことが出来ないだけで、私たちの寿命が縮むということも一切ありません」

「そうですか……それなら、少し考えてみます」

そう言ってシルフィネスはノーアと目を合わせた。その言葉に嘘はなかった。

「おいしいねー、ユーティア」

「はい、すごくおいしいです」

晴天の下、中庭に設置されたテーブルを囲んで、ユーティアはプリンセス・克蘭ベリーとお茶をしていた。

「こっちはね、今流行のお菓子なんだってー」

「流行ですか？ 気になります」

と、ユーティアは王女の指さしたクリーム菓子を一つ手に取り、口へ運んだ。

「どう？ おいしい？」

「はい……甘くて、とろけちゃいそうですっ」

と、ユーティアは目をキラキラさせた。

克蘭ベリーはにっこり笑って、自分も同じものを手に取る。

少女たちがのんびりとお茶を楽しんでいる間、ギュースターは周辺を警戒していた。闇魔法の件はだいたいぶ落ち着いてきているが、まだ安全だとは言い切れない。

「本当だー、これもおいしい！」

と、明るい表情を浮かべる克蘭ベリー。その姿は相変わらず少年にしか見えなかったが、見慣れた今では特に何とも思わなくなっていた。

夏の日差しが眩しいが、吹いてくるそよ風は心地良い。こんな風に贅沢に時間を過ごすことなど、以前では考えられなかったユーティアだが、今ではすっかり慣れた様子だ。

お茶が進んだところで、ふいに克蘭ベリーが言いだした。

「そういえばねー、政治家のアデュートールって人知ってる？」

「政治家さん、ですか？ すみません。わたし、難しいことはあまり……」

と、臆するユーティアに克蘭ベリーは言った。

「そうだよねー。知らなくて当然だと思うけど、ノーアのお兄さんだよ」

「え、ノーアさんにお兄さんが？」

と、今度は目をまん丸にするユーティア。

克蘭ベリーはおかしそうに笑うと、ふとギユスターの方を見た。

「この話、ギユスターも聞いたってね」

はっとして視線を向けるギユスター。それを確認してから、金髪の少女は話を始めた。

「本名はアルバライト・オーフェ・エルフィリード・アデュートール。最年少で大臣に任命された実力派なんだけど、教会のことでちよっと問題が起きてるみたいなんだ」

「教会、というと？」

「アルファズルを信仰するカトリックと、ローズルを信仰するプロテスタント。その内の、プロテスタントの肩を持つのが彼なんだよ。どうしてそうなったかは分からないけど、今まで力のなかったプロテスタントが彼を通して権力を持つようになるんじゃないかって、みんなが心配してるの」

その幼い顔からは想像も出来ない類の話だった。王女である彼女が政治を知っていてもおかしくはないが、見た目の割りに大人びた印象を与える。

「しかもプロテスタントって言ったら、悪神ローズルを現実世界に呼び出そうとして何度も問題起こしてるでしょ？ だからね、ユー

ティアが狙われてもおかしくないと思うんだ」

と、王女はユーティアを心配そうに見つめた。

息をついたギュスターが彼女たちへ一歩近づき、口を開く。

「そういえば、プロテストアントは禁忌にも深く関わっていると聞きました。その線で一度、調べてみる価値はありそうです」

今も牢獄に繋がれている翼を持つ者もまた、プロテストアントと何らかの関わりがあったかもしれない。そう思っただけの発言だった。

ユーティアは押し黙ると、重く息をついた。

「わたし、まだしばらくはここで世話になるのね……」

彼女が故郷へ帰る日は遠い。

克蘭ベリーはそんな彼女にどんな言葉をかけるか迷い、そして口にした。

「大丈夫だよ、ユーティア。十年くらい経てば帰れるよ」

直後、ギュスターが耐え切れず溜め息をついてしまったのだが、王女は首を傾げるだけだった。

「ねえ、メイリアス」

その夜、ユーティアは親友へ尋ねた。

「ノアさんのお兄さんのことって、知ってる？」

寝巻きへ着替え終えたユーティアは、ベッドの方へ向かっていった。就寝する直前のことだった。

メイリアスは彼女の脱いだ服を片付けながら答える。

「知ってるわよ、少しなら」

「どんな人なの？ 顔はやっぱりノアさんに似てたりする？」

と、ユーティアは振り返った。

ベッドの端にそっと腰掛け、返答を待つ。

「そうね……似てはいないけど、紳士的な人だと聞いわ。ただ、その一方で悪い噂も立ってるし、ちょっと近寄りがたい雰囲気があるわね」

メイリアスはかごをその場に置くと、ユーティアの方へ向かった。

そつと隣へ腰を下ろして口を開く。

「政治家としての指導力はあると思うけど、あの人……子ども時代は大変だったみたい」

と、メイリアスがやや声を潜めた。

「大変って、たとえば？」

「考えてごらんないよ、弟があれよ？」

と、メイリアス。

ユーティアははっとすると、小さめの声で聞き返した。

「もしかして、ノーアさんと仲悪いの？」

「悪いどころじゃないわ。天才の弟に話題も名声も取られて、すぐくみじめだったらしいの。今でこそ政治家として手腕を発揮してるけど、少し前までは影が薄かったのよ」

「そう……」

ユーティアは俯いた。ノーアの家庭事情を知ってしまい、何だか嫌な感じがしていた。もしかすると、知らない方が良かったかも分からない。

「……まあ、詳しいことは本人に聞いたら？ 教えてくれるか分からないけどね」

と、察したメイリアスが立ち上がる。

ユーティアは力なく笑いかけるだけで、何も言い返せなかった。

* * *

「禁忌について話せて？ 馬鹿じゃないのか、お前」

ハティは鼻で笑った。

「だいたい、いつまで閉じ込めている気だ？ さっさと解放するか死刑にしろ。このままでいるのはごめんだ」

と、ギュスターを睨む。しかし相手は動じなかった。

「そうだな、これまでも有益な情報は何一つ話さなかったしな。だが、禁忌の法を手に入れるには誰かと関わる必要があるはずだ。名

前までは聞かないから、どこで手に入れたのか言え」

「……言ってもいいが、お前には言いたくない」

「何故だ？」

「馬鹿そうだから」

ハティは真面目な顔をしていた。どうやら、からかっているのではなく、純粹に相手がギュスターでは不満だということらしい。

「……分かった、他の奴に――」

「アデューツールを出せ」

ギュスターは彼を睨んだ。じっと睨み返してくるハティは、両翼を火あぶりにされただけでは懲りないようだ。

「……分かった」

すぐに檻へ背を向け、ギュスターは歩き出す。

「で、お前はサボりに来たのか」

シルフィネスにそう言われて、ギュスターはむっとした。

「そうじゃない、ノーアに言われて来たんだ」

ユーティアの部屋で彼女と読書談義をしていたシルフィネスが腰を上げた。

「何を言われたんだ？」

「……シルフにこれを、と」

と、ギュスターが手にした本をシルフィネスへ手渡す。

「これは……相手がノーアでなければ怒ってるぞ」

と、シルフィネスは苦い顔をした。それは上級精霊についての教本だった。すでに魔法使いであるシルフィネスからしたら、わざわざ読むほどのものではない。

ギュスターも薄々そのことには気づいていたのか、微妙な顔をした。

「文句なら彼に言ってくれ。俺はただ頼まれただけだ」

「そうか……まあ、いいだろう」

と、息をつくシルフィネス。ノーアの意図することが透けて見え

るだけに、受け取らないわけにかなかった。

彼はよほど自分に期待してくれているらしい。確かに考えると
言ったが、こんなことをされるとプレッシャーだ。

それまで彼らの様子を見ていたユーティアは、何を思ったのか二人の方へやってきた。

「どうしたんですか、シルフさん」

「あ、いや……」

と、言葉を濁すシルフィネスだが、その手にある本を見たユーティアははっとひらめいた。

両目をキラキラと輝かせ、シルフを見上げて問うユーティア。

「上級精霊ってことは、一級試験、受けるんですか？」

「……ノーアに言われているだけで、俺にはそんなつもりはない。悪いな」

あつさり否定し、元いた席へ戻るシルフィネス。冷めた態度だが、ノーアの前では絶対に言えないことだった。

そんな彼に不満を覚えるユーティアだが、彼に言葉をかける代わりにギュスターへ問いかけた。

「でも、あのノーアさんに言われるってことは……」

と、恋人に視線をやる。

「そうだな、実力を認められたんだろう」

「……もったいない」

心なし気落ちした様子の婚約者に、ギュスターは口元を緩めてみせた。

「気にするな。どうせノーアも思ったほど期待してないさ」

と、優しく彼女の肩を叩いて励ます。

プロテスタントの教会は国内に数箇所あるだけで、世界的に見ても影響力の少ない宗派だった。歴史は古く、最高神アルファズルより先に人々から信仰されていたともされており、問題のある宗教ではあるが容易に手を出すことの出来ない組織だ。

「悪神とされているローズルも、ただ最高神と敵対してるっただけですしねえ」

「だからこそ、プロテスタントは悪ではないんです」

さらさらと報告書を書くノーアを見て、ダリウスは言った。

「犯罪すれすれのことはしてきたのに？」

「仮に指導者が大罪を犯しても、無関係の信者たちまで罰することは出来ませんから」

「なるほど」

結局、歴史ある宗教を真っ向から否定したり、排除したりといったことは出来ないらしい。

ダリウスは机に頬杖をつくと、溜め息をついた。

「危険因子を全部排除できればいいーんだけどなあ……」

ノーアは顔を上げなかった。

ハティから聞き出せたのは、彼がとある礼拝堂でプロテスタントの集会に参加したことだった。そこで彼は禁忌の法を見つけたのだと言う。それが真実なら、プロテスタントが闇魔法に関わっていた可能性も十分に考えられた。

「これから向かっていく方向が定まっただけ、いいと思いますよ。特にダリウスは、ここのところ退屈していたでしょう？」

と、筆を置いたノーアがダリウスを見た。そしてからかうように笑みを浮かべる。

「さっそく明日からは、メイリアスではなくプロテスタントを追いかけるようにしてくださいね」

「っ……わ、分かってますよ」

と、ダリウスは気まずそうに視線をそらした。

第二章 王女の頼みごと

朝食を終えて間もない頃、部屋に來客があつた。

「ミシュガーナ！」

久しぶりに会う友人にユーティアはぱつと顔を明るくする。
車椅子を操りながら、ミシュガーナはにこつと笑みを返した。

「お久しぶりね、ユーティア」

「うん、久しぶり！ 体調はどう？」

「平気よ。でも、今日はみんなに話があるの」

と、ミシュガーナはユーティアのそばに控えていたメイリアスへ
目を向ける。

「あとの二人、連れてきてもらえるかしら？」

「はい、かしこまりました」

メイリアスは返事を返すと、すぐに部屋を出て行った。

いつものようにミシュガーナの世話役となっているシルフィネス
が椅子をどかし、そこへ彼女を着かせる。

「また、何か悪いことでも？」

と、ダリウスがシルフィネスへ問うと、彼は首を振った。

「さあな」

本当は、予言者であるミス・オードがいい知らせを持ってこない
ことくらい、とうに分かつていた。特に關係者を集める時はそうだ。
ミシュガーナの隣へ座ったユーティアを見て、ダリウスも椅子を
引いた。その隣にシルフィネスも腰を下ろす。

やがてノーアとギユスターが揃うと、黒髪の少女が神妙な面持ち
で口を開いた。

「まず始めに注意しておきますが、以前のように一刻を争うことは
ありません。ですが、くれぐれも気は抜かないで下さい」

四人はそれぞれに真剣な眼差しを彼女へ向ける。

ユーティアもまた、ミシュガーナの言葉に耳を澄ました。

「人と人との……いえ、精霊と精霊との戦いが始まりますわ。おそらく、季節が春へ変わった頃に」

何を意味するのか思考しようとして、ノーアはやめた。問わなければならぬ現実はずぐそこにあったが、彼女の言葉を肯定することになると思ったのだ。それはノーアにとって、あまり好ましいことではなかった。

「それは、プロテストタントのことを意味しているのですか？」

と、特に考えもせず、ギユスターが質問を投げかけてしまう。

ミシュガーナが頷く前にシルフィネスが補足した。

「俺たちの追っているプロテストタントに禁忌が隠されているということか？ それとも、精霊の世界を巻き込む何かが……？」

「……おそらく、そうでしょうね。ですが、詳しいことは分かりません」

と、ミシュガーナがノーアを見つめる。その視線に特別神衛部隊の隊長は返した。

「ありがとうございます、ミス・オード。どうやら私たちのしていることは、無駄にならずに済みそうです」

いつものように無駄な感情を表に出さず、その場をやり過ぐす。胸騒ぎがしていても、今の段階でそれを言ってしまったら仕事に支障が出るはずだ。……いつかは対峙するその時まで、ノーアは胸に秘めていようと決めた。

「そもそも、精霊って何なんですか？」

ミシュガーナを送りに行った三人の背中を見送り、ユーティアは尋ねた。

「わたしたちとは違う世界に生きていると言いますが、それってどういうことなのでしょう？」

「うーん、オレもそんなに詳しくないからなあ……」

と、ダリウスは唸り声を上げ、ユーティアの胸元に見える魔法石のペンダントを見つめる。

精霊について知らされていることは少ない。特に魔法使いでない者からしたら、その存在が理解できなくてもおかしくはなかった。

「とりあえず、オレたちの生きている世界の、ちょっと上の方にあるのが精霊の住む霊界だって言うな。そこにはオレたちと同じようにそれぞれの国があって、暮らしがあるらしい」

「精霊にも知能があるんですね」

「うん、そう。でも、精霊は人間と契約する。それで何が変わるのかオレは知らないけど、そうすることで精霊の方にも何かしらのメリットがあるんだろうな……じゃなかったら、わざわざこっちの世界になんか来ないだろ？」

ユーティアはこくりと頷いた。

「あとは……うん、話せるのここまでだな。ぶっちゃけ、ノーアに聞くのが早いと思うよ。オレなんて精霊に契約を拒否されたしな」と、ダリウスは自虐的に笑った。

「そうなんですか？」

「四級から三級になるには、下級精霊との契約が必須になってくるんだよ。で、契約しようとしたら力がないから駄目だって言われたんだ」

「……精霊って、実はわたしたち人間よりも高等な生物なのでしょうか」

ふと思いついたことを口にしたユーティアに、ダリウスははっと表情を変える。

「うわ、マジかよ。だったら拒否されて当然だな……あの時はオレ、精霊を下僕みたいにしてたし」

半分冗談で言った彼を見て、ユーティアはくすつと笑った。意外と事実に近いのだろうか、それなら今の時代に人々の言う精霊がどういった意味を持つのか、分かる気がしたからだ。

「そうですね。やっぱり、ノーアさんに聞いてみます」

夕食の後で、ユーティアはふと溜め息をついた。

「でも、やっぱりそうなっちゃうのね……」

後片付けをしているメイリアスを横目に見ながら、ダリウスが尋ねてくる。

「何か問題でもあるのか？」

ユーティアは彼の顔を見つめて問いかけた。

「ダリウスさんは、ノーアさんのお兄さんのこと、知ってますよね？」

「ノーアのお兄さん？ ……ああ、アルバライトだっけか。そういや、プリンセスから注意しとけて言われたなあ」

と、のんきに言うダリウス。ようやく話がつながったのか、ダリウスはユーティアのそばに立った。

「ユーティアは納得しないかもしれないけど……政治家のアデュートールは、ろくでもない人間だぜ？」

「え、そうなんですか？」

「オレの聞いた話によると、弟に嫉妬しまくって家では暴れまわってたとか。他にも良くない噂ばかりで、それが嫌なのかノーアは家に帰らなくなりましたっていうオチまであってさ」

懂れていただけあって、ダリウスは当時のことに詳しかった。

しかしユーティアが次に尋ねたのは、ダリウスにとって予想外のことだった。

「え、ノーアさん、家に帰ってないんですか？」

はっとするダリウス。自分が口を滑らせたことに気づいて冷や汗する。

「あー、そのお……あいつ、ただでさえ忙しいだろ？ だから家に帰ってないだけで帰りたくないとか、そういうことじゃないと思うんだけど——」

「やっぱり帰ってないんですね。それなら、メイリアスの言うとおりに兄弟仲だって良いはずがない……」

と、再び溜め息をつくユーティア。

ダリウスは外の様子に耳を澄ましてから、落ち着いた声で話を始

めた。

「よし、本当のこと話そう。ノーアとアルバライトの仲は確かに良くない。ノーアの弟であるオークライト・ティースも軍属してるけど、それはアルバライトからしたら敵対行為になる。だから家族関係に緊張が走ってるのは今も同じだと思うよ」

「……」

「しかもアルバライトはプロテスタントと協力関係にあるから、ユートピアを守る立場にあるノーアとは完全に敵同士だ。ただ……アルバライトは抜け目ない人だから、オレたちのことも知られてる気がしてならないんだよな」

と、ダリウスは息をついた。

「オレの家は何も後ろめたいことがないから大丈夫だけど、悪事に手を染めた貴族に声をかけては取り込んでるって噂まであるし……あいつ、地道に権力を得るため暗躍してるみたいなんだ。さすがにプロテスタントの件は目立ってたけどな」

「あ……そうなんですか。でも、何のために？」

すると、ダリウスがにやりと悪い顔をした。

「ノーアを負かせるためだよ」

その晩、青い廊下を一人で歩いていた。窓の外は暗闇に包まれ、見下ろすと街灯がぼつぼつ見える。

——静かな夜だった。

慣れた部屋の前まで来ると、室内から声が聞こえた。はっとして伸ばしかけた手を引くと、扉が開いた。

「あ、ノーア！」

短い金髪を揺らしながら、少女がぱっとこちらを見上げる。

「僕、ちょうど会いに行こうと思ってたの」

「そうでしたか」

ノーアはにこっと微笑みを返し、克蘭ベリーに手を引かれるまま室内へ入った。

数人のメイドが二人を見ている。王女が家庭教師を鼻屑にしていることは目に明らかだったが、夜間に彼が来ることは初めてだった。「もう下がっていいよ」

と、克蘭ベリーが指示すると、すぐにメイドたちは部屋を後にした。

ふかふかのソファへ腰を下ろした克蘭ベリーが問う。

「それで、今日はどうしたの？ 何か悩んでるみたいだよ？」

不安そうに曇るあどけない顔。

ノーアは彼女の隣へ座ると、他の人には決して見せない姿を晒す。「少し、昔のことを思い出してしまつて……もう、忘れたはずなんですけどね」

自嘲するかのように口の端を吊り上げる。

「ノーア……」

「しかも、今の状況を考えて……何が起こるか、想像も出来ない。いえ、想像したくないんです」

克蘭ベリーは彼の肩にそっと手を伸ばした。優しく抱きしめるように腕を回す。

「早ければ近い内に……遅くても数年の間に、彼は行動を起こすでしょう。目的は分かりきっていますが、そのためにあなたや他の人を巻き込みたくはありません」

「うん……」

大人しく両目を伏せる克蘭ベリー。彼の心に余裕がなくなっていることを知って、何も言えなかった。

「しかし、背後に組織がいるとなると避けられそうにはない。私は……いったい、どうしたら良いのでしょうか？」

賢くて聡明な彼だが、元は他の人々と変わりない。完璧に見える一級魔法使いでも——天才でも——、悩み苦しむ場合がある。

何回か瞬きをしてから、克蘭ベリーはノーアを見上げた。視線に気づいた彼がはっとする。

「そばにいて。僕のそばに、ずっといて」

ノーアは彼女を見て、言葉をなくした。

「それだけでいいから、ノーアは余計なことを考えないで。僕が、いつだって受け止めるから」

「……その言葉を聞くのは、これで二度目ですね」

と、張り詰めていた表情を緩ませるノーア。

「本当に、あなたには何度感謝してもしきれません……」

ぎゅっと優しく抱きしめて、ノーアは少女の耳元へ囁いた。

「ありがとうございます」

「……うん」

克蘭ベリーの想いは、いつだってまっすぐにノーアの心へ響く。しかし、それだけでは越えられない壁もあった。

「でもね、ノーア」

「何ですか？」

「僕の……僕の方から、離れちゃうかもしれない」

「……ええ」

お互いに分かっていることを口にするのは辛かった。

「僕は、ずっとノーアのそばにいたい」

「……はい」

だからこそ、大人であるノーアには出来ることが限られていた。うすうす気づいている克蘭ベリーもまた、大人になっていく道から踏み外せないでいる。生まれを呪うつもりはなかったが、環境を呪わずにはいられないのが本音だった。

＊ ＊ ＊

翌日、ユーティアは唐突に散歩へ誘われていた。

「僕ね……お見合い、させられるんだって」

日陰のベンチに腰掛けた王女の告白に、ユーティアは目を丸くした。

「お見合い、ですか？」

「うん。隣の国の王子様なんだけど、貿易で発展してきてて、この国の将来的にも必要なことなんだって」

ユーティアの護衛をしていたノーアが視線をそらす。それは昨夜、彼女が話そうとして話せなかったことだった。

「僕がその人と結婚したら、僕はその人と一緒にこの国を治めていく……だけど、お母様は心配してるんだ」

「どうして、ですか？」

「……王子様はプロテストタント派なんだ。つまり、この国もまたそうになっていく可能性があるってこと」

ノーアは口を閉じていた。克蘭ベリーの言わんとしていることは理解できたが、軍属の一級魔法使いが口出しすることではない。

「お父様はこの国を発展させるために乗り気にいるけど、僕はやっぱり……」

と、克蘭ベリーは彼を見た。

その様子に気づいたユーティアは、少し迷ってから言う。

「どうにかして、失敗させられないでしょうか？」

「ユーティア……！」

と、目を輝かせる克蘭ベリーに、ユーティアは微笑んだ。

「自分が嫌なことは、するべきじゃないと思いますから」

しかし克蘭ベリーはすぐに元の表情に戻り、俯いた。

「でも、ただ失敗させただけじゃどうしようもないよ……僕、ただでさえこんな格好してるから」

と、両足をぶらぶらさせる。その見た目だけで相手に嫌われることは想定済みらしい。

「そうですね……」

髪は短いし、おてんばでわがまま。淑女には程遠く、それでいて妙に大人びた考えを持つ王女様。多くの人は見た目だけで、彼女を変な人だと決め付けて遠ざけるだろう。そこで彼女自身が拒否の意思を見せれば、それで見合いは失敗になる。しかし、それは表面上の失敗に過ぎない。

「決定的な、根本的なところからどうにかしなくっちゃ」

と、克蘭ベリーは溜め息をつく。

ユーティアも口を閉じて思考したが、良案は浮かばなかった。その代わりに浮かぶのは、一つの疑問だ。

「あの……プリンセス、ちょっと聞いてもいいですか？」

「うん、いいよ」

「プリンセスは、その……」

と、口ごもって少女の耳へ口を寄せた。

「やっぱりノーアさんのこと、好きなんですか？」

克蘭ベリーは目を丸くしたが、すぐににっこり微笑んだ。

「うん！」

無邪気な笑みに見えたが、その瞳の奥には確固とした意志がある。彼女の想いが、自分のギュスターに対するそれと同じであることに気づき、ユーティアは頷いた。

「それなら、本当によく考えなきやいけませんね」

ノーアは少女たちの様子を怪しんだが、わざわざ追求しようとは思わなかった。いずれそうなることは分かっていたからだ。そうだった時に、自分がどうすべきであるかということも。

克蘭ベリーはじっと口を閉ざしているノーアをちらりと見てから、ユーティアへ言った。

「じゃあユーティア、ひとつ頼んでもいい？」

「はい、何ですか？」

首を傾げる少女に、王女はひそひそと声を潜めて頼みごとを告げた。

* * *

「……それは、問題だな」

と、ギュスターが苦い顔をする。昨日、プリンセス・克蘭ベリーから頼まれたことを実現できるかどうか相談したところだった。

「ユーティアが付き添いで行くことは可能かもしれないが、あとは本人に直接聞くしかないだろう」

「そう。やっぱり難しいかしら……」

溜め息をつきながら、ユーティアは淹れたての紅茶へ手を伸ばした。

「……いや、ちょっと待て。その見合いの日っていつなんだ？」

「昨日は八日後って言ってたから、あと七日後ね」

と、一口飲み込んで、ほっと息をつくユーティア。

ギュースターはその日が何を意味しているのかひらめいて、彼女へ言った。

「それって完全に仕組んでるじゃないか」

「え、偶然じゃないの？」

「偶然だとしても出来すぎてる。というか、あの王女……っ」

と、ギュースターは言葉を飲み込んだ。言いたいことはあるが、立場上、口には出来なかった。

「いい意味でこの国の将来が不安だな」

そう言って溜め息をつく。

ユーティアは彼の意図が分からなかったため、話を戻した。

「とりあえず、シルフさんと呼んで話してみるしかないわね。駄目なら仕方ないし」

本部へ資料を取りに来たダリウスは、久しぶりに見る顔を見つけ、声をかけた。

「よう、ティース」

軍人にしては細く頼りない体格の青年が振り返る。

「あつ、ダリウス……どうしてこんなところに？」

「それはこっちの台詞だ。今日は野外訓練じゃなかったか？」

と、ダリウスはティースの前まで来て尋ね返す。通常の部隊員たちには特別神衛部隊のことは知らされていないため、いつでも話を合わせられるようスケジュールはすべて頭に入れてあった。

栗色の頭をした彼は苦笑いを浮かべ、同期生へ言った。

「この辺りに兄さんが隊長を務める本部があるって言うから、みんながいない間に探そうと思って」

昔から彼は嘘をつけない性格だ。

ダリウスはどう返そうか迷ったが、一般兵である彼に本当のことは言えなかった。

「訓練サボって兄貴探しかよ、いい加減諦めろって」

「そう言われても、僕くらいしか兄さんには会えないんだからしょうがないでしょ？ 両親もずっと心配してるし……兄さん、手紙の一つもよこさないから」

ティースはアデュートール家の唯一の良心だった。彼の存在が家を存続させているといっても過言ではなく、家を出てしまった次男と唯一つながっている彼が頼みの綱だ。

「そういえば、ダリウスは何でここに？ 確か、新しいところに配属されたって聞いたけど」

「え、ああ……オレね、今はお偉いさんの世話係やってるんだ」

「秘書ってこと？」

「うーん、むしろ奴隷？」

ティースが、あははっと笑い声を上げ、ダリウスも笑って誤魔化した。

「今も資料取って来いって言われてさ、そのお使いの最中なんだよ」

「そうだったんだ。じゃあ、僕はもう戻るね」

「おう、またな」

と、ダリウスは歩き出した彼を見送った。

「なるほど、それは面白そうだな」

シルフィネスの返答にユーティアが顔を明るくさせる。

「協力してもらえますか？」

「ああ、もちろんだ。その日はちょうど定期メンテナンスの予定だし、王女のためだしな」

と、軽く言うシルフィネスにギユスターは複雑な気持ちになった。確かに王女の頼みだし、無碍にすることも出来ないだろう。しかし、だからといって深く考えずに返事をするというのも、どうなのだろうか。

「ただし、その場合はユーティアの扱いが微妙になってくるぞ。プリンセスの友人だけでは、見合いの席にいさせてもらえないだろう」同時にはっとするユーティアとギユスター。二人ともそこまで考えていなかった。

「じゃあ、どうしたらいいんですか？」

「大丈夫だ、同席せずとも作戦は成功させられる」

そう言ってシルフィネスはどこか得意げな顔をした。

「会場は湖畔の別荘だろう？ あそこには広いバルコニーがあったはずだ。そして見合いは通常、中庭で行われる」

「それで？」

「つまり、その時間にお互いの顔が見える位置にさえいれば良いということだ。あとはこっちで何とかする」

頼もしい発言を受け、ユーティアは興奮気味に聞き返した。

「じゃあ、シルフさんたちに任せてしまってもいいんですか？」

「ああ、任せてくれ」

今にも彼へ抱きついてしまいそうなユーティアだが、ギユスターが見ているため我慢した。その代わりに、伝えられる精一杯の言葉を口にした。

「ありがとうございます、シルフさん！」

第三章 よりよい未来

親愛なる弟、オークライト・ティースへ

お久しぶりです。人づてにあなたが私を心配していると聞きました。あなたが初めて軍へ入ったあの日のように、また私を呼び戻そうとしているのでしたらお断りさせていただきます。

あの頃はまだ幼かったあなたを、今さら責めるつもりはありません。アルバライトに対しても同じです。私は今の生活に十分満足しているのです。何度も言っていますが、アデュートール家とはもう関わりたくありません。

これ以上、終わったことを蒸し返すのはやめて下さい。私にとっては思い出したくもないことです。そしてあなたにとっても、アルバライトにとっても同じはずです。

今はそれぞれの人生を歩みましょう。少なくとも私は、そう思っ
て今を生きています。 サジェスライト・ノーアより

* * *

「ダリウス、これをオークライトに届けてくれませんか？」

と、深夜の本部でノーアはダリウスに一通の封筒を手渡した。

「え、オレがですか？」

「あなたにしか頼めないんです」

いつもと違って繊細な表情を見せた彼を見て、ダリウスはしぶしぶそれを受け取った。

「明日になってもいいですか？」

「ええ、かまいません」

そしてノーアは机の上を軽く片付けると席を立った。

「それでは、よろしく頼みましたよ。おやすみなさい」

「……はい」

身一つで廊下へ出て行くノア。今夜も彼は、仮眠室の一角で夜を過ごすのだろう。

憧れていた彼の現実^に溜め息をつきながらも、その彼に大役を任されたことが皮肉にも嬉しくて、ダリウスは封筒を軍服のポケットへ大切にしまった。

＊ ＊ ＊

「王女のためと言われても、ユーティアの頼みじゃなかったら絶対に断ったわ」

目的地に着くなり、ミシュガーナはそう言った。車椅子に取り付けられた魔法石に手を触れて、車輪を動かし始める。

シルフィネスはその横へ並んで彼女の黒い頭を見下ろした。

「そんなこと言うなよ。今のうちに恩を売っておけば、将来安泰だぞ」

「何言ってるの、私はこの能力^{ちから}を売り物にするつもりはないのよ？ただシルフィネスやユーティアのためだから、予言を伝えてあげただけだわ」

相変わらず生意気な少女だ。

シルフィネスは呆れながらもくすりと笑った。

「で、改良の結果はどうだ？」

「まあまあ、ね。魔法石の扱い方には慣れてきたし、乗り心地も良くなってるわ」

「だろうな。今日は外出するっていうから、車輪もいつもと違う丈夫なやつにしておいたんだ」

するとミシュガーナがちらりとシルフィネスを見上げた。

「どうりで重たいと思った」

「気づいてたのか？」

「気づかないわけがないでしょう。車椅子は私の下半身よ」

なるほど、と頷くシルフィネス。実際に使っている者にしか分か

らない感覚があるからこそ、研究もやりがいがあるというものだ。
話に聞いていた場所を目指し、二人は湖畔の様子を楽しみながら
進んでいった。

バルコニーですがすがしい空気を胸いっぱい吸い込んで、ユー
ティアは振り返った。

「すごく良いところですね、ノーマさん」

彼女の笑顔は無邪気そのものだったが、まさか避暑をさせるため
だけにプリンセスが同行を求めたとは思えない。ノーマはにこっと
笑みを返したが、心の中では怪しんでいた。

「湖へ来たのは初めてですが、すごく気に入りました」

「そうですか」

バルコニーの下では見合いの席が準備されているところだった。
地面にさされたパラソルが陰を作っていて、ここからではあまり顔
が見えなさそうだ。

それならそれでいいのだが、ノーマは心配だった。克蘭ベリー
が何か企んでいることは分かっているが、詳しくは知らないのだ。
ユーティアに協力を求めているため、彼女が何かするような気はし
ているが……その彼女は二階のバルコニーにいる。それなら彼女を
通じて誰かに協力を求めたのだろうか？

別荘のメイドが紅茶とお菓子を持ってきて、こちらでもお茶の用
意が始められた。

ユーティアは白い椅子へそっと腰をおろすと、紅茶がグラスへ注
がれるのを待つ。

「そういえば、ノーマさん」

ふと思いついたように彼女が護衛へ目をやった。

「以前もお聞きしましたけど、プリンセスのことはどう思ってるん
ですか？」

ノーマは一步前へ出た。爽やかなそよ風が彼の銀髪をなびかせる。
「もちろん、好きですよ」

「それは、どういう意味で？」

首を傾げてノーアを見つめるユーティア。

紅茶を注ぎ終えたメイドが彼女へ頭を下げ、静かに屋内へと去っていく。

答えたところで何が変わるだろうかと考えたところで、再び彼女が口を開いた。

「わたしには、とても大切にしているように見えます。それは、その……教師と教え子ではなく、恋愛の対象として」

見抜かれていた。

ノーアは溜め息をつき、笑うのをやめた。眼前に広がる美しい景色へ目をやり、今頃はドレスを着させられているであろう人进行を思い浮かべる。

「その通りです。……私は、あの方を心から慕っています」

最初はただの子どもとしか思わなかった。気に入られていることを億劫に思う時さえあった。けれども時間を重ねるうちに、王女が自分を心から想ってくれていることに気がついた。そして過去をすべて受け止め、愛してくれた。

「それじゃあ、どうして止めないんですか？」

「……止めないのではなく、止められないんです。あの方はこの国の王女であり、いずれは国の代表となる方……。軍人である私と釣り合わないのは当然ですし、両陛下からも認められることはないでしょう」

味方のいないノーアを救ってくれたのは紛れもなく彼女だ。しかしそれは、許されない恋だった――。

ユーティアはグラスに口をつけ、爽やかな甘みで束の間気分を変えた。飲み込んでしまってから、再び問う。

「だけど、自分の気持ちをそうして偽り続けるのって辛くないですか？」

ことん、とグラスを机へ戻す。

ノーアは息を吐きながら両目を閉じた。

「あの方のためです……」
そう言って感情を自制する彼の横顔は、強い日差しの中で儚げに映った。

ふと階下から人の声がして、ユーティアは立ち上がるとそちらを見下ろした。

びしっとスーツを着込んだ青年が何人もの付き人を従えて歩いている。やがて青年が席へつくと、後からドレスを着た愛らしい少女が日傘を差しながら現れる。

プリンセスを見た王子が何を思ったのかは分からなかったが、プリンセスの方は緊張しているようだった。

仲介人や両者の親まで揃ったところで、青年がはきはきと言う。

「初めまして、プリンセス・克蘭ベリー。お会いできて光栄です」
「は、初めまして……」

声は聞こえたが、予想通りパラソルに隠れてしまって、克蘭ベリーの顔は見えなかった。

ユーティアは席へ戻ると、神妙な顔をしているノアへ言った。

「ノアさんもお茶、飲みませんか？ そんな顔をされたら、わたしがどうしたらいいか分からなくなっちゃいます」

はっとして笑みを浮かべるノアだが、すぐにその必要がないことに気づいてやめた。

「申し訳ありません……」

「謝らないでください。ほら、アイスティーで気分を変えましょう」と、ユーティアは空のグラスにそれを注いで向かいの席へ置いた。しぶしぶそこへ腰を下ろし、ノアはグラスを手取る。

「ありがとうございます、いただきます」

遠くからその様子を見たミシュガーナは、ぽつりと呟いた。

「あら、一波乱ありそう」

シルフィネスは彼女の表情をうかがって溜め息をつく。

「本当のことか。それなら、なおさら早く済ませよう」
そう言って、シルフは車椅子を押し始めた。

「あなたは魔法に興味がおありだとか？」

「う、うん……あ、はい、そうですっ」

いつもの喋り方ではないけないと散々母親に注意されていたことを思い出し、克蘭ベリーは背筋を正した。

「でしたら、将来は魔法使いになれるのですか？」

「え、いえ……ぼ——わ、私は、どちらかというと、魔力の有効な利用法を研究したいと思ってます」

「有効な利用法？ 面白いことをおっしゃるんですね、すでに魔力は十分便利だと思うのですが」

相手の上から物を言う態度が無性に気に入らなかった。それでも理解して欲しいと思ってしまいう克蘭ベリー。

「そうじゃないんです。魔力はすべての人が持っているけれど、使える魔法には個人差があるでしょ？ その差をなくして、すべての人が平等になれる利用法を、僕は見つけたいんだ」

王子は眉をしかめた。

「ふむ、あなたのような方は初めてだ。ぜひ、もっとお話を聞かせてもらいたいですね」

どうやら王子は克蘭ベリーに良くも悪くも興味を持った様子だった。

「つ……で、ですが——」

「いつもお世話になっております、プリンセス・克蘭ベリー」

突然耳に入ってきた声に、克蘭ベリーはぱっとそちらを振り返った。

「シルフ！ ど、どうしてこんなところに？」

と、台詞を発する克蘭ベリーにシルフィネスはにこりと笑う。

「ごきげんよう。あちらの草原で車椅子の稼動試験をしていたんです」

その言葉を証明するように彼は車椅子を押していた。そこに座っている少女は、ただこちらを見つめている。

「プリンセスがこちらへお越しになれていると風の噂に聞きまして、参った次第です」

「そ、そうなんだ……」

と、見合い相手へ視線を戻すと、克蘭ベリーは少々早口に言った。

「あ、あの、こちらは私の親しくさせていただいている、二級魔法使いのシルフィネス・ヴァリ・オードさんと、その従妹のミシュガーナ・サーガ・オードさんです」

「ミシュガーナ・サーガ・オード？ ああ、もしかして予言者の方ですか！？」

と、王子はがたと席を立ち、二人の方へ歩み寄った。

「これは失礼しました。まさかこのようなところで予言者様に会えるなんて、とんでもない光栄です」

と、シルフを無視してミシュガーナの前に跪く。彼女の噂は国内に留まらず、世界各地へ広がっていた。

予言者は無表情を繕ったまま、手の甲に口付ける彼を見て言った。

「こちらこそお目にかかれて光栄です、プリンス・リディオース」

「なんと、僕のことをご存知なのですか？」

「ええ、見れば分かりますわ」

王子の心はミシュガーナに釘付けになった。しかし、たとえ予言者であろうとも「見ただけで名前が分かるようなこと」がありうるわけはなく、魔法について知識のある者なら簡単に見抜ける嘘だった。

そして王子はある名案を思いつく。

「よろしければ、僕たちの今後を予言してくださいませんか？」

と、克蘭ベリーへ振り返り、同意を求めた。

「私たちの、ですか？ え、えっと、よろしければっ」

と、慌てて頷く克蘭ベリー。

ミシュガーナはそんな彼女をちらっと見やっってから、再び王子を見つめた。

「……なるほど、残念ですがいい結果はお伝えできませんわ」

そう言っつてわざとらしく視線をそらす。

「何故ですか？ そんなにも悪いことが――」

「プリンス、今のままだとあなたの国は行き詰ってしまうでしょう。政治か経済かは分かりませんが、その内に重大な問題が起きて市民の怒りを買うことになります。そんなところへ、プリンス・クランベリーを連れて行くおつもりですか？」

「……そ、そういうことでしたか」

深刻に捉えた王子が考え込む様子を見せた。

するとクランベリーが席を立ち、ミシュガーナの元へ向かってきた。慣れないドレスで慎重に歩きながら、すぐ目の前まで来る。

「でしたら、私はどうすれば幸せになれるのですか？」

金髪の少女の背後で、ユーティアがこちらを見下ろしていた。

ミシュガーナはそっとクランベリーの小さな手を取り、まん丸の蒼い瞳をじっと見つめた。

「プリンスの幸せ、という点では……あちらの殿方と婚姻を結ぶべきでしょう」

そして見上げた視線の先には、メガネをかけた長身の青年が立っていた。

「は？」

ミシュガーナの登場により薄々気づいていたノアだったが、いざ視線を向けられて戸惑った。

「すみません、これは一体どういうおつもりですか？ 彼女はあんな予言など――」

「ミス・オード、僕たちは不似合いだとおっしゃるおつもりですか！？」

下から王子の喚き声が聞こえ、ノアは口を閉じた。

ユーティアはただ口元を緩ませて成り行きを見守っている。

「いいえ、私はただプリンセスの幸せを予言しただけです。決して、あなたではプリンスを幸せに出来ないと言っているわけではありません」

「それなら、何故あんなことを言ったのです？　これでは、せつかくの見合いが台無しだ！」

と、耐えかねて声を荒げるプリンス。

シルフィネスはミシュガーナが楽しんでいることに気づいていたが、あえて口出しはしなかった。二級魔法使いへの挨拶を忘れるような男だ、魔法使いとしての誇りをあまり持たないシルフィネスですら癪に障っていた。

「ご機嫌を損ねてしまったようなら謝りますわ、プリンス。ですが予言というのは、よりよい未来を築くためにあるものなのです」

「何がよりよい未来だ！　プリンセス、悪いが僕はもう失礼するっ」
王子がそう言って付き人たちに視線を送った。本気でお帰りになられるようだ。

ユーティアはそれを見て、ノーアへ言った。

「行きましょう、ノーアさん」

と、彼の手を引いて階下へ向かう。

少し離れた席で事を眺めていた后が言った。

「お久しぶりですわ、ミス・オード。以前よりお美しくなられましたわね」

「お褒めいただき光栄です、陛下。先ほどは失礼をいたしました」

と、ミシュガーナは頭を下げた。

席に着いた克蘭ベリーは母親の言葉に耳を傾けながら、落ち込んだ振りをしてお茶を飲む。

「いいえ、そんなことはありません。私も、今回の縁談があった時から心配だったのです。宗教の違いはもちろんですが、それ以外の政策に関しても納得がいかず、このような結果になってむしろ安心

しておりますの」

と、後は気まずそうな顔をしている夫に視線をやった。

「それに、あのような殿方に克蘭ベリーを任せなくて良かったですわ」

庭へ出てきたノアとユーティアは、静かにこちらへ向かってきた。その姿を認めて、後はにこりと微笑む。

「ミス・オードの予言通りにいたしましたよう」

「……で、でもっ」

と、克蘭ベリーが席を立て母の前まで来た。

「僕はこの国の王女で、あの人は魔法の教師せんせいだよ？ 本当によいの？」

すると国王がわざとらしく咳払いをし、一同の視線を集めた。

「その……この件については、よく話し合おうじゃないか。この国を彼に任せられるかどうかについても、時間をかけて見極めていかなければ」

すると后がくすつと笑い声を漏らした。

「陛下、本当はあなたもこの子には幸せになって欲しいのでしょう？ そんなまどろっこしいことは言わず、認めてあげましょうよ」

「……だが、しかし相手は――」

と、唸る国王だが、少なくとも反対するつもりはなさそうだった。その様子を察して后は娘へ手を伸ばす。

「いいのよ、克蘭ベリー。あなたの幸せが私たちにとっても幸せになるのだから」

第四章 新たな盾

后には見透かされていたようだ。

「面白かったわね、あの王子の顔。シルフィネスも見たでしょう？」
と、ミシュガーナは彼を見上げた。

「そんなことは言ってやるな、相手に知られたらどうなるか分かったものじゃない」

冷静な口調でそう返しながら、シルフィネスは彼女の乗っている車椅子をユーティアの座っているソファ近くに停めた。

それから自分もソファに腰を下ろし、そわそわしているユーティアへ言う。

「さっきはああだったが、国王陛下はノーアには一目置いているから大丈夫だ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。しかも彼は一級魔法使いだからな、いくら国王でも無下にはしないだろう」

その言葉を聞いてユーティアはいくらか落ち着きを取り戻し、ミシュガーナへ顔を向けた。

「それにしてもすごかったわ、ミシュガーナの演技！」

紅茶へ手を伸ばしていたミシュガーナはそちらに視線をやると、満足げな顔をした。

「そうでしょう？ 私も自分で意外なくらい、完璧な演技だったと思ってるわ」

「うん、完璧だったわ。プリンセスに頼まれた時はどうなるかと思ってたけど、成功して良かった」

にこにこ無邪気に笑うユーティアをそれとなく見つめながら、シルフィネスはメイドの用意してくれた紅茶を一口飲んだ。爽やかな酸味の後に広がる甘さ、そして何も残らない後味。――この場に従妹がいなければ、完璧なシチュエーションなのに。

未だに彼女を思っている自分の女々しさに自己嫌悪して、シルフ・イネスはまた紅茶を口へ運んだ。

「良いのですか、あんなこととしてしまって」

と、ノーアは珍しく困った笑顔を浮かべていた。

見合いから解放された克蘭ベリーはいつもの調子を取り戻して、大好きな彼へ微笑みかける。

「うん、良いの」

夏の日差しが差す室内で、外見とは裏腹に大人びた思考を持つ少女はソファへ腰掛けた。頭につけた華やかな髪飾りを手で外し、何も言わずに佇んでいる彼へ言った。

「だって、あれくらいいしなはずと一緒にはいられないでしょう？」

ノーアははっとしたが、顔には出さなかった。彼女の想いは、自分が想像していたよりも確かで根深いものだったらしい。

「僕ね、ノーアとじゃないと結婚したくないんだ」

克蘭ベリーは髪飾りをしばらく見つめてから、そっと脇へ置いた。日差しを反射してきらりと光るそれに両目を細める彼女。

別室で后は国王と休んでいた。別れ際に国王が小さく囁いたのを、ノーアはきちんと聞き取っていた。

『魔法使いと王の仕事はまったくの別物だぞ』

その口調は責めるのではなく、ただ忠告をただけだった。一級魔法使いになってから国王と直接顔を合わせることも増えたが、それだけノーアは彼に評価されていたのだらうと、今では実感できる。一つ息をついて、ノーアは踏み出した。こつ、こつ……足音を響かせながら愛しい人の前へ来て、立ち止まる。

おもむろにその場にひざまずいたノーアは、克蘭ベリーの左手を取った。そっと甲に口付けてから、まだ幼い彼女の顔を見つめる。「プリンセス・克蘭ベリー、あなたが望んだことを後悔せずに済むよう、私があなたを守りましょう」

「……ノーア」

丸い目がやんわりと細められ、いつもの明るく優しい微笑みを作り出す。

「違うよ、僕もノーアを守るから」

にっこりしたまま、そう告げるクランベリー。

ノーアも彼女へ微笑みを返し、少し腰を浮かせた。彼女の脇に手を置き、もう片方の手を華奢な頬へ添えると、驚く彼女の唇へキスをする。――これまでずっと我慢してきた、最大の愛情表現だった。

＊ ＊ ＊

「ねえ、アルバライト。もうこれ以上やっても、意味なんか無いんじゃないの？」

灯りの中で炎が煌々と燃えていた。

手にした一通の手紙を、アルバライト・オーフェはその辺に投げ捨てた。封筒さえもぐしゃりと握りつぶし、弟めがけて投げつける。

「そう思うなら、何故こんな時間にやってくる？」

「っ、それは……」

口ごもったティースは、足元に落ちた封筒を拾い上げた。それを両手で広げてから、数歩進んで手紙を拾い上げる。

短い手紙だった。それでもティースからしたら、彼とのつながりを感じられる大切なものだ。

「準備はもう始まっている。今さら後に引くわけには行かないんだ」

「……うん」

アルバライトは席を立つと、そっとティースへ近づいた。その柔らかい栗毛を優しく撫でて、にこっと微笑む。

「俺にはお前が必要だ。お前だってそうだろう、ティース？」

左目を隠すように長く伸ばされた前髪は、ティースを嫌な気分させる。それでも兄に逆らうことは許されなかった。

「うん、そうだね……」

＊ ＊ ＊

こつこつと足音を響かせて、青年たちが目の前を通り過ぎていく。ここ最近はただ過ぎていく毎日だったが、ようやく変化が訪れるらしい。

黒い瞳をぎらつかせながら外の様子に耳を澄ましていたハティは、遅れてやって来た少年の腕へ手を伸ばした。

「何があっただんだ？」

「っ、離せ……！」

びくっとして白い腕を振り払うギュスター。

ハティはなおも問いかけた。

「お前たちがまとまってここに来るのは初めてだ。何かあったんだろう？」

「しつこいな、お前に教える理由はない」

と、ギュスターは逃げるようにして仲間の後を追った。

「……まあ、予言者がそう言ったなら仕方ないねえ」

黒ずんだ赤毛を手で梳きながら、イズンは呟いた。

檻の前に立ったノーアとダリウス、ギュスターを見上げて当然のように心を読む。

「でも、あたしなんかを味方にして大丈夫なのかい？」

「その点は心配ありません。しばらくあなたには見張りをつけさせていただきます」

「ふうん……でも、あたしが逃げ出さない保証は無いだろう？ もしかすると隙を突いてあんたたちを殺してしまうかもしれない」

すると反射的にダリウスが口を開いた。

「でもシルフは殺せないだろ？」

「っ……」

思わずむっとして口を閉じるイズン。ダリウスはそれを見て、し

たり顔を浮かべた。

ノーアとギュスターが呆れ顔を彼へ向けたところで、イズンが口を開く。

「それで、あたしを使って何をしようっていうんだ？ プロテスタントとの戦いにあたしの力を利用しようって？ それであんたらは得をするかもしれないけど、あたしには何の利益があるのさ？」

「外へ出られます。協力していただければ罪を無かったことにしてもいいですし、ある程度の期間が過ぎれば自由にもなれるでしょう」

「ふん、そんなの興味ないね。だったらあたしは一生、ここで暮らすことを望むよ」

イズンの強い意志を見て取ったノーアは、すると檻の鍵を外し始めた。

「しかし、これは決定事項です。ミス・オードの予言は当たりますからね」

がちやりと開いた扉、目の前に広がる拓けた視界。望みもしなかった想定外の世界を、心身ともに拒絶する。

立ち上がらずにいる小柄な女性の手を引いて、ノーアは無理やり立ち上がらせた。

「あなたに拒否権は無いのです」

「……ふん、それくらい知ってたさ」

と、イズンはしぶしぶ外へ出た。どれほど拒絶したところで、世界はいつだって自分の思いとは裏腹な顔を見せる。それくらい、分かっているつもりだった。

「……お先に失礼するよ、ハティ」

そう言い残して彼らに連れて行かれていくイズンを、ハティは見えなくなるまで見送った。

* * *

翌朝、ユーティアはひどくうろたえた。

「あ、あの……っ、お、おめでどうと言わなきゃいけないのでしょうか？
それとも、改めて初めましてと言わなきゃいけないのか？ あ、いえ、
そんなことよりまずはえーと、自己紹介を——」

「ユーティア、落ち着け」

「は、はい……っ」

ダリウスにぽんと肩を叩かれて、ユーティアは口を閉じると深呼吸をした。

「で、そんなわけだから社会復帰のために、ユーティアにはイズンと友だちになって欲しいんだ」

と、ダリウスは手にした鎖を持ち上げて見せた。その先にはイズンがつながれている。何かしようとしても阻止できるよう、初めの三日間はこの状態だと言われていた。

「……あたしは何もしないよ。こんなものまではめさせられてるしね」

そう言ってイズンは左手首にはめたブレスレットを見せた。銅で出来たそれには虹色に光を反射する魔法石が取り付けられている。魔法を使わせないための抑止装置だ。

「あ、シルフさんが昨日調整してたやつですね！」

と、ユーティアが口にする、イズンはわざとらしく顔をそむけた。その彼の心がまだユーティアにあることを、彼女は知っていた。さっそく不機嫌になったイズンを見て、ダリウスは困った様子で頭をかく。ノーアの提案により決まったユーティアとの対面だが、この様子では先が不安だ。

「友だちじゃないんだから、ちゃんと仲良くしろって。じゃないと、女としてもったいないぜ？」

と、ダリウスは鎖を手繰り寄せてイズンをそばへ置いた。

「そうですよ、イズンさん。小さくて可愛らしいんですから、もったいないです！」

と、とっさにユーティアも後押しをする。

イズンは溜め息をつく、ユーティアの瞳をじっと見つめてまわし立てた。

「怖がるのは勝手だけど、あたしは仕方なく協力してやってるだけだよ。あんたみたいな幸せ者と仲良くする気なんか少しもないし、仲良くしてもらおうとも思わないね。だいたい、あんたは素直すぎるんだよ。もう少し自分で物事考えたり、行動してみようとは思わないの？ それとも、お姫様のように扱われている今に満足してるから、何もしようとしなだけかい？」

「……っ、そ、そんなことないです。わたしだって、出来ることがあるならしたいです」

「じゃあ、出来ることが無いから何もしないってわけかい？ ふん、まだまだお子様だね」

言うだけ言ってすっきりしたのか、イズンは椅子を引くとそこへどさつと座り込んだ。

「まったく、こんな小娘が最高神の宿り主だなんて、笑わせるねえ」ユーティアは唇を震わせ、両目にじわりと涙をにじませた。相手が自分より年上で経験が豊富なのは分かるが、好き勝手に言われて傷つかずにはいられなかった。

ダリウスもその様子には気づいていたが、イズンという人間はこういう性格だ。自分たちもそうだが、それを理解していないと彼女とは上手く付き合っていけない。

「分かりました。わたし、もっと頑張りますっ」

「何を？」

と、顔も向けずに問うイズン。その意地悪な態度にも構わず、ユーティアは言った。

「わたしに出来ることを探します。それで、やるだけやってみます。駄目だったら他のことを――」

「だから素直すぎるって言ってるんだよ。人の言うことを真に受けてどうするんだい？ それが本気かどうか、たとえよく知らない相手でも疑ってかかるのが普通だろ？」

イズンはそう言ってユーティアを見た。

「え？」

「疑って、吟味して、自分にとってその言葉を良い方向へ捉えないと、あんたはいつまでも根暗なままだよ」

「根暗……」

今度は頭が真っ白になった。そんなことを言われたのは初めてだったのだ。しかも相手の言うことはすべて凶星にしか思えず、ユーティアの胸はずきずきと痛むばかりだ。

「素直な上に馬鹿だったのか。まったく、救いようが無いね」

と、イズンは鼻で笑った。心が読めると、こうした言い争いですぐに勝ててしまう。その性質はメリットでもあり、デメリットでもあった。

「ああもう、傷つけてどうするんだよ？　こら、イズン！　ユーティアに謝れっ」

「ごめんなさい、言い過ぎました」

「心がこもってない！」

ダリウスさえも馬鹿にするイズンだが、その表情は地下牢にいた時と比べたら楽しげだ。久しぶりに誰かとまともな会話をするのが嬉しいらしい。

すると、突然扉がノックされた。がちやりと開いた向こうにはシルフィネスの姿があった。

「上手くやれてるか？　心配なんで、ちょっと様子を見に来たんだが……」

しょんぼりと肩を落としているユーティアと、悔しそうに地団太を踏むダリウス、そしてにやにやと意地悪な笑みを浮かべているイズンを見て、シルフは溜め息をついた。

「イズン、ちょっとこっち来い」

と、手招きをすると、彼女はすぐに指示に従った。

シルフのそばまで来て、彼を間近で見上げる。

「何の用だい？」

「魔法石にはさまざまな特性があつてな……ミシュガーナで試す前に、お前を使わせてもらおうと思つて」

と、シルフはポケットから、赤褐色の石に紐を通しただけのネックレスを取り出した。

それをイズンの首にそっとかけてやり、問いかける。

「どうだ？ これでも俺の心が読めるか？」

「……こうすることが、あたしにとって良いことだと思つてるのかい？ だいたい、こんな石ごときであたしの生まれ持った力を封じれるわけ無いだろう」

呆れたように溜め息をつくイズンの様子に、シルフは笑った。

「はは、やっぱり駄目だったか。人工的に組み替えてみたんだが、まだまだ研究が足りないようだな」

そしてシルフィネスはダリウスとユーティアへ顔を向けた。

「付き合いにくいやつだけど、根はそうでもないはずだから、諦めずに接してくれ」

「は、はいっ」

「言われなくても分かつてるし」

「ダリウス、特にお前は注意しろよ？ ちょっとでも仕事をサボる気があったら、すぐにばれるからな」

はっとしてダリウスが気を引き締める。

「メイリアスにも話は通つてるはずだから、大丈夫だとは思うけどな」

そう言つておかしそうに笑った後で、シルフは扉へ向かった。

はっとしてイズンが声をかける。

「おい、このネックレス――」

「お前にやるよ。最初からそのつもりだったからな」

イズンにそう言い返し、さっさと部屋から出て行く魔法使い。

静寂の訪れと共にイズンはネックレスを見下ろすと、そっと服の中へしまった。失敗作でも、彼が仕事としてだけじゃなく、自分のために作ってくれたことがくすぐったくてたまらなかった。

「良かったですね、イズンさん」

と、ユーティアが優しい笑みを浮かべて彼女へ言った。

「ふん……別に、嬉しくなんかないさ」

口を尖らせて感情を誤魔化すイズンを、ユーティアは初めて人間らしいと思った。

＊ ＊ ＊

ミシュガーナがその予言をしたのは、プリンセスの見合いの日のことだった。

ノーアと克蘭ベリーが別室で話している間、ふいにミシュガーナが城下町の方角を見て表情を曇らせたのだ。

「フェイクであっても、新たな盾が必要ね……地下で眠る、人の心を惑わせる力が」

シルフィネスはユーティアと目を合わせ、話を終えて戻ってきたノーアへすぐにそれを伝えた。

しかし、イズンを外に出すには身元引受人が必要だった。そのために後日、彼女の生家であるセアーズ家へノーアが訪れたのだが、両親はそれを拒否した。

「あの子がどんなことになるうとも、もう関わりは持ちたくないんだ」

「確かに同情はします。けれども、今の暮らしが私たちには幸せなんです。それを壊したくはないのです」

そう言って母親が視線を向けた先には、幼い少女たちがいた――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6640y/>

フリーアの娘

2012年1月5日18時48分発行